女鑑

明治三十二年十一月五日發兌

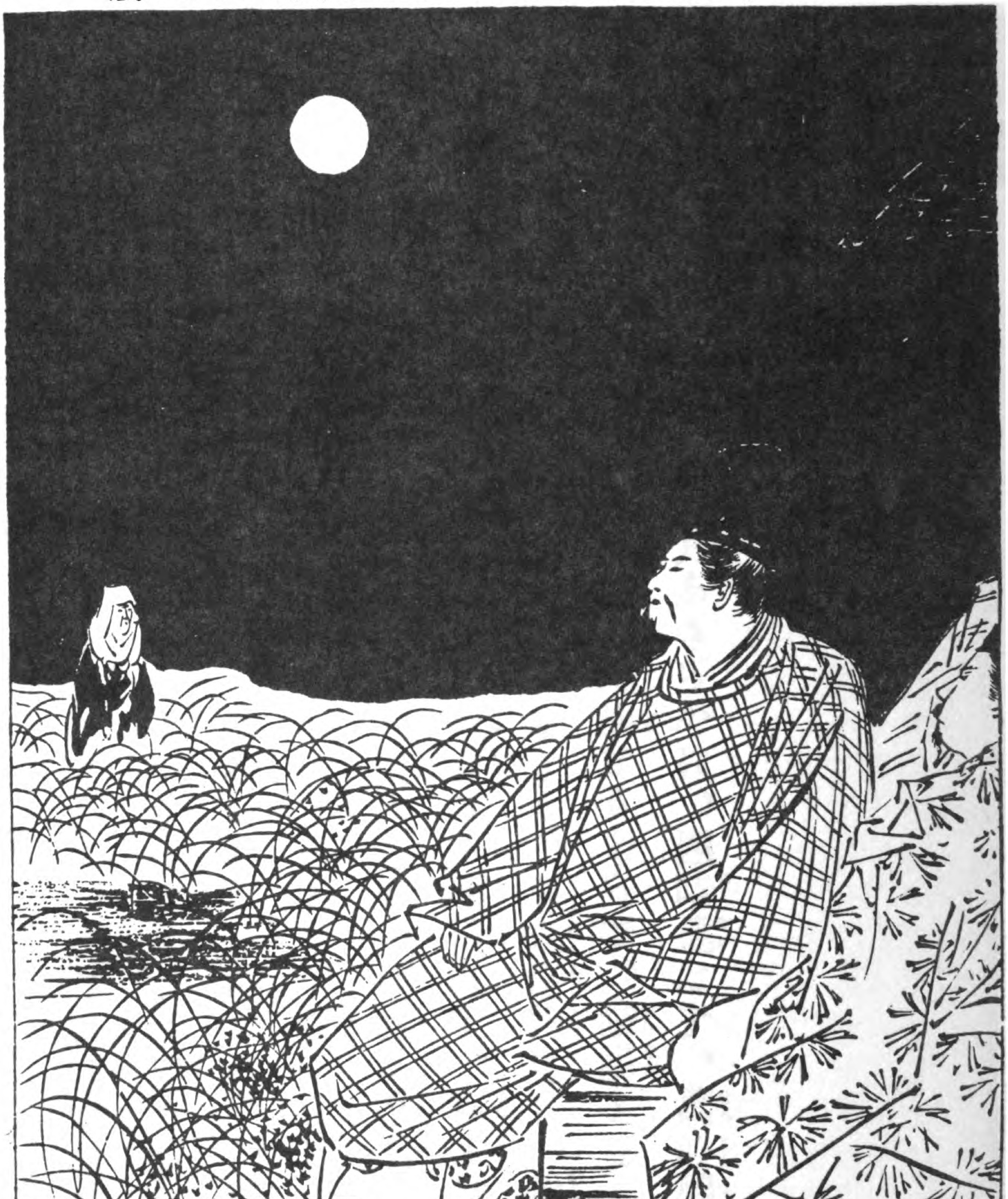
第百九拾貳號

東京國光社



女鑑第百九拾貳號 目録

踏沙被練立清秋　月上長安百尺樓



和德

天地和すれば、陰陽治まり、日月あきらかに、四時違はず、萬心熙々、百穀芃々たり。天地、もし和を失ひて、天變じ、地異なるあらば、陰陽をさまらず、或は霖雨濛々として、地を濕さんか。萬物ひるまなく、惡蟲惡物生じ、物皆腐敗せん。又雨ふらず、旱する事燐々たらんか。萬物成育する事能はず、草木枯死し、百穀乾枯せん。嵐はげしく、樹木をなぎ仆すも、天變にして、地震ひ桑田を海と變ずるも、地異なり。噴火あり。洪水あり。海嘯あり。雷電ある、皆、天地の不和より生ずる所にして、冬寒からず、夏暑からず、或は春おそく暖かならず、秋、早く冷かならず、四時、その時を失ふ、亦た、天地の平かならざるより起る所にして、時の循環少しく違ひ、晴雨の順少しく宜しきを缺きてだに、天下の不幸はいみじく、或は饑

る、或は疫し、物、之がために枯れ。動物之がために仆る。嗚呼世の不幸、天地の不和より大なるはなし。國又、之れに同じ、上は、下を思ひ、夙夜、心忡々、下は上を思ひ、ふしても其の君を思ひ、起ても其の君を思ふ。もし世に餓疫あらんか。上も、下民を思ひ、民を救ひ、國を安んぜん事に大御心をなやまし玉ふ。下は、亦、此の君のためには親をも身をも省みじと思ふ。もし、外あなどりを受けんか。みづく屍、草むす屍、國のため、君のため、身命をなげうちて、ふるつて難に向ふ。螻蟻も力を合すれば、堂を築く。猛虎も孤獨にても、猿猴になぶらる。六國も和を失はずば、暴秦に亡ぼされざりけんを。故に、上、もし、下を思ふの念失せ民のかまどの煙たゝざるを見るも貢を重くし、下は、亦、逆心を起し、鴟張を擅にせば、世は、忽ち、亂れて修羅の巷となり、豺狼、道にうろつき、虎馮、門にかみ、世はなまぐさき風の吹きすさび、干戈の聲絶ゆるまなく、上は令せず、下は營まず、國弊え、民つかる、國家の不戈、實に、之より大なるはなからん。一家も、亦しかり。妻は夫を敬し、夫は妻を愛し、從つて、親を尊び、子をいつくしみ、奴婢をあはれま

は、一家、おのづから化して、和氣あい〳〵、家中、實におもしろく、たのしく、家政もおのづから擧り、榮ゆるものなり。我、之を生理學者に聞く。夫婦、よく和したる人の子は、才德具はり、身體も壯健なり。之に反して、夫婦和せざるものゝ子は、心もあしく、氣もふるはず、身體も、また、すぐれず。殊に瘋癲病者の如きは、之に多しと。誠にしかるや。我、つら〳〵人の家の風俗を見るに、主たるもの善良なるときは、一家よく和し、子も善良に、奴婢も、又、あしからず。不善なる主人の家には、とかく爭論絕らず、子も、また、心かたましく、奴婢も不忠多し。故に、一家は、犬と猿の如く、よれば爭ひあひ、あつまればきそひあひ、叱咤の聲耳に絕たず、一家仇敵の如く、つねにおもしろからず、をかしからず。家政もふるはねば、心もおのづからかたましく、氣もすぐれざれば、身體もおのづから不快なるべし。あはれ、千金の家の子も、互ひに食みあひでは、ねぶるまも枕を高うする能はざるべし。一夕の米も、兄弟あひ分ち一尺の布も、姉妹あひ分かち、互ひにしたしみ、あひむつまば、粗食も味あり、かさねぬふすまも、又、あたゝかるべし。あ

はれ、一家の幸福は、鼓服のたのしみにしくはあらじ。而して、一家の和は、婦人の、尤もあづかる所にして、和は善良公順の心ならでは、行ふ能はざるなり。あはれ、一生の幸福を得まく思ふ孃たち、必ず心を善良にして、一家の和を求むべきなり。



婦女子と海事思想

肝付兼行

女子は、謂ふまでもなきことながら、良妻となりて、家政を主宰し、又、賢母となりて兒童を敎育するの任あるなり。故に、吾人、第二の國民となるべき所の兒童をして、海上的大國民たらしむるか、陸上的小國民たらしむるかは、一に、此の家母たる女子の魔力如何に決するなり。敷島女子の我海國に負ふ責任も、亦、實に大なりと謂べし。

頃日のことなりき。我、海軍に於て、准將校たる主計官を學士に募るの擧あり。我、知友にして、法學博士たる所の某官人、之が、委託を受けて周旋の勞をとり、漸くにして五人の應募者を得たるに、日を經ること數日、其の五人の應募者は、皆、避く可からざる事情の爲に前約を履行する能はず、前約は、何卒取消を願ふとの書を官人に寄せたり。而して、其の事情とは如何なる事情なるかと索ぬるに、驚くべし。皆、揃ひも揃うて、家母の不承諾にありきと。嗟、是、予が、夙に、我國家の爲に抱ける所の矯風的希望に對し、又、各地に於ける、今日迄の演説の爲には、實にかの一發百日の説法を無にする所の泄氣なりと謂はざるべからず。何ぞ圖らんや、我敷島女子にして、而も學士の母たる人に、此の忌むべく厭ふべき、非海國的陋習の、猶未だ去らざらむとは。予は、實に、我海國の爲に、天を仰いて哭慟せざるを得ざるなり。從來吾將校志願者の陸軍に多くして、海軍に少なき所以の因たるや、是れ、必ず、一にして足らずと雖も、此の海洋を地獄視する家母の舊弊的腦髓の如きは、蓋し、其の因中最も有力ならむ。貴女よ、以て如何となす噫。

之に反して、茲に、最も羨むべき快談あり、去る明治十八年のことなりき。我演習艦筑波號のニユージーランドに航し、其のオークランドに至るや、該港市の市會議長グラハ

ム氏、其の他同議員、及び、其の夫人令嬢等は、名にし負ふ英國殖民地のことゝて、海軍士官を待つこと、甚厚く、我艦員を歡待厚迎するに、是れ日も足らざるの熱情を以てせしが、グラハム氏は、某地の海岸に温泉の噴出する別莊を所有せるを以て、我艦員を猶之に迎へむとして止まざりき。乃、我艦長も、其の好意を辭する由なく、竟に、其の地に回艦せむことを約せしが、偶々海軍省より飛電達し、急ぎ出艦せざるを得ざるの都合に至りぬ。是に於いて、艦長、一士官を陸に遣り、以つて、前約に背くの謝辭と、訣別の辭とを、グラハム氏及び其の他に告げしめんとせしが、時に、風吹いて、海面波甚だ高し。乃ち、艦中屈指の漕手を選拔して、一艇を艤し、之を陸に向はしめたり。忽ち觀る。此の風波をものともせす、一艇の、帆を張り、我艇と行き違へて、我艦に向ひ、快走し來るものあるを。忽にして、其の艇の、我艦に達し、艇員の舷門に上り來るを見れば、總員八名、悉く、妙齡の婦女子にして、一人の男子を伴はず。即ち是れ、過ぎにし數日、我艦員の爲に、歡待厚迎の勞をとりし、淑女の、可憐にも、我飛電を新聞紙に瞥見して、惜別の情禁じ難く、せめて、今一回の交語握手を、我艦員に行はむとして、來訪せるなりき。爾時、之を目前にしたる我艦員は、皆「アングロサクソン」民族の、世界に雄飛し、其の領土に日沒を見さるに至りし所以の、偶然ならさるを、今日始めて、眞

に解せりと謂うて、此の擧動に、痛く嘆服したりとぞ。予も、亦、此の談話は、いつ、いづくに於いて、之を爲すも、毎に、精神に壯快を覺えて、止まざるなり。即ち、此の女子ありて、英國あり。英國ありて、此の女子ありと謂ふべし。曰はく「アングロサクソン」民族、曰はく大和民族、嗟、是均しく、海國民にあらすや。夫れ然り、而して、其の風俗に、天淵の別あること、斯の如し。予は、實に、羨望に堪へさると仝時に、又、實に、嘆息に堪へさるなり。要するに、自今、彼れの長を取りて、我か短を補ひ、以つて其の懸隔著しき、彼我の國力をして、接近せしめむと欲せは、敢へて、彼れの國風を、崇拜するに非されとも、宜しく、先つ、彼我の風俗をして、接近せしむるに努めざる可らす。我か敷島女子たるもの、亦、大和男兒と、共に、猛省一番、奮起する所なかる可けむや。

（未完）

日本女子今後の覺悟（八）

三輪田眞佐子

舊慣は、俄に改め難きものなればにや。既に述つるが如く、わが國民の境遇は、悉く、變更せしに、獨り、身を攝し、体を養ふ一事ばかりは、舊來のごとくなるは如何。見よ、舊來、わが國民中、佛教の感化にて、精進を行ひしが、その餘風、いまだ婦人に、多く存し、おのづから肉類を忌む傾向あり。亦、牛乳の如き、臭氣ある食物は、なべて、この

まざる偏僻もあり。從ひて、澱粉質の多き食物を嗜むより、常ならず肥滿するか、然らざれば、顏色蒼然として骨立するに至るあり。或は靜淑の意義を誤解する影響にや。數時間長座して動かざるため、胸部は更なり、一般血液の循環を妨ぐるあり。亦は、体を少しく屈し、胸部を縮むるを以て、小心翼々たる姿と誤信するあり。その他、この類枚擧に遑あらず。されど、此等は、皆、今後改良すべき女風なりと言はざるべからず。

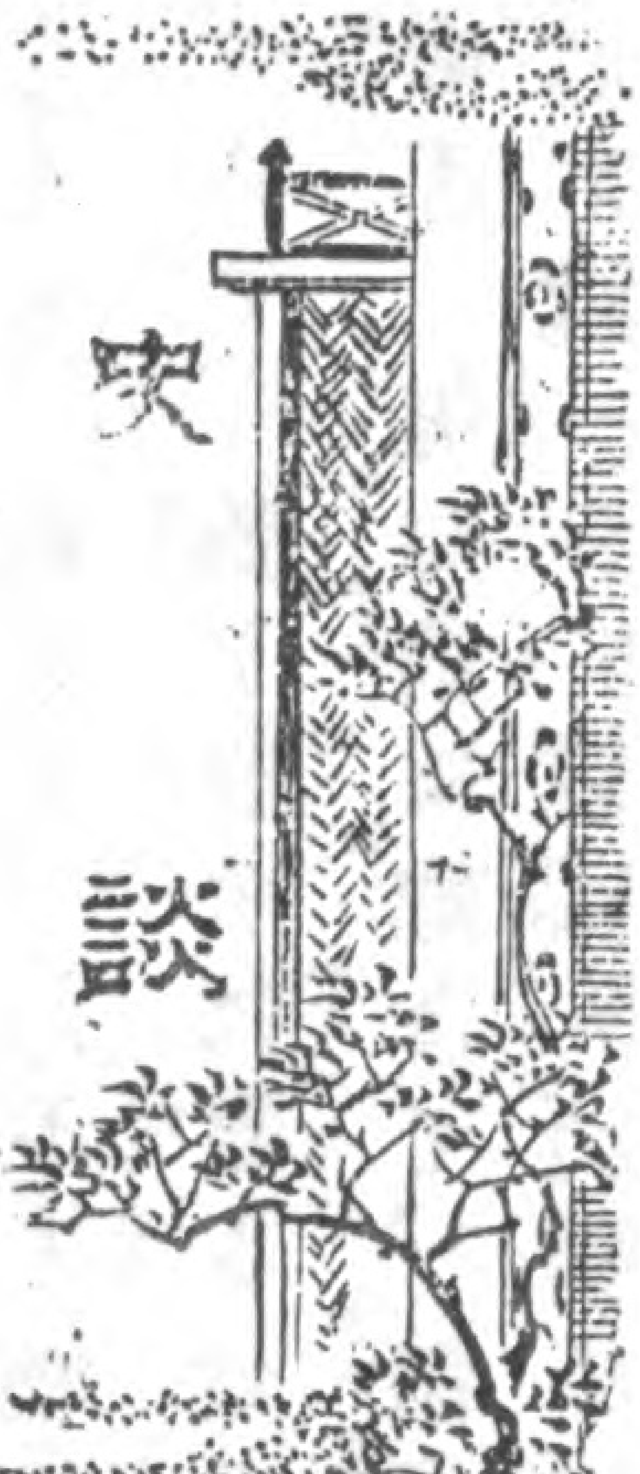
最も、戒むべきは、美の標準なり。古來識者は、然らざるも、風俗の社會に於ては、胸部挾く、四肢細く、しかも粲白の色あるものを以て美人とおもひ、さながら、うはの空にて、影や絶ゑなん、彼の夕顏めきたるものを絶世の姿と誤了するもの多かりけり。尚、今日も、さるもの少なからざるべし。然るに美を愛し、醜を惡むは、人の常ならん。わきて、美貌を願ふ婦女は、いかでか雪膚柳腰を望まざらん。故に、美人の標準、柔弱にある限りは、婦女の体格を軟弱に導かんこと、自然の結果ならん。

次に、体育は、女德を亂すに至らんと、杞憂して躊躇するものあり。果して体育なるもの女德を害せんか。たとひ、身体は滅死せんも、德を以て、体に代ふべからざれば、その杞憂に與みすべし。されど、熟ら考ふるに、体育のみに重を置きて、德育を顧みざら

んか。必ず、女德の敗頽を見るに至らんも、德育と体育と相待ちて、權衡を得んには、反りて、好き結果を奏すべし。

そも〳〵、身と心とは、互に影響し、互に關係するものなり。諺に健全なる心は、健全なる身体に宿るとは、畢竟、身が、心に影響するをいふなり。孔夫子の心廣体胖なりと言ひける、その意は、心が、身に關係する例とも見るを得ん。なほ、これを日常の實例に徵せんか、病弱の人は、業に倦みて、堪忍の德を守ること難く、亦、憤怒し易くして、神經を激動すること多きものは、身体の衰弱すること著しきものなり。されば多少の異例はあらんも、概して、心を有德にせざれば以て、体を養ふに適せず、亦、身無病にせざれば、以て、德を致すに足らざるを知るべし。おのれ、既に五十路の坂を越ゆれども、毎朝、必ず、五時前に起きて、洒掃をつとむ。一は、女事を務めて、女德の一端を盡し、一は運動の道を得て養体の法方に充つるなり。さればにや、天資弱き身にも拘らず、今日まで、格別の持病はなかりけり。蓋し、兩三度流行症などにかゝりしかど、その時、醫師はいと危しと言ひけるも、心を嚴正に執りしためにや、失神もせざりけり。獨り、就蓐久しきに及べは、従ひて、元氣の衰弱するを覺えけり。由りて、自ら經驗上、心身相關の理を悟りぬ。勿論、身体衰弱するに逆比して、神經は、過敏になるがごとく、身の

孱質なる人は反りて、志氣は激烈ならんも、その志氣を實行するに當りては、必す、質の、事を爲すに足らざるを歎くに至るべし。あはれ玉の如き心を懐きながら、身の、これに伴はざるため、實行する能はざるものは遺憾は、果して如何ばかりなるらん。



大江朝綱の婢

鹽井ふく子

柊の山に、他の樹木をうつせば、その樹花して、柊となり。冬もなほ葉を落さずと云ふ、血に交はれば、赤くなると云ふたぐひにや。村上天皇の御代に、大江朝綱といふ、やんごとなき博士ありけり。いみじき學生にて、年ごろ、その道につけて、おほやけに仕へまつり、いさゝかも心もとなき事なくて、宰相までなり、上のおん覺えもめでたく、又、文を好む諸士等も、多くは、此の人を尋ね、その道をとへば、小倉の山のくらきかげもなく、あきらけくぞなりにける。その家は、二條と京極とになんありければ、東の川原はるかに見わたりて、霞のあした、雪の夕べ、殊に月の夜はてりかゞやきて、おもしろくぞ見亘されぬる。されば、明月に駒を走らして、此の樓にとかけつくる月卿もあれど、白雲をかき分けてとふ雲客もありけるを。年七十路あまりにて、はかなくなりにけり。あはれ、花落ち、体開く幾春、かけてはみち、むかしかはらぬ月かげを見る幾秋、八月十五夜の月のいみじくあかりけるに文花

章を好むともがら十餘人、伴ひて、月をもてあそばんために、故朝綱の二條の家に行かんと云ひて、その家に行きけり。その家を見れど、ふるくあれて、人げもなく、家ども　皆傾きて、たゞ檜屋ばかり、僅かに殘りけり。すみ亘る空の月はむかしに變らねど、かはりはてたる、此の家のさまに、人々そゞろむかしを忍びつゝ、やぶれたる椽に居並みて、月を興じ、からうたたうひける。むかし唐のなにがしが、八月十五夜に月を見て、踏沙被練立清秋、月上長安百尺樓、と云ふ詩を作りけるが、それを人々詠じなどし、故朝綱の文華の微妙なりし事など語りあひけり。

をりしも、故朝綱につかはれたる婢の老いたるが尼になりて、ひとり、此のあれたる屋を守りけるが、さらでもむかし忍ぶの軒、すみぞめの袖のいと露けかりしを、今夜の月、見るまゝにすぎにし方の忍びがたくてありけるを、かく人々の語るを聞きては、いよ／＼悲しく、したはしく覺えて、立ち出で、こは、誰れ人のかくは來てあそび給ふぞと問へたゞ月を見んために來たるよしを答へ、又、尼が身をも問ふ。尼は　故宰相殿につかへなれたるものにて侍り。此の殿に男女の仕へ人あまたありしかど、みな死はてゝ、尼ひとり、今日明日も知らずで侍るなりと答へければ、道を好む人々、これを聞きて、そゞろあはれを催して、月もくもるまで泣く人さへありけり。

尼はすみぞめの袂をしぼりて云ふやう、そも殿原の、月は長安の百尺の樓にのぼると詠じ給ひけるが、故宰相殿は月によりて、百尺の樓に上るとこそ詠じ給ひしか。これは似はべらず、何しに樓には上るべきぞ。人こそ月を見んがために樓に上れと云ひしに、人々げにもとて、みな涙をながして感じ、尼の何者なりしかを問ひなどす。尼は故朝綱の物はりにて、ありけるが、故宰相の詠ぜしをほのかに聞き覺えけるなりとぞ。人々、いよ／＼感じて、よもすがら尼を主人に、月の傾くをも知らで談りつゝ、皆、かづけものして歸りけるとな

り。かく云ひがひなき女すら、かくの如し。朝綱が文華さこそと思はるゝと語り傳へたるとなり。げに、朝綱の家風の化したるものとは云へ、又、みやびの女子こそ。

烈婦栗女の事を記す

終南生

栗女は甲斐の國田中村の百姓の女なり。幼き時、父母を失ひ里正の家にかゝりて、養はれけり。性質素直にして、心やさしく、やうやく、手足の業に堪ゆる頃より、恩人のために、忠實しく立ち働きぬ。人の上は、惡しざまにのみ言はま欲しがる世の人も、褒むる者こそあれ、得毀らざりけり。然れど、里正も、いとほしがり、二なき者におもひ愛めり。かくて成年にもいたりけれど、女一通の資裝を與へて、同村なる安兵衞といふに嫁しめぬ。安兵衞の父を、六右衞門といふ。七十歳あまりなりき。栗女よく、之をいたはり、孝養の道を盡し、夫に仕へて亦、貞順を極めたりき。樂しき中に、四五ケ月ばかりをすごしけるが、安兵衞、ふと病にかかりぬ。人の、最も忌むなる癩病なりけり。はしたなき痴者は、弱き身の氣の毒なるめにあひつるよ。疾く夫を捨てゝ、里正の方へ歸るが、身のためぞなど、そのかすものもありき。栗女は、耳にもかけず、是より、田畠のことは、一人して取り行ひ、病夫の看護、亦、決してなほざりなることゝてはなかりけり。斯く、いとまなき身にて、若し、舅、六右衞門が、野原へ出で遊ぶことなどあれど、湯茶を持ち行きて、樂を添へ、遠くゆきて、歸りの晩き時は、村外にまで迎ひて、扶け戻りぬ。さて、些の暇あれば、紡績し縫濯などして、ともかくも、老いたる人、病める夫に不自由なからしめたり。初め、とやかくそゝのかしゝ人も、この行をみて、いたく、わが非なりしことを耻ぢ、村人も、かかる貞婦あるは、わが村の名譽なるべきぞとて、稱へ

たりき。
享保十三年の七月の朔日ごろより、雨をやみなく降りつゞきけるが、八日にいたりて、暴風さへ加はりぬ。老松古杉の動ぎわふおと、甚すざまじく、雨は唯、盆を覆すが如く、大地にうちつくるひゞきいと物すごし。河水はにはかに漲り溢き、堤防は破れ、日暮るゝ頃より、後の山に、水の難を避けむとて、罵り合ふ村人の聲々は、雨の音、風のひゞきにまじりて、世は宛ら戰などの始りたらむが如し。この時にあたり、栗女の夫はといへば、病は、其の手足を爛潰するまで惡うなり、既に起臥さへかなはざりき。生命さへ、實に長かるまじう見ゑけり。

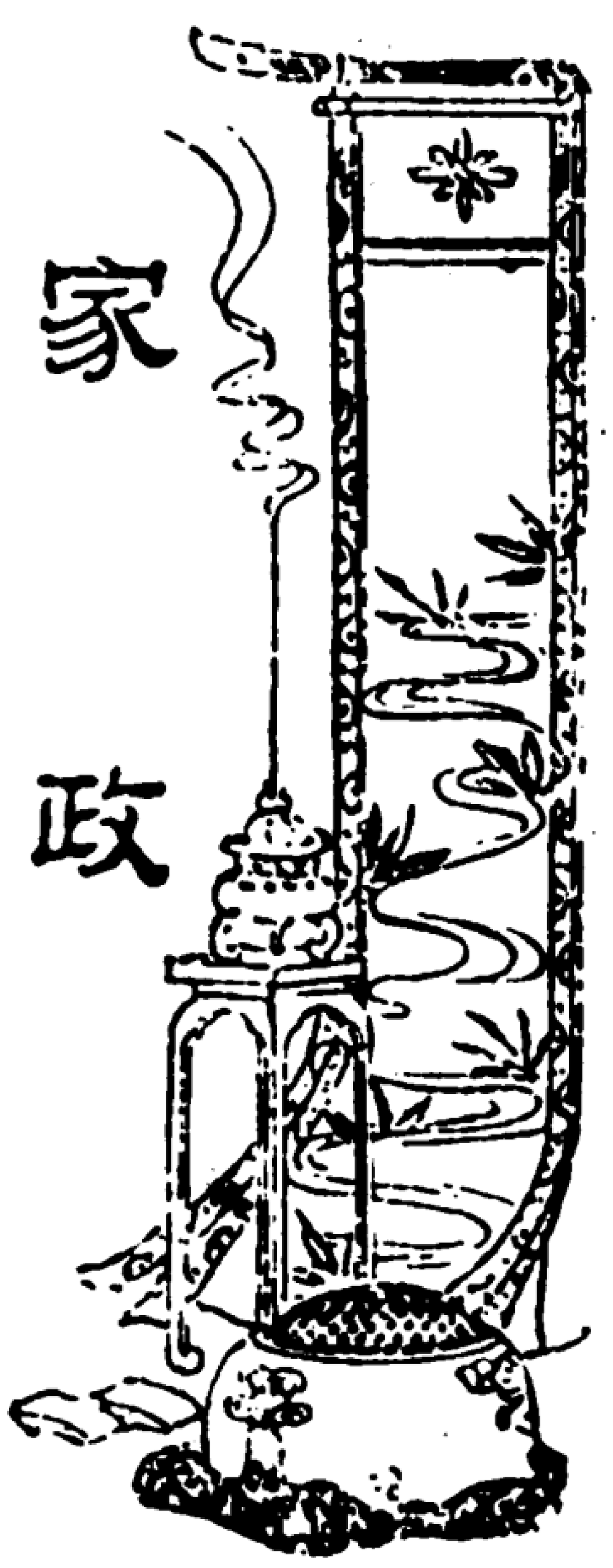
扶け出さむとする妻をとゞめ、疾く山へゆけ、汝つきそへまゐらすれど、父の御上は心元なからず。疾く疾く。さて、今までの介抱、親への孝養、又、わが、躰の醜汚をも厭はで、貞節を盡しくれしこと、生を易へても忘れぬぞかし。とても長からぬ生命今死なむこそ願うてもなき幸なれ。とかくいふ中も危からむ。疾く避けよと促しけれど、思はずなることを聞きたる栗女は、夫婦たるものゝ、斯の期におよびて、ひとりのみ生きよとは、何事ぞとうらみけれど、夫は覺悟をひるかへさず。折から、水近きぬ。後れなむ死なむぞと聲たてゝ泣きわめくこゑ聞ゆ。栗女は、つッたちあかりて、舅を門外に伴ひ、走せゆく男等をひきとめて、其が上を、賴みきこえければ、舅は、汝等夫婦ゆかざれば、我もゆかじとて又動かず。栗女涙をのみつゝ、承りぬ。老いたる御上は、足も遅うおはせど、先づ行かせ給へかし。夫を負ひて直に追ひ付き侍らむとて、老舅の着更、田地の典劵等を、油紙につゝみて、男等にたのみやり、さて、夫の側に戻りゆきぬ。

洪水は、遂に村に來りぬ。村の家々を奪ひさりぬ。憐むべき病夫をも、貞節類ひなき烈女をも奪ひさりぬ。されど洪水は、貞節の志にしたがひて、彼の女をして、病める夫の側に、千歳萬歳の後までも侍べらしめぬ。

後に村人、之を聞きて、皆不便がり、惜しみなげきて、各、錢をいたし、懇に冥福を修せり。領　官小宮山某も、之を聞きて、いたく、其の貞烈を感じ、具に、其の狀を幕府に聞え、金を賜はりて、老いたる人を安からしめ、又、烈婦の碑を立て、、永く、其の德を旌せり。

世には、子を目して、夫婦のかすがひといふ。子あるがために、漸く夫婦の名を維持するなり。又、多く嫁入せむとする時、舅姑なきを擇ぶ。既に老いたる人を厄介視す。一旦嫁ぎて後、其の家、急に零落せしを厭ひて去るものあり。己が、豫想の如く、放逸縱遊をゆるさずとて、去るものあり。況んや、自若くして、いまだ、子なきもの、、不治の病にか、れる夫に、際限なく、妻とよばる、ことを甘んずるもの、如きは、愚にして、最も所謂甲斐性なきものといふ。あはれ、栗女の貞烈、之を、今日に得むと求むるも容易に得べからず。あゝ慨しきかな。

編者曰はく、栗女の傳、既に本誌第百十四號の本欄に掲げたりき。友人緑雨氏之を知らず、多忙の中に、この一篇を寄贈せらる。其好意を空うせむも、本意ならざるのみならず、是はまた、いさゝか彼に比して面目を新にせるところもあれば、即ち之を掲ぐることゝせり。讀者之を諒せよ。



茶の湯

茶禮初學（承前）

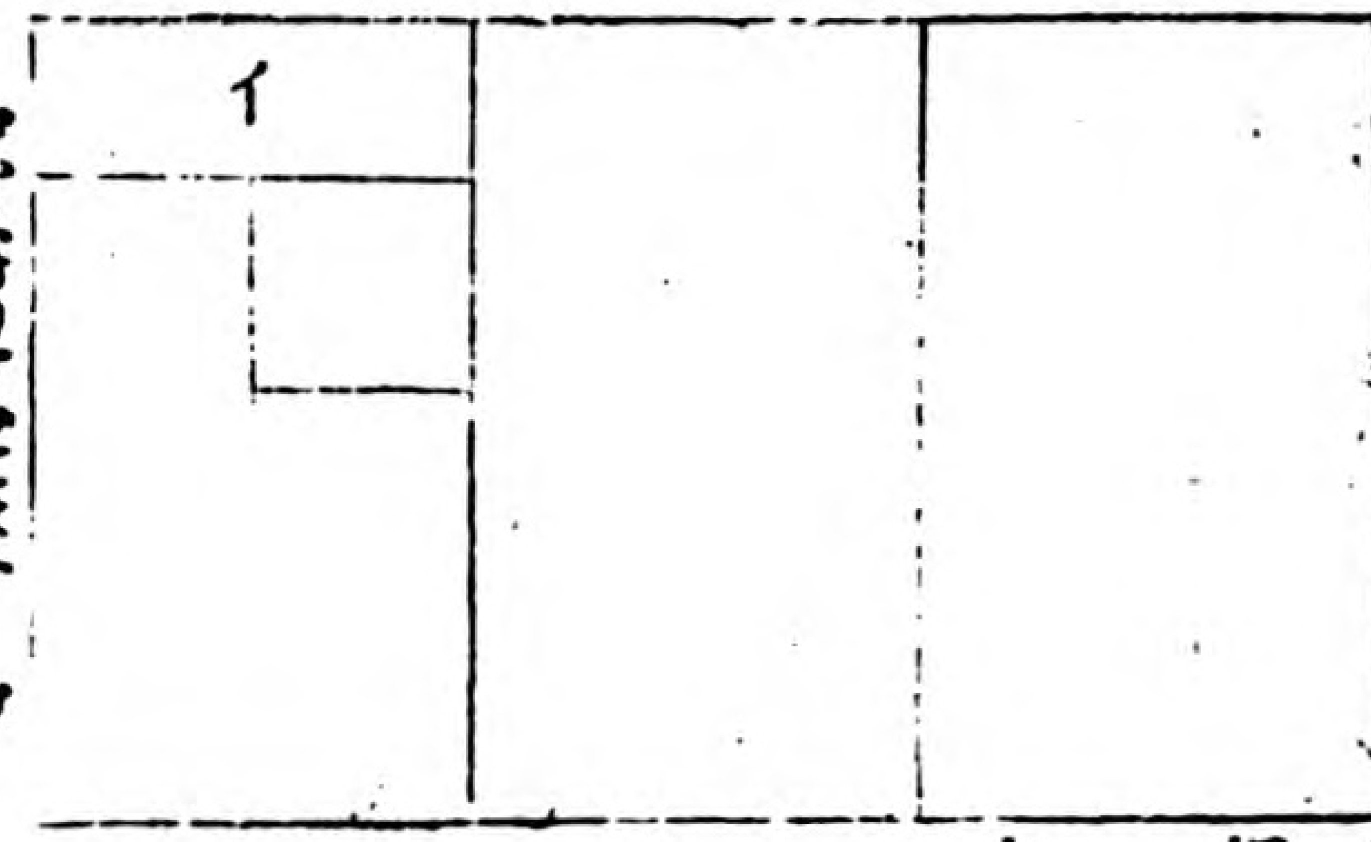
孤峰庵碌仙齋不美

關　葦雄

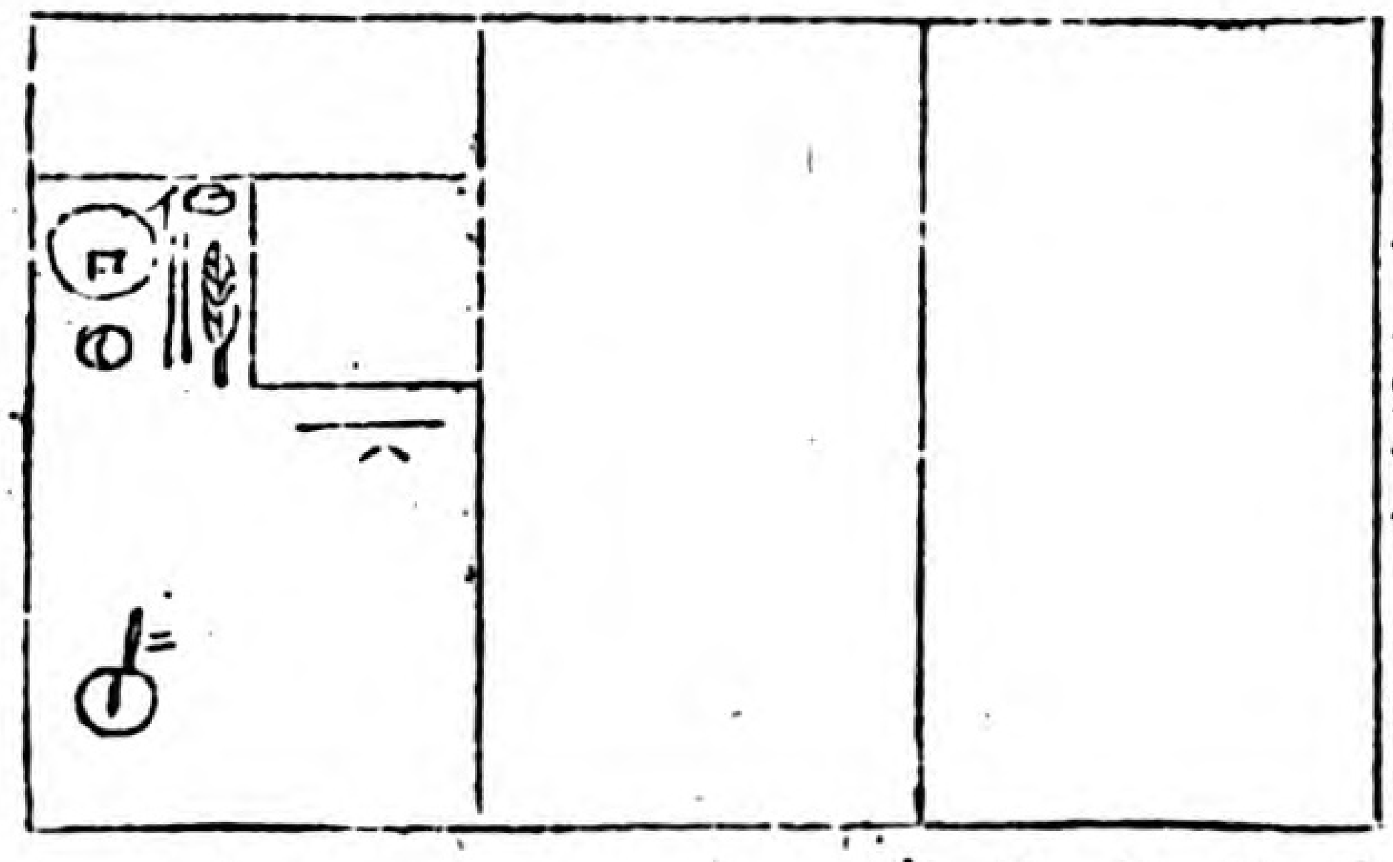
向切右手前向板入圖

但席は、床の有レ之方を上座とするなり。

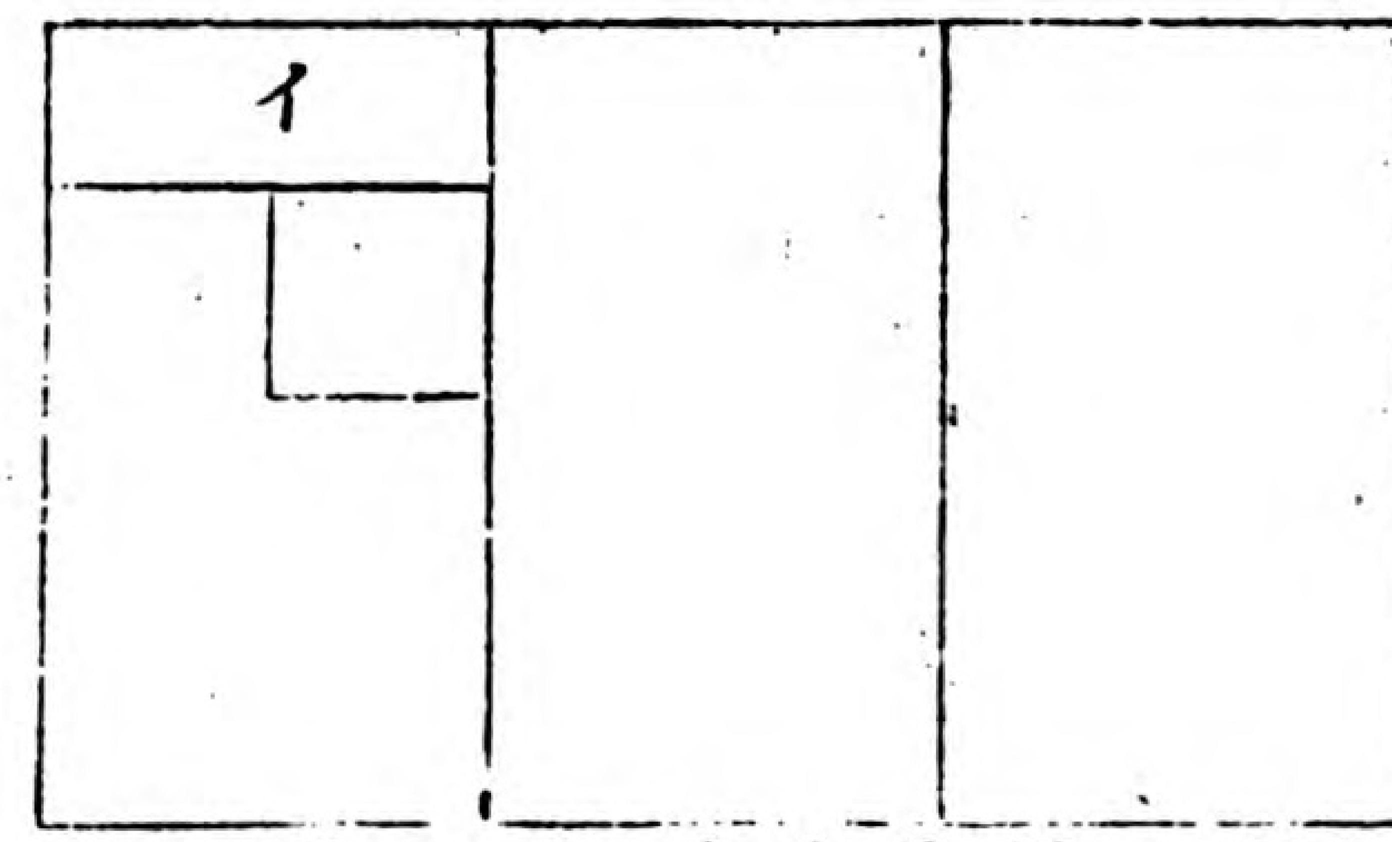
向切炭手前の圖



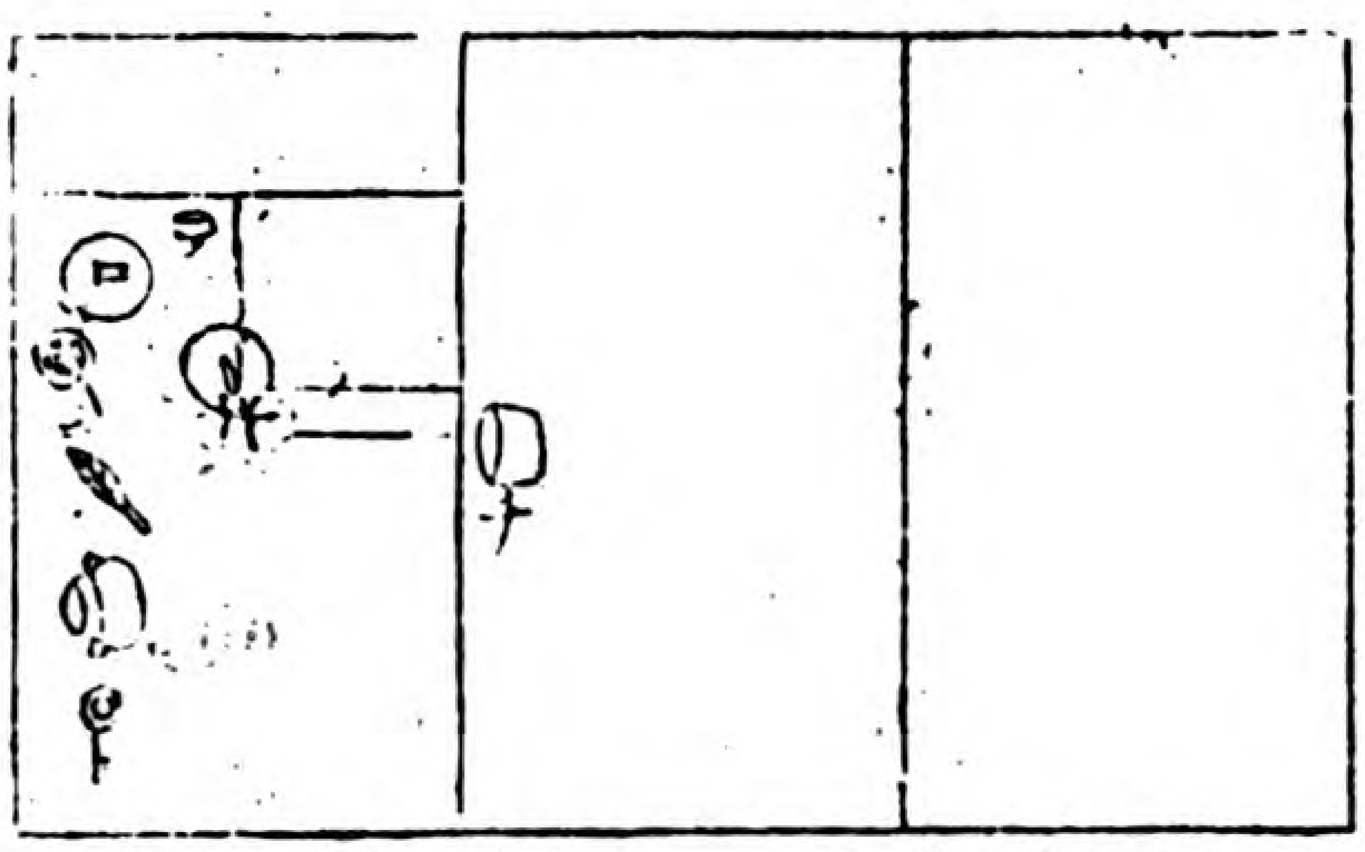
イ、は向板なり巾一尺五寸七分



イ、香合
ロ、炭斗
ハ、除
ニ、鐶
ホ、灰方
六



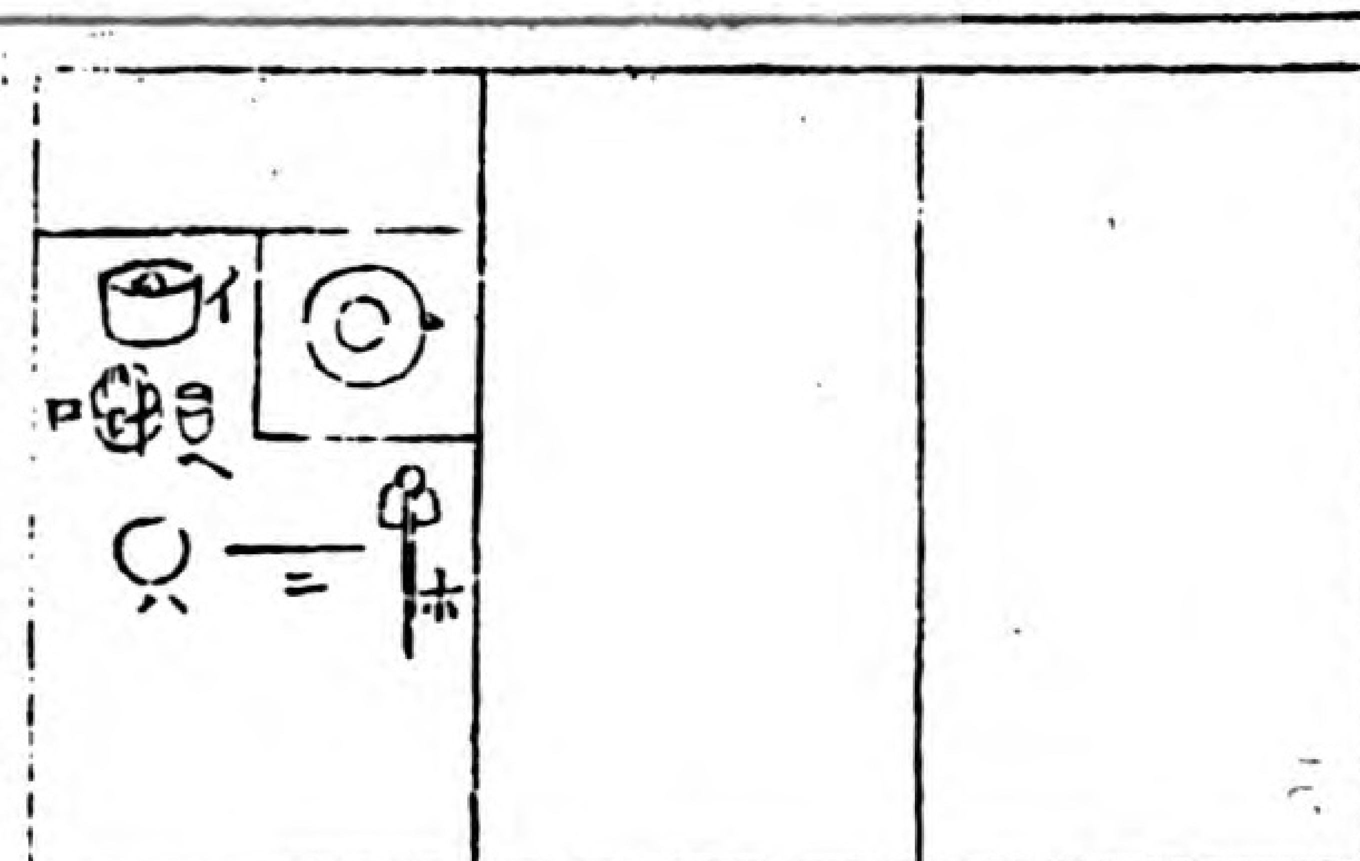
イ、は向板巾同前
ロは小板杉巾一寸八分丈一尺四寸
ロ、はイと爐さの間にあり



イ、香合
ロ、炭斗
ハ、枝炭
假置
ハ、灰方
六假置
ホ、釜
ヘ、方六
灰まく時
ト、鐶
チ、香合所望され出す所

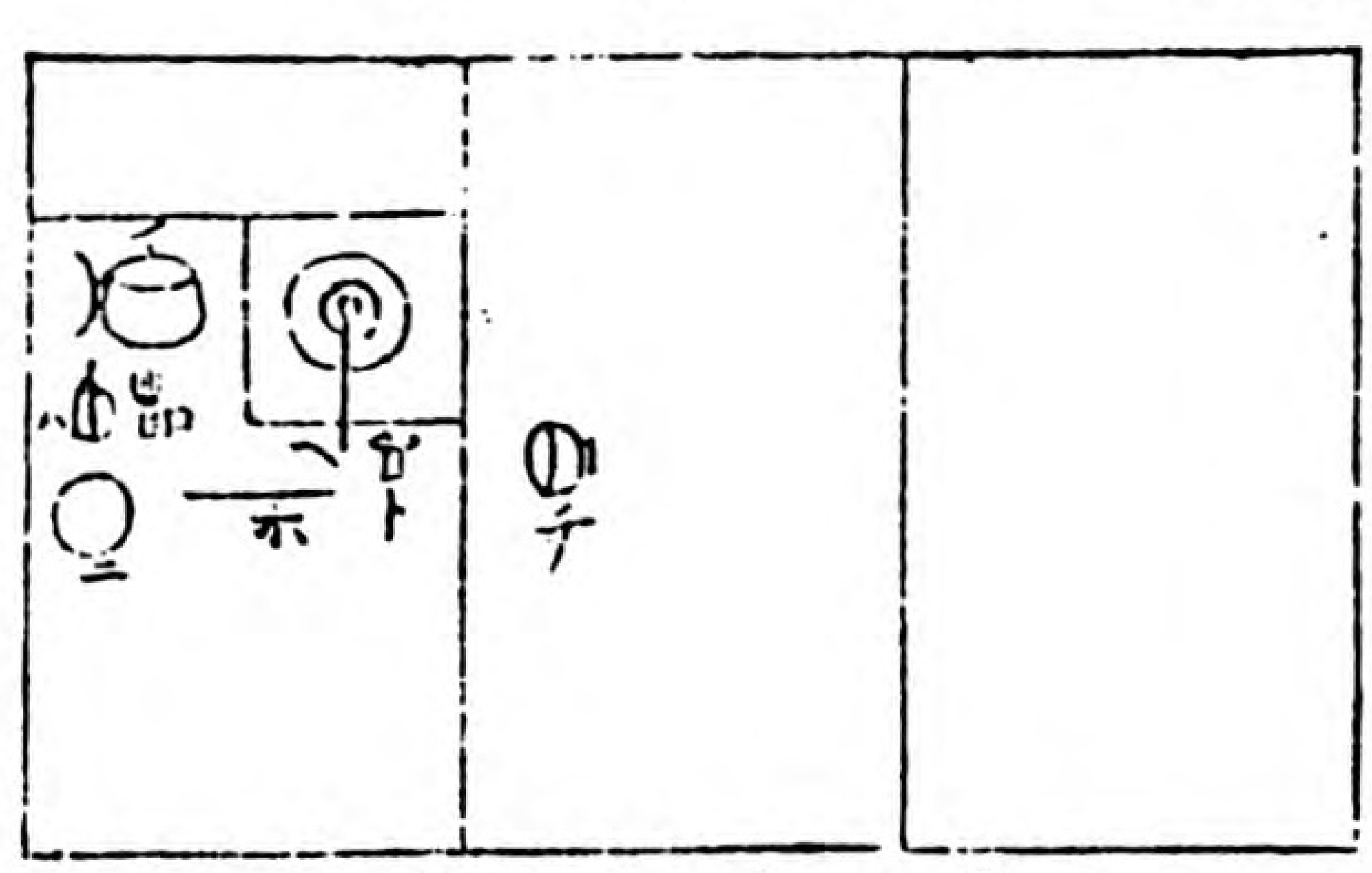
同薄茶手前の圖

茶具置合既に點前にかゝる所



イ、水指
ロ、茶碗内茶巾茶筅茶杓フチにかける
ハ、こぼし
ニ、居前
ホ、柄杓
ヘ、蓋

薄茶點し客に出したる所

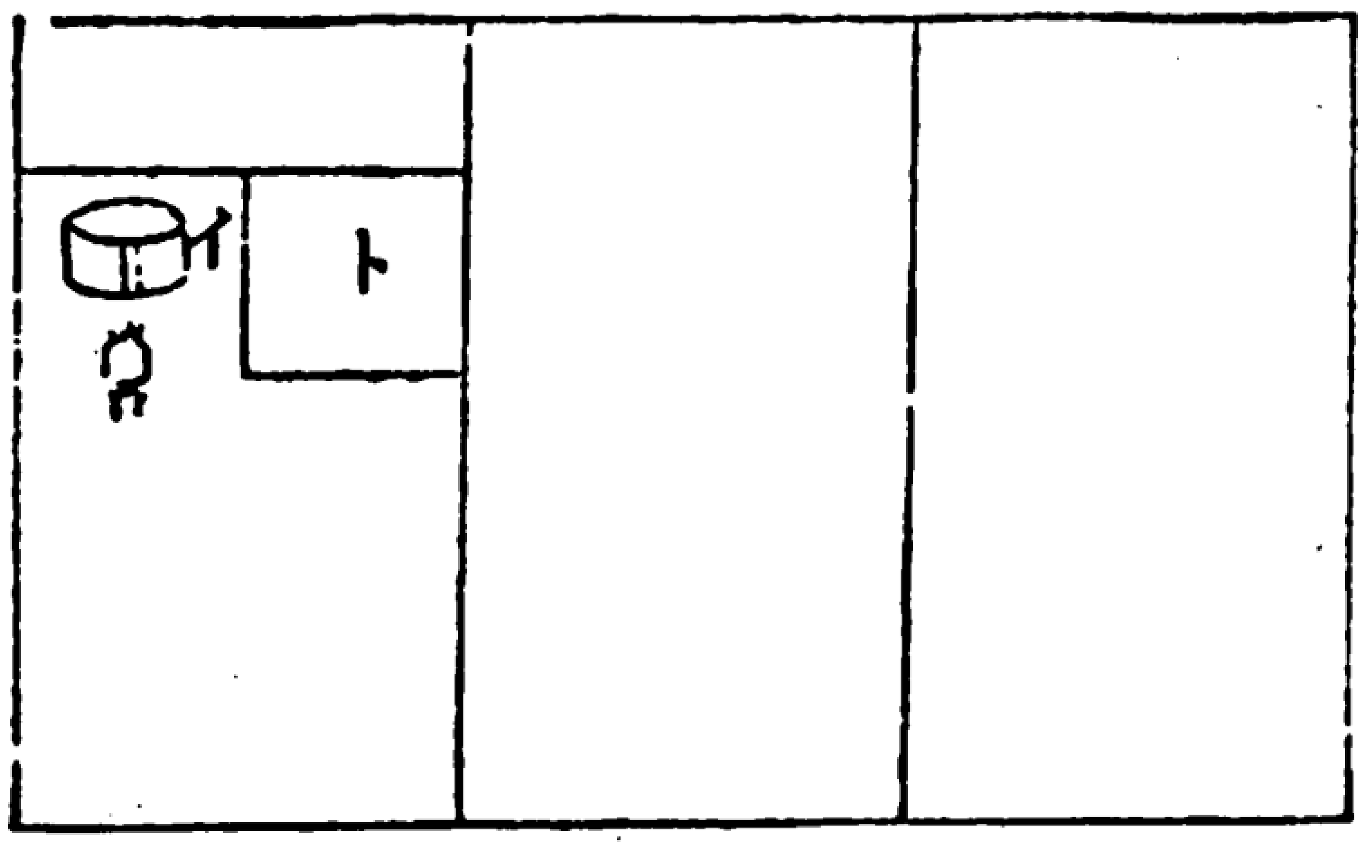


イ、水指
ロ、茶筌
ハ、薄茶入茶杓
ニ、こぼし
ホ、居前
ヘ、柄杓
ト、蓋
チ、碗

註釈、不佞曰、此の向切本勝手は、圖式の如く置合を異にする迄にて、手續に至りては、差異、毫もあることなし、當點前の餘地なき故に四疊半に比較する時は、點慣きものなり。能く身體を攻めて、所謂器用に可ニ點口馴なり。又、隅に釣棚ある席は、柄

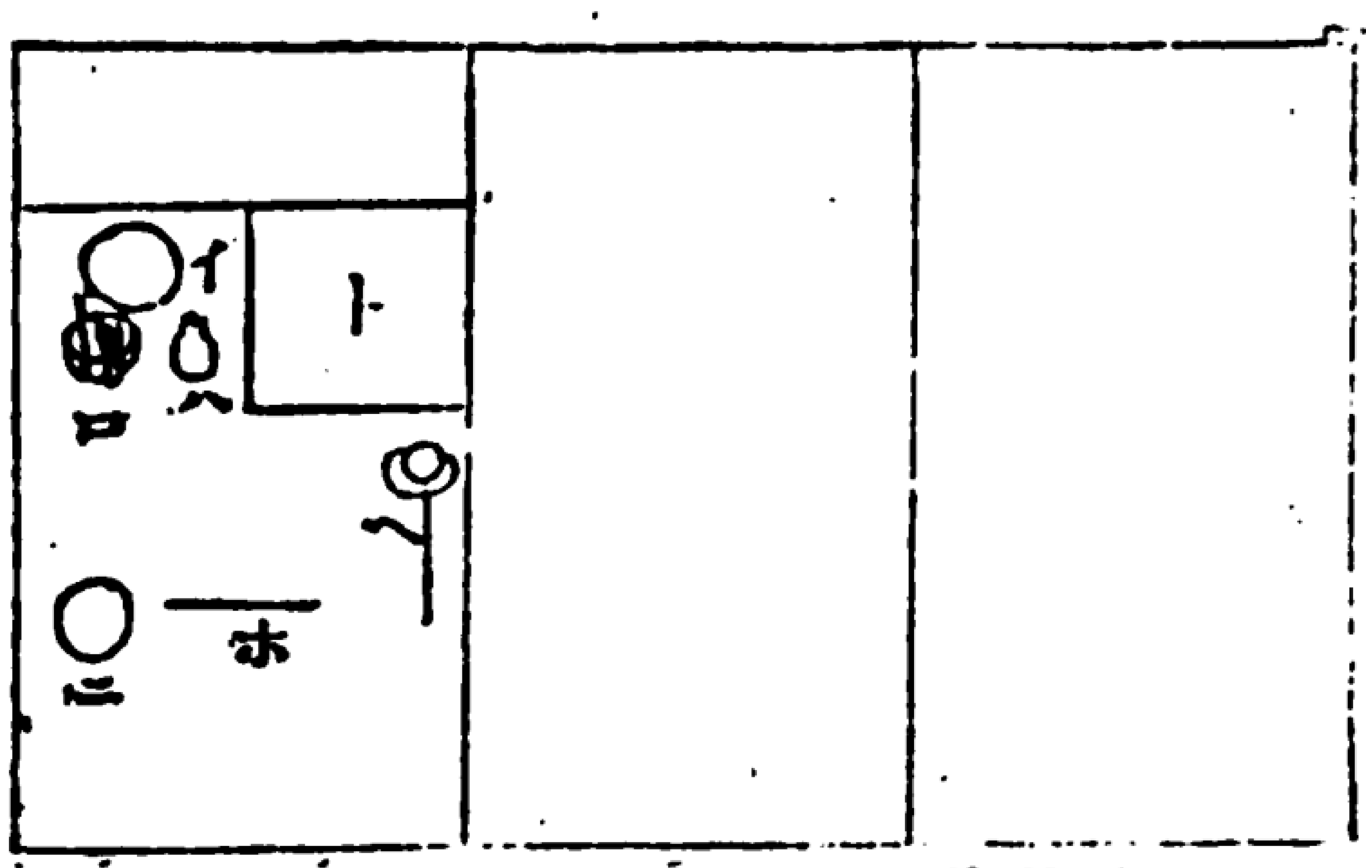
杓殘す事もあり。此の時は湯返しなし。是、則、勝手に置も同じ主義なり。濃茶薄茶共に同樣、亦、香合羽箒と置事もあり。薄茶器を置事もあり。

向切炭濟後客方迎へ入時圖



イ、水指
ロ、茶入
ト、釜

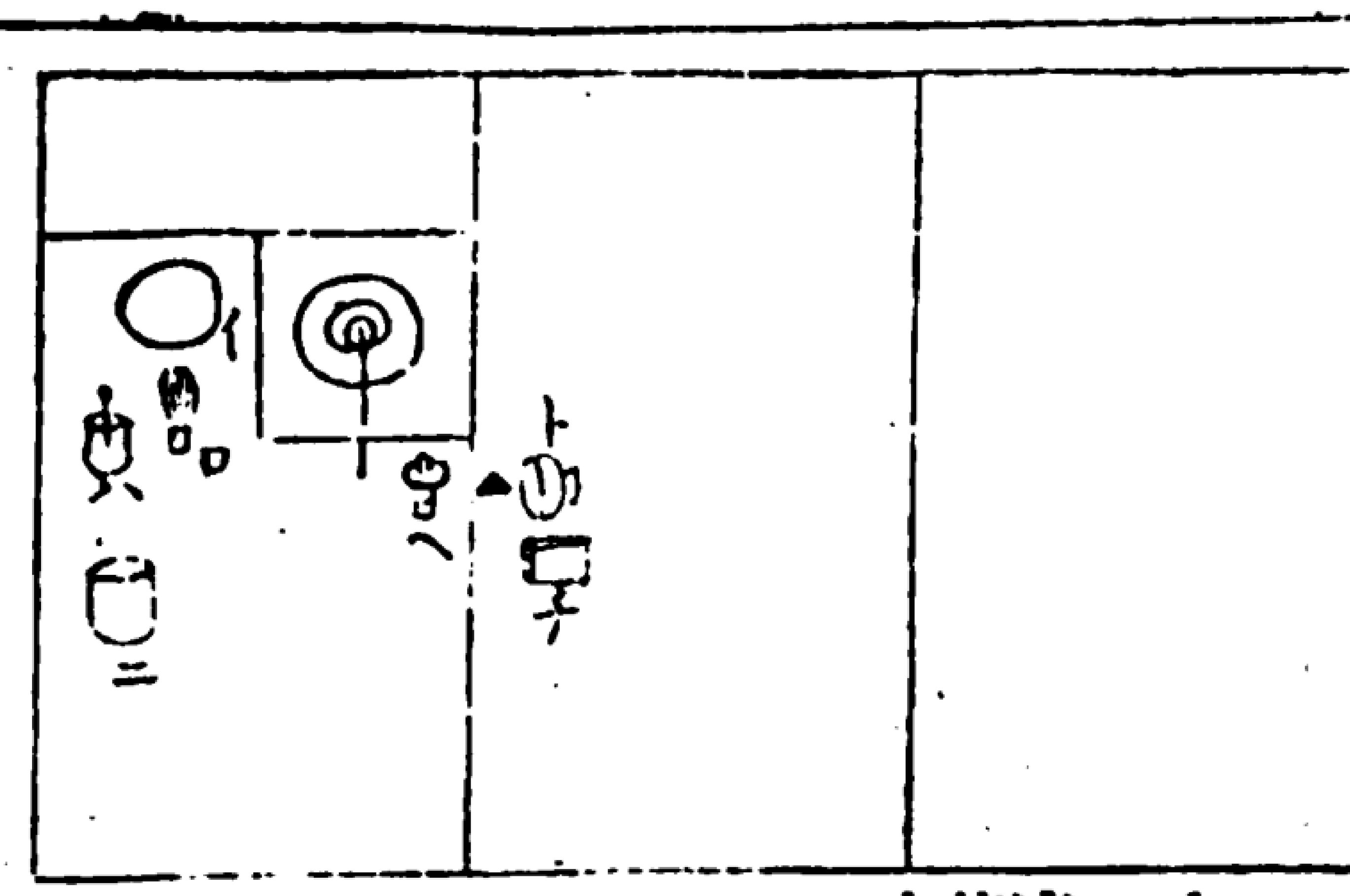
既に客迎ひ入れ點前に掛る時の圖



イ、水指
ロ、茶入
碗組合〆
ル盌内ニ
茶巾茶筌
仕込茶杓
フチにか
ゝる
ハ、茶入
ニ、建水
ホ、膝
ヘ、柄杓
下ニ蓋置
イ、釜

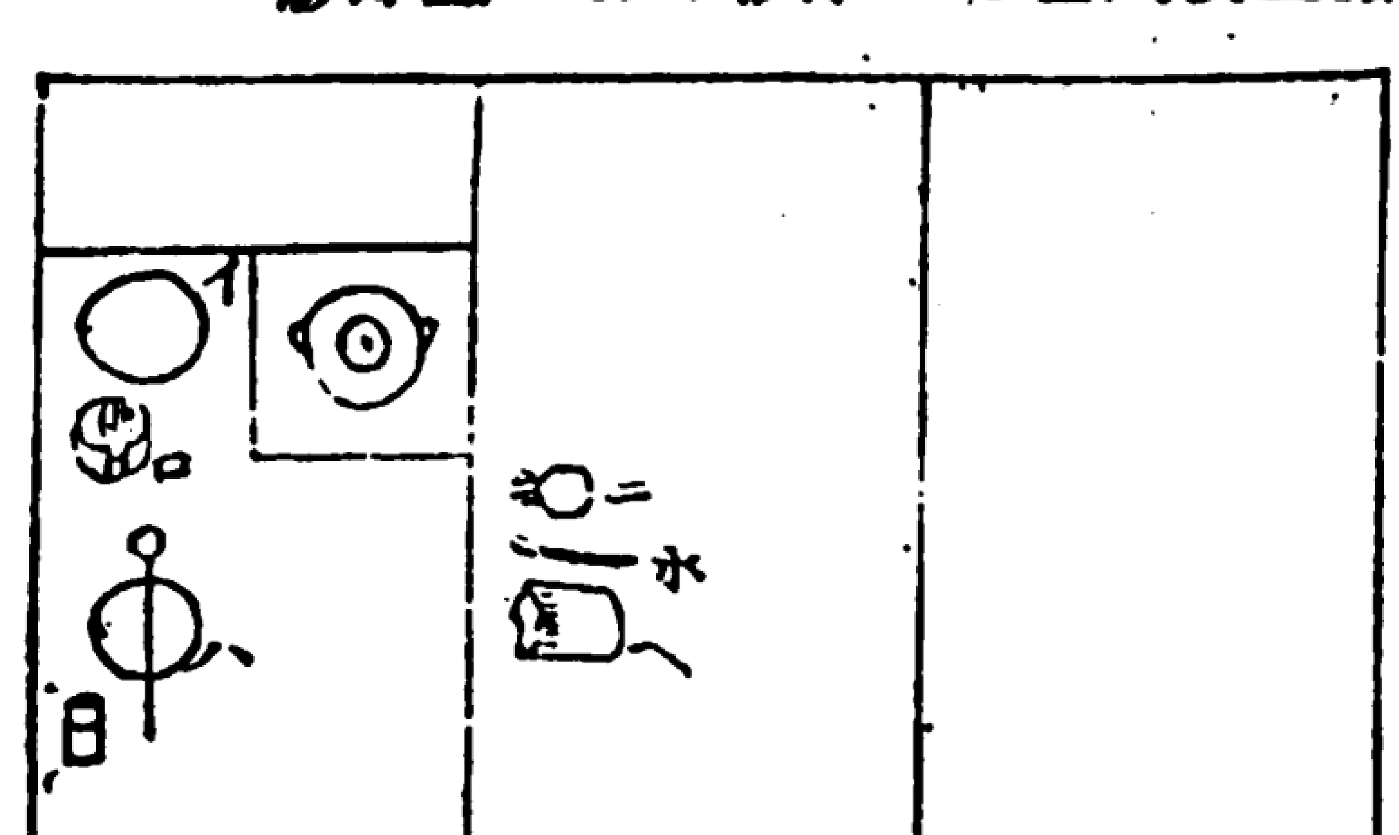
點前、膝、爐ふち、勝手の方(但し左)外隅を眞に取圖の如し。釜の蓋、大の節は、疊緣より外へ出す。

即ち▲印の所



イ、水指
ロ、茶筌
水指の眞
ハ、茶入
流して置
茶杓手な
りに置、
ニ、建水
ホ、柄杓
の柄置く
へ、かま
の蓋
ト、茶點
て出す即
ち、帛紗

客方道具返すも、是の反對なりと可心得



イ、水
ロ、茶
假座
ハ、建水
上ニ柄杓
掛り此時
は合な落
す柄の通
りにふた
な置
ニ、茶入
ホ、茶袋
ヘ、袋

女禮

臨時の客の應接(四)

三石直子

暑き頃にて、主人より、團扇さしあげよなどおほせ給

仕の者は、勝手にゆき、体よきものを撰びいだし、柄の方を、客人の、少し右の方へむけてさしおくべし。此の頃は、萬新趣向を競ひ、はては、唯、珍しきを衒ひて、卑しげなる飾を加へ、不風流の畫など書き散したるが多かり。不圖したることにても、人の心の見ゆるものなれど、是等も、かねて、注意しおくべきことなり。又、新しき扇子いだす時には、帯をとり、裏表とも、親骨のところにて、手の掌を、一二篇たゝき、一旦開きて、又、元の通りたゝみて持ちいづべし。

料紙硯箱を、客人の前に出すことあらば、能く、流塵を拂ひ、水滴の水に心付け、小刀も、必ず添へて出すべし。硯箱に水滴なくば、勝手方にゆき、硯の中へ、程よく水をいれ置くべし。扨て、巻紙封筒等を、硯箱の上に載せ持ちいで、先づ、自分の前に置き、紙など取りのけ蓋を取りて、墨を摺り、筆の鞘を抜きて、硯箱の中へ入れ、筆は、硯箱の上の縁へかけ、小刀の鞘を外して入れ置き、紙封筒を、客人の前に、硯箱は、右の脇に、蓋を、其の脇へ出して下るべし。蓋は、晝は伏せ、夜は仰向けておくべし。模様などある者ならば、夜も伏せおくべし。又、夜など下る時に、能く、書くに暗からぬやう心づくべし。又、粘、入用らしからば、硯箱に、粘入あらば其へ。無くば、小皿の類に入れ、盆に載せて、硯箱の向へ置くべし。若し、粘有りあはさずば、手早く飯をおし摺り、水にて和げて、代にするもよし。

時分になりて、遠方の客人などへは、掛合の茶漬等を出す事もあるべし。主人は、よく老弱疾病など、客人によりて、献立を仕組み、庖丁加減せしむべし。

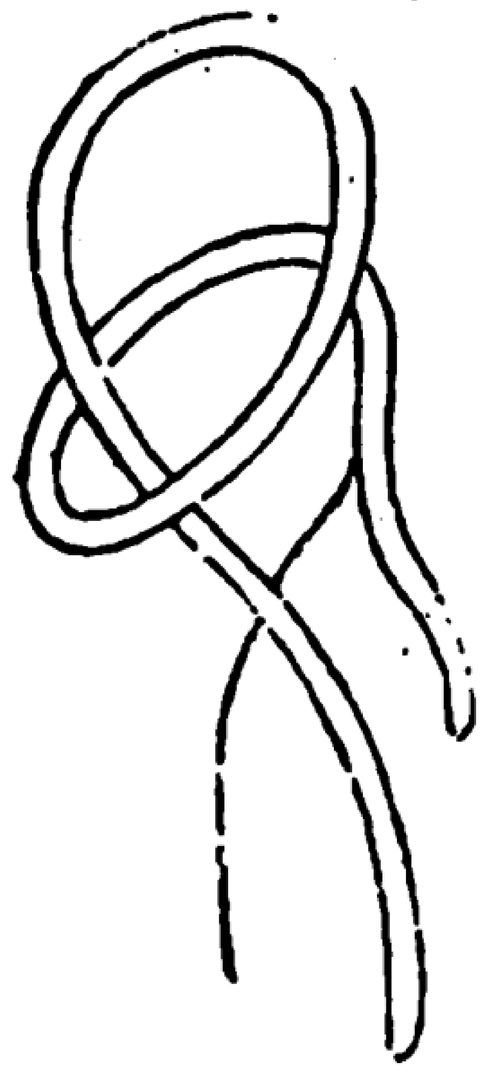
酒いづる時には、給仕は、鼻紙を懐中して、銚子を持ちいで、自分の前へおき、酌は客人の手などに掛らぬやう見斗ひ、丈夫につぐべし。酒の燗は、銅壺にても、茶釜にても、湯煎にすべし。必ず、直燗にすべからず。又、燗徳利は袴の箱なくば、盆の上に置

くべし。若し酒、其の外、穢れし時は、懐中の鼻紙を取りいだし、雑とふくべし。澤山にこぼれし時は、二三枚、鼻紙をかぶせおき、手早く、勝手方より、雑巾手拭等を、ざつとたゝみ持ちいで拭くべし。

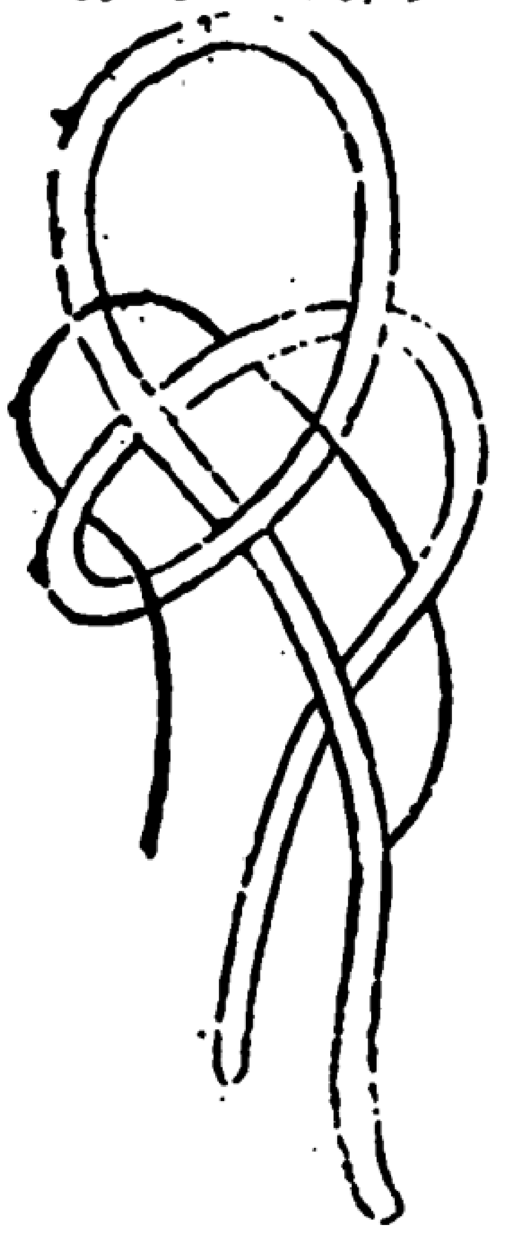
結方

中島義一

(第一圖)

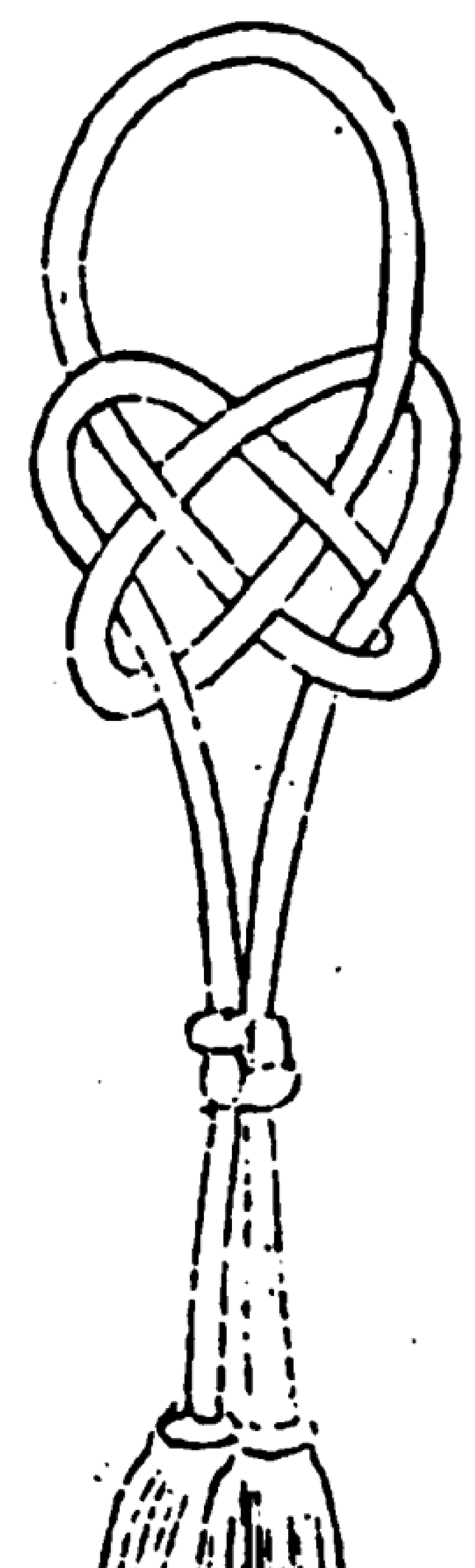


(第二圖)



総角〆

(第三圖)



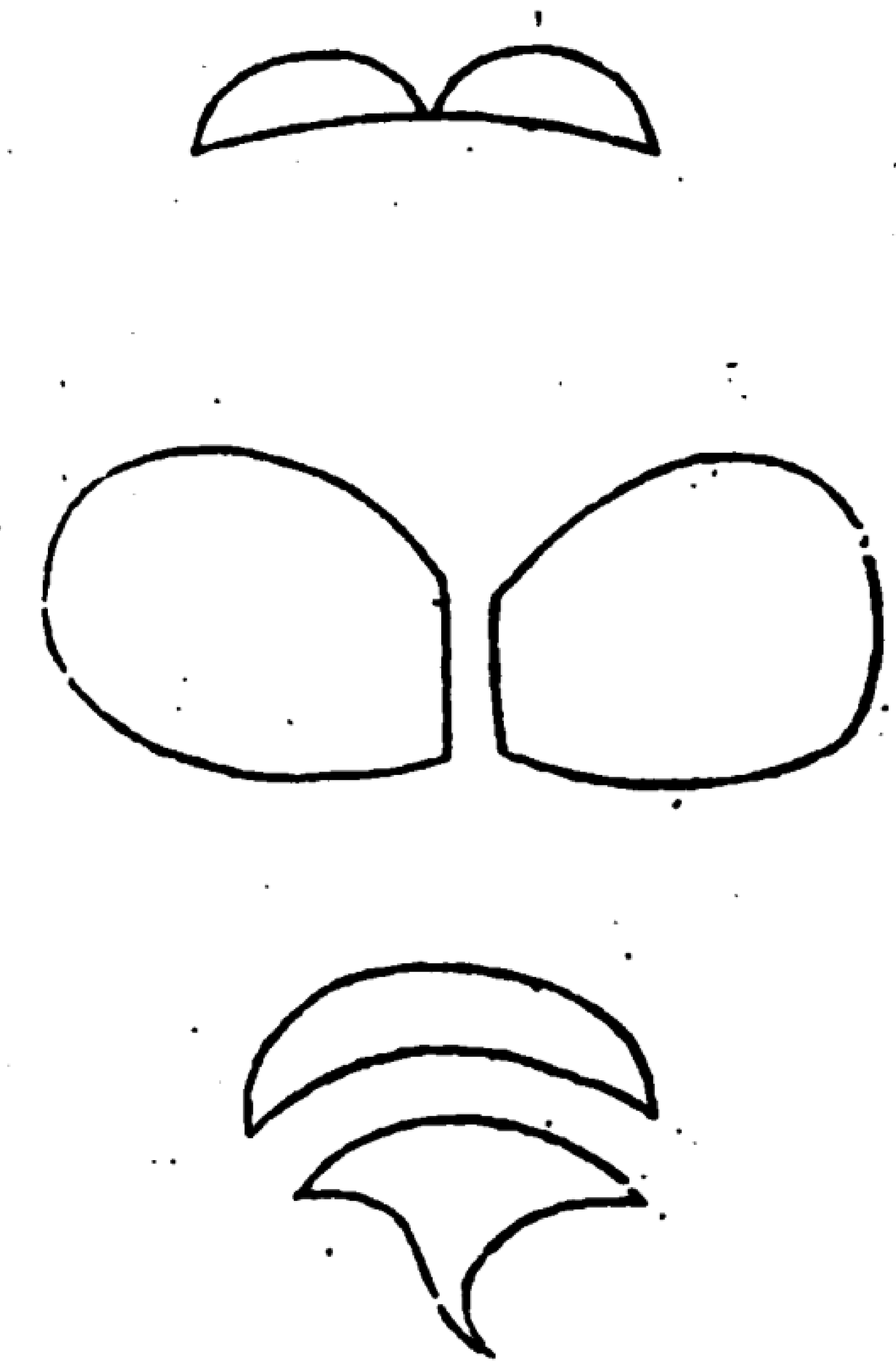
小笠原流の結方の記に、佛具に用ゐる事ありあれども、僧侶の褥に、四方の角に用ゐたりとあれば、六曜結の次に出したるなり。

たちぬひ

西山たい子

背負守（前承）

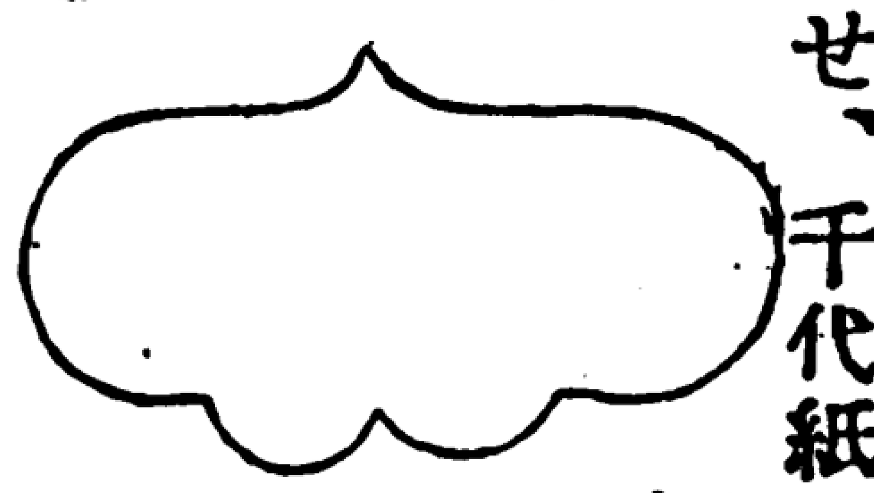
之は、何形と申すにや、同じく厚紙にて、左の圖の如き形をつくり。之に綿を入れて、切を被ひ、くみ合すべし。



組み合せたる圖



かやうにみく合せ、千代紙にても、畫學紙にても、裏をかやうの形に切りて、はりつくべし。又、

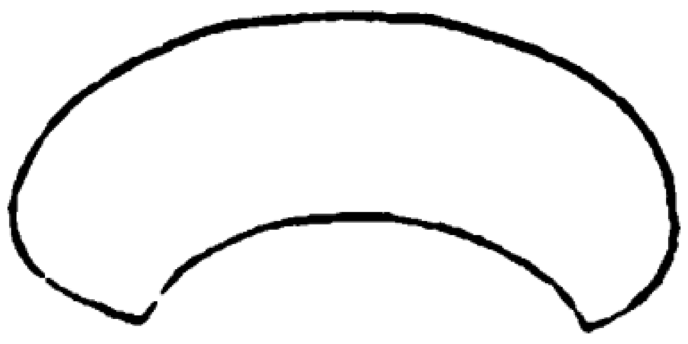


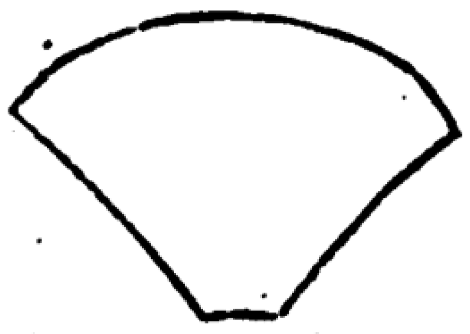
＊組みあがりの圖中にかやうの



ものあるは、すが糸をはさみ入れしなり。色どりは如何やうにてもよろしく、されど、なるべく美くしく、手ぎはよくすべし。

同じやうなる形なれど、かやうにするも、又、おもしろし。まづ厚紙を、かやうの形に切り、丸き方に▲





▲は、綿を、少し、多く入れ、三角なる方には、少く入れ、各、切をさせ、かくの如くに合せ、其合せたる下に、すが糸を垂ら※

※し、その上を、

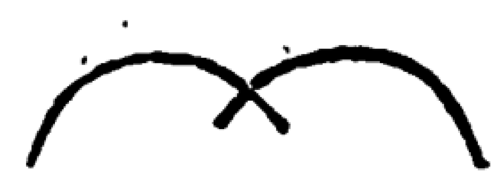


かやう

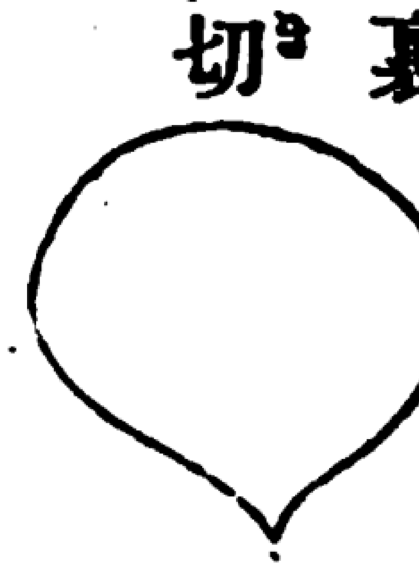


の形に厚紙を切り、紙を被せたるものをはりつけ、上に、

は、大白の糸を、かやうの形にして、の



りにて、裏がはにつけ、裏の紙を、かやうの形に切りて、はりつくべし。

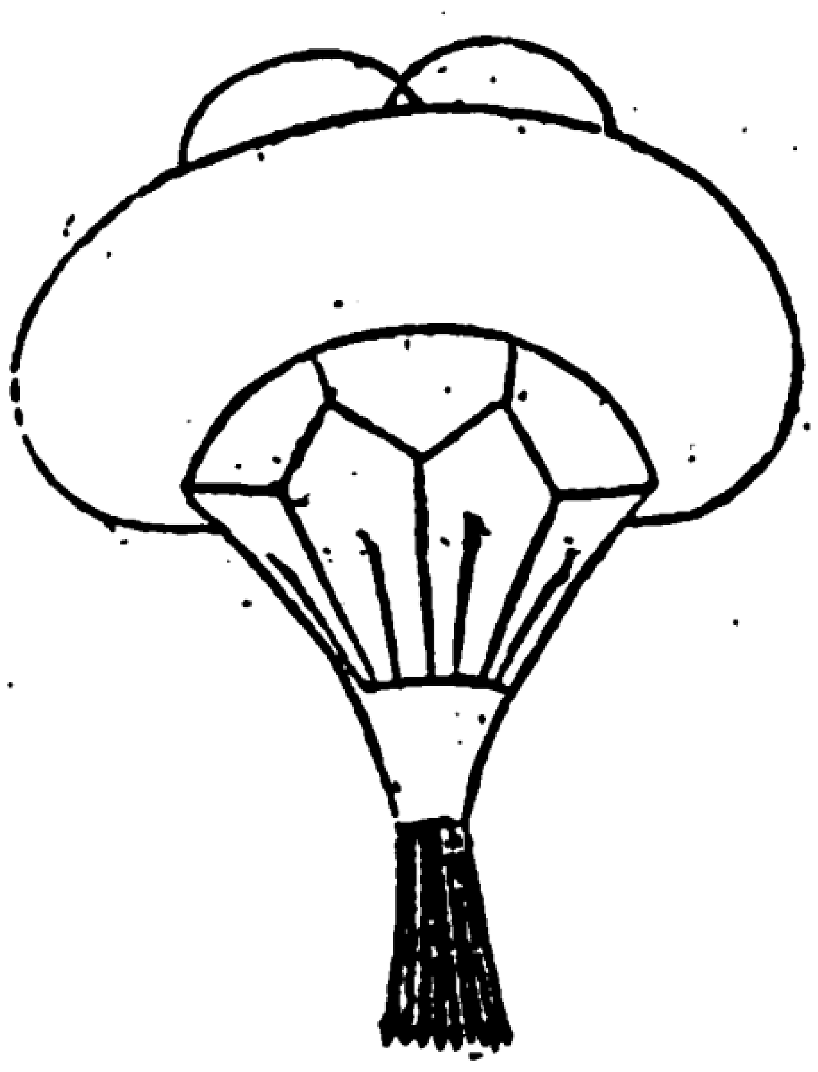


又、三角の形したるものの上を、絹糸にて、かやうに△



△かゞれば、一層うつくしくなるなり。

組み上りの圖



だいどころ

季節料理

豚肉料理の種々

素人庵

折から寒うなりまさり、肉屋の店前、にはかに人たち多くなりぬ。鷄肉、牛肉、是等はいづくにても愛でられぬべし。豚肉は好惡の甚しきものにて、中流以上の方々には、おしなべて好まぬが多し。然れど料理の仕方によりて、中々侮りがたき風味あるものなり。おのれ、年來豚肉を嗜好み、種々に習ひ試みたりき。下宿樓上の、遽庖厨、到底、女鑑讀者諸孃の家庭に適すべからざるは勿論のことなれど、若しやは、同好の人もおはすかと擔當の記者に强請して、豚肉料理法の二三を紹介することゝはなりぬ。名にさへ負へる素人あんばい、まづかりきとて、御うらみはうけたまはらぬぞかし。あなかしこ。

蒸豚肉

脂肪、多きところの肉を、一寸五分角ぐらゐに截り、先づ、ザッと湯煮にし、其の湯をすて、能く擂りたる味噌を例の御汁よりは、少し、濃く溶したるにて煮るなり。餘り、火を强くせぬがよし。大凡三時間ばかりも煮つめたる時、胡椒、少量いれ、又、一時間程煮つむるなり。柔くなりて、箸もてちぎらるゝ樣になるなり。因に云ふ。琉球にては、總べて豚肉料理に、甚上手にして、ムシブタ、ラフタイと稱するもの、特に、他縣の人をして忘るゝ能はざらしむる、うまき料理法なり。余のムシブタといひ、ラフタイと稱するもの原は、琉球のにとりたれど、唯、斯うもあらうかと思はる所を試みて、獨り喜びし法なれば、彼の地のものと同しや否やは、保證のかぎりにあらず。さて鹽加減あましとて、醬油を加ふべからず、少々心ながくして煮つむ可し。但しあまり煮すぐればくづるゝ恐あり。其の

邊のところは事にあたる人、注意すべきなり。

豚肉汁

大根を、輪切にせし程の大さ、厚さに切り。通例の味噌汁にて、大根を二寸位の長に切り、或は丸のまゝ、或は、二ッ切、四ッ切にしたるものと昆布を昆布卷の通りにまきたるとを、一所に煮るなり。是は、肉の味よりも大根と昆布と、其の汁とにうまみあり。二三度煮かへす時は、味ますます佳なり。

栄花園

冬の草木くさぐさ（二）

○冬椿　早咲椿といふ。椿の花は春なり。冬開者から、早開と名付けて、人に賞せらるゝものなり。

○冬牡丹　寒牡丹ともいふ。花は、今月より、來月まで咲くなり。

歌　元政

もゝたらす八重つむ雪も深みぐさ
九重ならふ綿とこそ見れ

○犬莖花　石蕗とも書く

○冬菊　寒菊、多く花は、一重なり。葉てりて赤を賞す。異名雪見草、秋無草、霜見草、のこり草、初見草

歌夫木　式子内親王

むらさきのうつろふやへのきくにまた
白きうはぎと見ゆるしら雪

○水仙花　千葉あり、單葉あり。一重の物、花白く、花心黄なり。

○八手の花　葉の岐七八あり。形紅葉の葉に似て、大いなる姿なり。花白く、小さくして、黒く實のるなり。

○茶の花　色しろし

狂歌　貞木

花の香は葉にゆずるらん山吹の
かねてぞしるき鷹の爪でも

○山茶花　南方草木狀に曰く山茶花、數種あり。寶珠

茶、石榴茶、海榴茶、躑躅茶、承莉茶、宮粉茶、串珠茶等葉は、各同じからず、是によつて、見れど、今茶人など賞す。

○歸花　狂花といふ。かへりさき、わすれ咲、かたはなどいふ。梅櫻山吹などのるゐ、此の月一二三さく事あり。また、多きときは、春のなかばより咲く時あり。つねの花よりは、かじけて賞するに足らず。

俳　　　田井

幽靈もなきとはいへず歸り花

十一月手入すべきもの

日は、いとみじかくなりて、いみじうきりわたれるそらもたゞならぬに、霜は、いとしろうおきわたして、木の葉をさそふ風、いたく身にしみて、冬枯の野邊の景色、いとすさまじうあはれとはなりぬ。いざ、此の月に手入すべき草木やなど。

分栽すべきもの

錦帶花　郁李　梅桃　笑靨　木香　牡丹　芍藥　百合　棣棠　茶蘼　玉簪　寶相

移植すべきもの

蜀葵、梅　菊　臘梅　合歡

下種すべきもの

人參　五味子

北海道の馬鈴薯

じやがいもとも、五升いもとも、からいもとも所によりて別々申すますが、北海道では、五升いもと申します。けれども、たゞいもと申しますと、馬鈴薯の事と、向ふの人は思うて居ます。夏いもと、秋いもとありまして、白いもとか、赤いもとか、おねこいもとか、色々種類がありますの。私は、膽振の國に居りましたが、一體、此の國は、全道から云ひますと、一番やせた方でありましたが、でも黑土が、三尺も四尺もありまして、此のいもなど、春さき、草を拔きまして、其の跡に埋めて置きますと、非常に成長して、秋掘りて見ると內地の大根の樣になつて居ります。無論畠にも、澤山

作りまして、移住の人や、アイノなどは、こよなくこちらの米などの樣に思うて居ります。して餅とか團子とか色々のものに料理して、食ひましが、餅などは、一種、變な甘美いものになります。そこでおかしい事があります。私が、或、百姓の家に行きますと、小豆餅を御馳走されました、何か變だとば思ひましたけれども、甘美いから、しきりに食べました。家内どうですと云ふから、まことに結構です。是は、此方の米でしようと云ひましと、一同大笑、するとと主人が、みないもでと云ふ。私びつくりしまして、どうしてまあこしらへましたと聞ますと、たゞ蒸して熱いうちに皮を去て臼でつくだけだと申しましたが、とても、じやがいもとは思はれませんでした。

又、北海道葛と申しますのは、皆、此のじやかいもでし、其の製造法は、實にたやすいものです。御次手が有たら、又、申しませう。



源氏物語講義（三十三）

下田義天類

月もいりぬ。雲の上もなみだにくるゝ秋の月いかですむらむあさちふの宿。おばしやりつゝともし火をかゝげつくしておきおはします。右近のつかさのとのゐ申の聲聞ゆるは丑になりぬるなるべし。人めをおぼしてよるのおとゞにいらせ給ひてもまどろませ給ふことかたし。

茲は、前段よりの續きへ立ち戻りたる所なり。即、母北の方よりの御返事を御覽ぜさせ給ひて、さて後、さま〴〵に聯想せさせ給ふ所の續きなり。彼の弘徽殿の事を評じ了へて、さて「かなはざりける命のほどぞ

盡せすうらめしき」と在りし所へ書き續けたるなり。

○月もいりぬ　彼のおかしかりし夕月も、今ハはや、山の端に沈み果てたりとなり。月ものもの字は、時に對へて置きたる助辭なり。夜は次第に更け渡りたるに、彼のおかしかりし夕月も、今ハはや、山の端に沈み果てたりと云ひ截りて、夜の更けたる景色を言外に知らしめ、さて、其の身に浸み浸みと染みわたり行く風光を想像せさせたる語なり。細流に、此の詞殊勝なり。前に、夕月と書き、入かたの空と書きて、月も入りぬと云ふ妙なりといへるは、さる事と云ふべし。彼の月の脈を、こゝにて結び留めたる筆法なり。

○雲のうへも云々　陛下の御製なり。雲のうへは禁中の事なり。月の緣あるが故に、此の語、殊におもしろし。涙にくるゝ秋の月は、此のあはれなる景色にほだされて、思はず催す、眼の中の涙に澄みたる影も闇く見ゆる程の物がなしき秋の月なるにと云ふ義なり。いかで住むらむは、どうして住みて居るか知らむとなり。あさぢふの宿は、彼の更衣の里亭をさしたるなり。此の四五の句は置替して見べき句格なり。即彼の更衣の里亭なるあさぢふの宿にては、いかにしか住むらむと云ふなり。さぞ物悲しく哀になかむらむと云ふ義を、言外に含めて、詠みたる歌なり。

○おはしやりつゝ云々　歌よりつゞけたるにはあらず。歌と━━此の語との間に「と詠せ給ひて、彼の里亭の事を」と云ふ數字を補ひ見るべし。ともし火をかゝげつくしておきおはしますとは、夜もすがら御寢にも着き給はず。御寢殿の燈下に夜を明し給ふ由なり。燈心をかきたて、搔き立てじて、挑げ盡すまで起きおはしましたる由なり。此の語は、例の長恨歌に　夕殿螢飛思消然秋燈挑盡未ㇾ能ㇾ眠　とある語を採りて、直に、此の桐壺の帝の上に取成し書き綴りたるものなり。

○右近のつかさのとのゐ申の聲　右近衞の衞士が、夜

番交代の事を奏問する聲なり。朝廷の夜番の事は、亥一刻より、丑の一刻まで、左近衞の官人、これを勤め、丑の一剋より、卯の一剋まで、右近衞の官人、是を勤めて、終夜時剋を奏問する由、物に見えたり。とのゐ申の聲は、その交代の人名を奏上する聲なり。此の聲を聞食めして、交代の時間、即、丑の上尅になりたる事を知食したるよしなり。丑の尅とは、今の午前一時二時の間を云へり。うしになりぬるなるべし。にて、即、午前一時になつたそうなと思食したるよしなり。

○人めをおほしては、人の見る眼を憚り思食してなり。彼の靫負の命婦か母北の方にかたられしこと葉に。「むせかへらせ給ひつゝ、且は人も心弱く見奉らむとおぼしつゝまぬにしもわらぬみけしの心くるしさに承りも果てぬやうにてなむまかむて侍りぬると在りし所と同じ心ばえの所なり。一天萬乘の君にても、この道にかけては、猶、近衆扈従のものともに御遠慮あそばさるゝさまを知らせたる語なり。よるのおとゝは、夜の御殿にて、即清凉殿中にある御寢間の事なり。まとろむは、假睡にて、俗に、とろとろとするなど云ふに同じ。此の一句は即、人の見る眼を憚り思食し給ひて、强ひて御寢所に入らせられて、暫時なりとも、眠らむとし給へども、なき更衣の事が御心に掛りて、とろ〳〵とし給ふことも出來給はざりし由なり。

以上を取束ねて申せば。

彼是スル内ニ、夜ハ次第次第ト更け渡リテ、今ハヤ、彼ノ面白カリシ夕月も、西山ノカナタニいりぬ。陛下ハ感慨ヤルカタナサニ、雲の上ノ此ノ内裏ニテも涙にくるゝコノ秋の月ナルニ、此ノ哀ニ悲シキ月ヲ見テ、いかですむらむ、アノ二條里亭ノあさちふの宿ニテハト云フ歌ヲ御詠シ遊ハサレテ、若宮並ニ母北ノ方ノ事ヲおぼしやりつゝ、彼ノ唐ノ玄宗皇帝カ秋燈挑ケ盡シ未眠ルコト能ハザリシ如クニ

ともし火を挑げつくして、コヨヒ一夜ハおきおはします。右近のつかさの宿直しまをしの聲聞ゆるは、ハヤうしノ剋、即、午前一時になりぬなるべし。人ノ見ルめを憚りおほして、よるのおとゝに入らせ給ひて、強ヒテ眠ニ就カント思食セドも、亡キ更衣ノ事ヤ、二條里第ノ事カ御心ニ掛リテ、まどろませ給ふことかたしトナリ

山上憶良の歌（三）

田島隨二

令反惑情歌一首并序

或有人知敬父母忘於侍養不顧妻子輕於脱履自稱異俗先生意雖揚靑雲之上身體猶在塵俗中未驗修行得道之聖蓋是亡命山澤之民所以指示三綱更開五教遺之以歌令反其惑歌曰

○人生の道をあやまりて、惑へる者を訓し、本情に反らしめむとする歌なり。知敬父母知の上に、不文字を脱せるならむとは、古來學者の一致する所なり。古義には、ズと傍訓せり。○異俗先生莊子に、此有道者所異乎俗とあり。斯る意にて、名のりしなり○亡命命は、名なり。いたづらに家を逃れ出で、江湖に漂浮ふをいふなり。逃匿する者は、名籍を削らるゝが故に、かくいふ○三綱君臣、父子、夫婦をいふ○五教父は義に、母は慈に、兄は友に、弟は恭に、子は孝なるをいふ。

父母乎。美禮婆多布斗斯。妻子美禮婆。米具斯宇都久志。遁路得奴。兄弟親族。遁路得奴。老見幼見。朋友乃。言問交。余能奈迦波。加久叙許等和理。母智騰利乃。可良波志母與。由久弊斯良禰婆。宇既具都遠。奴伎都流其等久。布美奴伎提。由久智布比等波。伊波紀欲利。奈利提志比等迦。奈何名能良佐禰。阿米弊由迦婆。奈何麻爾麻爾。都智奈良婆。大王伊麻周。許能提羅周。日月能斯多波。阿麻久毛能。牟迦夫周伎波美。多爾具久

能。佐和多流伎波美。企許斯遠岡。久爾能麻保良叙。可爾迦久爾。保志伎麻爾麻爾。斯可爾波阿羅慈迦。

ちゝはゝを、みればたふとし、めこみれば、めぐしうつくし、のがろえぬ、はらからうから、のかろえぬ、おいみいとけみ、ともがきの、ことゝひかはし、よのなかは、かくぞことわり、もちどりの、かゝらはしもよ、ゆくゝへしらねば、うけぐつをぬぎつるごとく、ふみぬぎて、ゆくちふひとは、いはきより、なりてしひとか、ながなのらさね、あめへゆかむ、なかまに〳〵、つちならむ、おばぎみいます、このてらす、ひつきのしたはあまぐもの、むかぶすきはみ、たにぐゝの、さわたるきはみ、きこしをす、くにのまほらぞ、かにかくに、ほしきまに〳〵、しかにはあらじか

○めぐしうつくし鍾愛の情に堪へぬをいふ。うつくしは、いつくしむといふいつくしと同じ詞なり。美麗といふ意に用ゐるも、是よりいでしなり。○この句の下なるのがろえぬよりことゝひかはしまでの三句古義の説によりて加へつ。かくて、よく五數を開くといふにかなへり。○のかろえぬ、今俗に、キルニキラレヌなどに同じ、○もちどりのかゝらはしもよの枕詞なり。黐にかゝれる鳥といふことなり。○かゝらはしもよの下、古義には、波夜可波乃の五文字を補へり。略解にも、此の句の下、一句落ちたるかとあり。○うけぐつをぬぎつるごとく、序に、輕於脱屣とあると同じ意なり。うけは、下二段活の詞にして、沓などのやぶれたるにいふ。ぬきつるは、脱ぎ棄るなり。つる辭にあらず、うつる、すつる、のうすの省略せられたるなり。○なりでし、產まれ出しなり。○のらさね、ねは希求辭なり。(汝の名を)名告れヨなどのよと同じ辭なり。○あまぐものむかふすきはみたにくゝのさわたるきはみ、天地の涯といはむがごとし。あまくもは、天雲にて、むかふす向ひふせる(遠く望めばしか見ゆ)なり。たにくゝは、蟾蜍をいふ。さわたるのさは、發語ともいひ、接頭

辭などゝもいひて、い行きのいなどゝ同じ、蜻蛉は、谷の草木をも安々と潛りゆくものなれど、地のあるかぎりは、いかなるところまでもゆかれぬといふことなかるべしとて、天雲に對へてかくいへるなり。〇きこしをす、治らし召させ玉ふなり。〇まほらまは、ほむる詞なり。ほは、物につゝまれこもりたるをいふ古語なり。らは、ほに添へたるなり。之を、接尾辭と稱する人あり。〇かにかくに、今のとにかくにと同じ

父母を見れど、尊く、妻子を見れど可愛し。また斷つても斷られぬ兄弟親族老いたる人、幼き人、さては朋友と問ひ訪ひ樂しく語りあふ（こそたのしくもあらまほしけし）世の中、斯くあるが當然なり。（世の中の種々の事にかゝはるこそ人の人たる道なれ）あまりに急進して、遂に人の人たる道をも踏み外し迷ひいりて、大切なる父母妻子親族朋友をも、破沓を脫き棄つるよりも心やすけに打ちすてゝ、（わが迷ひ入りし道に）ゆくといふ人は、岩や、木より生れ出でし人が、（岩木よりなど生れたる人ならでは然る道に迷ふ筈なきに）抑も、何人ぞ、汝の名をなのれよ。（あまりに不審儀なれは聞き置かむ）

天上へ、自由自在に行かるゝ身ならは、汝の欲するまに／＼、如何なるとなりとせよ。唯、この地上に居る人ならは、（然る我儘はゆるされぬぞかし。この地には）大君のおはしますあり。この（日夜天にかゝりて）照らし玉ふ日月の下、即ち、普天の下、何地如何なる邊までも、（我大君の）治めさせ玉ふ王土にして、しかも、其の中の大切なる國ぞ、（此の國は）兎に角に（世の中の道理といふものは、斯くの如きものなれど）汝の欲するまに／＼行へよ。（が世の中は、世の通例にしたがふべきが常なり。）左樣にあらぬか。

反歌

比佐迦多能。阿麻遲波騰保斯。奈保奈保爾。伊弊爾迦弊

利提。奈利平斯麻佐爾。

ひさかたの、あまぢはとほし、なほ〳〵に、いへにかへりて、なりをしまさに、

ひさかたの天の枕詞なり。なほなほ事をおこしたつることなくして、たゞにあるをいふヤハリなどいふ意なり。◯なり職業なり。◯にのらさねのねと同じ辭にして、希求辭なり。天上へゆかむとしても、遠くして、到底及びがたし。さる出來難きことを考へむよりはヤハリ、我が家にかへり職業をつとめて、人なみ〳〵の道をふみ居れよかし。

この頃より、既に異俗先生の如き人のありけむ。古も、今も、同じ事のみ多かりけり。方今猶斯る考の人尠からず。殊に女子の、少し學に長け、才勝れたるなどは、この弊に陷るもの多し。心せさるべからず。

老身重病經、年辛苦及思二兒等一歌七首 長一首 短六首

靈剋。内限者。謂贍浮洲人壽一百二十年也 平氣久。安久母阿良牟遠。事母無。裳無母阿牟遠。世間能。宇計久都良計久。伊等能伎提。痛伎瘡爾波。鹹鹽遠。灌知布何其等久。益益母。重馬荷爾。表荷打等。伊布許等能其等。老爾弖阿留。我身上爾。病遠等。加弖阿禮婆。晝波母。歎加比久良志。夜波母。息豆伎阿可志。年長久。夜美志渡禮婆。月累。憂吟比。許等許等波。斯奈奈等思騰。五月蠅奈周。佐和久兒等遠。宇都弖弖波。死波不知。見乍阿禮婆。心波母延農。可爾可久爾。思和豆良比。禰能美志奈可由。

たまきはる、うちのかぎりは、たひらけく、やすく〳〵あらんを、こともなく、もなくもあらんを、よのなかの、うけくつらけく、いとのきて、いたきゝずには、からしほをゝそゝくちふがごとく、ます〳〵も、おもきうまに、うはにうつと、いふことのごと、おいにてある、わがみのうへに、やまひをら、くはへてあれど、ひるはも、なげかひくらし、よるはも、いきづきあかし、としながく、やみしわたれど、つきかさね、うれへさまよひ、こと〳〵は、しななとおもへど、さば

へなす、さわぐこどもを、うつてゝは、老には老らず、みつゝあれど、こゝろはもえぬ、かにかくに、おもひわづらひ、ねのみしなかゆ。

○たまきはるうちの枕辭なり。○こともなく凶異もなきなり、○もなくもあらむをもは、わざはひなり。凶事なく、平かに、安らかにあるべきにヤアなり。○うけくつらけく憂く辛くなり。けはたひらけく、やすらけくのけと同じく、又、惡げ善げなどのげに同じく、けはひけしきをいふに添へいふ。○いたきゝずには云々、この人の作れる沈痾自哀文の中にも、諺曰痛瘡灌レ鹽短材截レ端、と書けり。辛苦の上に、更に甚しく、辛苦を加ふるをいふ。○おもきうまに、うはにうつ云々重き荷を負へる馬に、又、更に荷を加へ負するをいふ。重荷に小付など、今もいふ。○やまひをらのらは、調をとゝのふるために添ふる詞にて、意味なし○なげかひなげきのきを延べたるなり。○こと〴〵異事なり。云々の辛苦の外の種々なる辛苦にてはと、下へつゞくなり。○さばへなすさわくの枕詞なり。うつてゝは、打ち棄てゝはなり。○しにはしらす死なれぬといふ意なり○もえぬ、やけるゝこがれるなど、今もいふに同じく燃えなり。○なかゆ泣かるなり。今るといふべきところ、ゆといへる、此の集に例多し。

(我國は、人壽百二十年といはるゝ國なれど)住む人は皆平かに、安らかに、樂しく住まるべきに、ヤア世の中といふものは、憂さ辛さのみ多かるに痛き瘡に鹹鹽を灌きかくるといふ諺の如く、又、重荷を負へる馬に、澤山に、上積を加へ負はすといふ諺の如く、年老い來れる我身の上に、病をさへ加へて、あれば、晝は、ヤア嘆きくらし、夜は吐息のみをつき明しゝて、年久しく病みつゞくれど、日をつみ、月を重ねて、憂苦、呻吟のみし居るぞ然れど死なむとも思へど、唯一つさわぐ子等を打ち棄てゝは死なれぬ。子等を見れど、心をいためなやます。兒やせむ、

角やせむと心配し、唯、泣くむかりなり。

反歌

奈具佐牟留。心波奈之爾。雲隱。鳴往鳥乃。禰能美志奈可由。

なぐさむる、こゝろはなしに、くもがくれ、なきゆくとりの、ねのみしなかゆ、

慰むる心はなく、唯、一向に、雲の中へ、鳴きて、飛びかくれゆく鳥の如く、泣きてのみくらすとなり。

周弊母至久。苦志久阿禮婆。出波之利。伊奈奈等思騰。許良爾佐夜利奴。

すべもなく、くるしくあれば、いではしり、いなゝとおもへど、こらにさやりぬ、

○さやる障ると同じ詞なり。

如何にしても、慰むる方なく、苦しくのみある故に、如何ならむと、ころにても出で走りゆかむと思へども、子等に障りさゝへられて、ゆきもならずとなり。

富人能。家能子等能。伎留身奈美。久多志須都良牟。絁綿良波母。

とみびとの、いへのこどもの、きるみなみ、くたしすつらん、きねわたらはも、

○きるみなみ着る身(人)無き故になり。○くたし腐らしなり。

富める人の家にては、其の子等、すくなくて、着る人なさに、(唯モゥ)腐らし捨つるならむ。其の着物綿どもはマァ(貧しきものは、一ッもなくて、かく憂苦呻吟するぞ)となり。

此の歌と、次なる歌一首とは、貧窮問答の反歌のまぎれて、こゝに入りたるものなるべしといへり。

麁妙能。布衣遠陁爾。伎世難爾。可久夜歎敢。世牟周弊遠無美。

あらたへの、ぬのぎぬをでに、きせがてに、かくやなげかん、せんすべをなみ、

○あらたへの　枕詞なり。

薄き粗かなる、布の着物でさへも着せかねて、斯く

マア、歎くならむ。如何樣にも、爲む方つきて、マアとなり。

水沫奈須。微命母。栲繩能。千尋爾母何等。慕久良志都。

みなわなす、もろきいのちも、たくなはの、ちひろにもがと、ねがひくらしつ、

○みなわなす水の泡の如くなり。○たくなわのちひろの枕詞なり。

水の泡沫の如き敢果なく、脆き命をも、（子のためには）千尋の（繩の樣に果もなく、）長くあれかしと、願ひ暮しつるとなり。

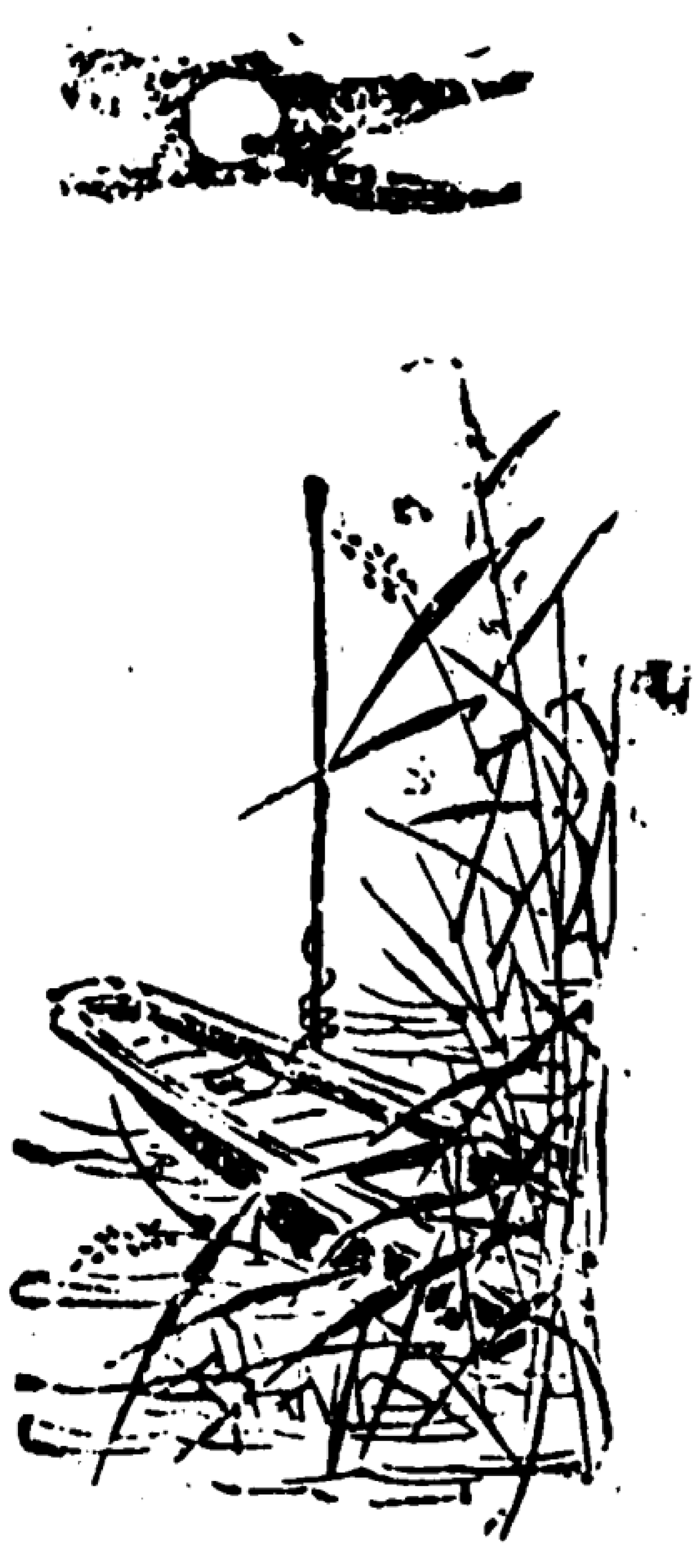
倭父手纏。數母不在。身爾波在等。千年爾母何等。意母保由留加母。

しづたまき、かずにもあらぬ、みにはあれど、ちとせもがと、おもほゆるかも、

○しづたまきかずの枕詞なり。

（生きて世に甲斐もなき）數ならぬ身なれども、（子のためには）千歳も、長命なれかしと、おもはるゝヨマアとなり。

この反歌の末に、去神龜二年作之但以類故更載於玆と註せられたり。長歌と、他の反歌三首とは、天平五年六月申丙朔三日戊戌の作なれど、しづたまきの一首は、神龜二年に作りしを、同じ意なれど、玆に加へたりとなり。序にいふ。今は、朔といへど、一日に限れど、古は、上旬を朔何日といふ。中旬を中の何日と、下旬を晦の何日といひしなり。





漫録

神國女訓抄（四）

山口道貫

辱なくも、吾朝は、女神 天照太神の御國なるが故に、餘國にちかひ、女人を用ゐ、神祇につかへ奉ること、そのかみ 垂仁天皇、第二の皇女倭姫命、大和の國、彌和三室の嶺の上宮において、御姨豊鋤入姫命の御讓をうけ、 天照太神を頭に戴き、 崇神天皇六十年、宇多の秋志野宮に御遷りありて、四とせましまし、同六十四年、同國穴穗の宮に、御遷宮、此所にて、四年いつきまつり、 垂仁天皇即位二年、伊勢國敢都美惠の宮にて、二年、同四年、同國坂田の宮にて二年、同十年、美濃伊久良河の宮に、四年、次に尾張國、中島宮に遷し奉り、十四年、伊勢桑名野代宮に四年、同十八年、阿佐賀藤方片樋宮に四年、廿二年、飯野高宮に鎭め奉り、又、四とせいつき給ひき。廿五年丙辰三月、伊蘇の宮に遷し奉り、吉き宮どころを覔め幸ひ給ふ。此の時、狹田社。坂手社より、荒崎社、朝熊社に至るまで、處々に崇めまつり給ひ、其の年、大田命現れ、倭姫命に出逢ひ、吉き御鎭座所を敎へ給ふ。誠に太神の御敎に從ひ、遂に度會宇治の五十、鈴河上に、宮柱太鋪立鎭座奉り給ふ。其の後、年經て、倭姫命、御壽五百八十余歳の御時、宮人物部八十氏等を召集て、告てのたまはく、（中略）夫れ、天を尊び、地に事へ、神を崇め、祖を敬ふときは 宗廟を絶えず、天業をさめ、又、佛法の息を屛け、神祇を再拜奉れ。日四州をめぐり、六合を照すといへども、正直の頭を照し給ふと告給まひて、自ら、尾上山の峯に退き給うて、岩を分け、御身隱れ給ふとなむ。是、則、女人神祇につかへ奉り、肉身、其の儘に神となる證據なり。そ

れのみならず。豐鋤入姫命より、奘子內親主まで、伊勢の齊宮七十五代、又、加茂大神の齊院まで、嵯峨天皇の皇女有智內親王より、儀子內親王まで、卅二代、是、皆皇女、及び親王の姫宮をもて、齋仕へさせ給ふ。是等の事をかんがへて、神祇、女人を愛し給ふ理りをしるべし。まして、女人神祇をまつれば、神罰を蒙るなど云へるは、跡かたもなき妄說なり。女人を忌み嫌へるは、彼の佛菩薩にてこそ侍れ。佛說寶積經、所謂女人地獄使、能斷佛種子、外面似菩薩、內心如夜叉、一見於女人、能失眼功德、縱雖見大蛇、不見女人と說れたり。其の外、佛書に、女を惡み、嫌へる事あげて數ふべからず。提婆品に、五障の罪を說きたるにも、一には梵天王となる事を得ず、二には帝釋、三には魔王、四には轉輪聖王、五には仙身、いかんぞ女の身として、速に成佛する事を得んやといへり。女人は、三世の諸佛することを得んやといへり。女人は、三世の諸佛に見捨てられたるを、只西の阿彌陀佛のみ、女人の罪深く、諸佛に見捨てられたるを憐み、四十八願の內三十五の願に轉女成男といへるごとく、女の身にては、成佛ならざるがゆゑに、男子と變じて、極樂國に往生させせんとの事なり。女人を忌み嫌へる事、佛法より甚しきはなし。又、天竺人はともあれ、吾女神天照太神の御國に生るゝからは、女は、女のまゝにして、高天原にとゞまる事をしるべし。天神七代の御ときより、御夫婦の御神化生り給ひ、泥土煮尊は男神、砂土煮尊は女神、其の次、大戸道尊男神、大苫邊尊は女神、伊弉諾尊、伊弉冊尊にいたりて、誠に夫婦の道を正し、陰陽和合なし給ひて、國地海山草木萬物の精神を產み日月星の神々をもうみ出し給ふ。其の外神々、皆、夫婦〳〵まし〳〵て、不老不死にて、常盤堅盤の御樂、仰ぐもなほあまりあり。今、吾國の人々、夫婦の契淺からず、二世も、三世もと誓ひ侍る心なるに、彼の女を變じ、男と成との、佛を賴極樂往生を遂げたらぞ、定て、女神變じて、男神と成るべし。一蓮托

生のときにいたり、男二人座したらば、兼て、二世も、三世もと契りし夫婦の情は、男同士のことにはあるまじ、笑つべし。左程不自由なる往生を求めずとも、尊き高天原の神、或は常世國の樂を願ひて、夫婦〳〵諸共に、常盤に樂み、子孫長久の守護の神とならんこそ、羨敷事ならずや。唐土天竺の人はかくの如き神訓あることをしらざるがゆゑに是非なし。神國に生 たる幸には、神代よりの敎を傳へ授りて、天人、唯一の道を覺悟は、人々、心の臓中に 天御中主尊の分身をやどし奉り、神即、我なり。天地同根、萬物一體也、何ぞ、女を變じて、男となす事を勞せんや。彼の男子をのみ貴び、一向に女人をきらひ捨る事、天地中和の大道にあらず、陰陽和合してこそ、天地の道もおこなはれ、日月の運行も調ひ、人も、萬物も、生育し侍る物ならし。

續人名（七）

釋　法　忍

いにしへは、娶取方より、支度金を遣し、つまをむかへしよし。今は、引かへ娶の方より持參金、のけはい田のと名付、土產を持行く事になりけり。もつとも、かたはか、みめあしき娘ならばさも有りなん。みめかたちよく、はつめいにて、したくも、大体よろしき娘にも、持參金を付くるは、いかなることぞと、つら〳〵考へ候に、これは、はゝれやの愛情ふかきよりおこりしやとれもひけり。そのゆゑは、何も申ぶんなきむすめなれども、ふところをはなれ、はじめて、他人の中へつかはすことゆゑ、何かに付け心づかひもあるべし。また、そまつのこともあらんか。さるにても、みやげ金をもたせつかはしたらば、舅姑むても、大切にし、娘も、かたひろく居とげんものと、をつとへねがひすゝめて、みやげ金を付け遣したるが、かくしきと

なり、今は、世見、一どう、おしなべて、たかきも、いやしきも、相應〳〵のみやげ金を付け遣はす樣に成り侍るなり。是、しかしながらよろしからぬ事なり。そのゆゑは、女は、一度おやの手をはなれ、をつとにしたがひては、親の家をかへりみず、をつとの家を家として、かへる事なきをよしとす。これによつて、輿を出すときに葬禮の式をいとなむは、かへらぬといふならはせにてれはしまし候。されど、人のつまと成りては、をつとの父母を親として、隨分孝行をいたし、たとひ、いかやうのむりをのたまふとも、少しも、心にさからはず、をつとを大切に貞節をつくし、いか樣のかんなんにあふとも、こらへ舅姑の心をとりおかせ、その家にて、身まからむこそ、いとめでたきことなるに、むすめのかた身ひろかなれとて、持參金を付けて、つかはすときは、娘も、おのづから、おやの愛にあまへ、持參金を、鼻にかけ、少しもひけぬ氣になり、しうとしうとめを、さほどにたふとまず、うはべはしたがふ樣にても、眞實うすく、をつとへもへりくだりしたがふ心うとく、しぜんとうはつりになりなむ。たとへば、われはれし入りには來ず、ことに、多くのみやげをもち來たりしものをと、かれに付けこれに付け、みやげのかねは先へ出たがるなり。舅姑をつとは、をりふし氣におはぬことありても、いまだ、としはもゆかぬゆゑならめ、としをかさね、心もつき、なにかのこともおのづからよからんものと、二三年のうちは、いようしやがちなるものなり。しかるを、娵のかたには、持參金もあれば、これにたいして、なにもいふことはならぬと心得、なは〳〵わかまゝになり、内に居るときは、此のやうになかつたの、あさねもならぬのと、いろ〳〵のふそく、ばかりをいひて、かはをはらし、あるひは、ふてかへりて、けびやうをおこし、へやへ引こみ、二日も、三日も出づることなく、さとへ參りてやうせういたしたらなど、いつはり、れやさとへ行き、あることないことかぞへたて、おのが

かつてのよきことばかりをいひならぶれば、母はあいにおぼれ、かれこれ道理を付くる故、なはしてぞ心さしふとり、をつとの方へかへりても、いよ〳〵心のまゝにふるまふ故、たび〳〵いけんしても、なはらず、をつとも、今はこらへかね、畢意、持参金を取りし故、女房にふみ付けられてもかんにんすると、人にうたはるゝも、口惜し、第一、父母へ如在するをつら〳〵見てゐる所でなく、かれこれ外聞をいとうて、いまゝではかんにんせしが、父母のおぼしめしもはづかしく、かれに付け、これに付け片時も、わかれずと、それより、大崩となる、舅姑も、一旦は止めけれども、平常娶の仕方よからねば、しひてもいはず、終にりべつとはなりぬ。是は、世上のこらず、かやうにもあるましけれども、十ヶ七八は、これにじゆんし、その氣の濃さか薄さか、いづれも有事なり。是れひとへに、持参金より心をごり、道にそむけ、追出され、恥をさらすもの世の中に間々おはしまし候。とかく、おやたちの愛におぼれ給ふるともは、他人の中へ出で、かならずれくれをとり申事にて、まゝ子共衆不便とおぼしめさで、急度御そだて、内より他人の所が居よいとおもふ樣に、御仕立なされ候こと、かんようにておはしまし候。まして、えん付候娘御などは、御里へ御こしの節は、かならず〳〵、永く御とうりうこれなき樣になされ。しうと御ふたりを、まことの親とおもひ、こなたの事をかへりみず、孝行をつくし、夫を大事にかけて、そりやくにいたすまじきよし、たび〳〵、御申ふくめ、なにとも、むかふのことを御聞なされぬやうになされなば、おのづからむかふへ、心よりて、大せつにつかへ申もいにておはしまし候。よく〳〵御わきまへおはしましくれ〳〵。あなかしこ〳〵。

つゝしみの心のあたや子のためと
　　あたふる千ゝのこかねなるらむ

道まよふ人のはたしやともすれは
　　たからのためにうごくこゝろは

さこし草（五）

故　兒嶋顒齋

妻の夫にしたがふはすべて夫の非を擧げずして貞節を盡すべき事

妻の夫につかふるは、萬の事、其の教にしたがひて、貞節をつくし、平生、夫を、天の如く敬ひ給ふことにて、露ほどもそむく心なく、命とともにそひはつべしと思ひ、飢ても、ひとり食せず、寒けども、獨りきず、おそく寢て、はやく起きわが幸不幸は、天道にまかすべしと、こゝろし、かたく盟ひて、たま〳〵うるささてとあるとも、胸にをさめて、色にあらはさず、たとへ、富る家より出たりとも、かならず夫の家の貧をあなどることなくして、いかほど辛き産業をもつとむべし。

美作の國に、三次郎といふ農民あり。妻の名をくにといふ。舅姑につかへて孝あり。又、夫に貞節を盡しぬ。夫は人の惡む病にて、手足もかなはざるさまなり。兩親はしだいに老のかさなりぬれば、子の病も憂ひ、いよ〳〵心ほそくおもひけれども、くにが年、三そぢにもたらぬ身の、その行末、いたく不便なれば、われら親子ともかくも成るべし。汝は、古郷に歸り、何かたへなりとも嫁すべしとひたすらいひけるに、くにいなみて、夫の病める、兩親の齡いたうかたふきたまふを見すてゝ、再び、他へ嫁くべき所存はあらじと、涙ながらいひければ、三人のもの、あはれにもかぎりなくよろこびしとなむ。されど、くに一人の働きにては、朝夕の煙もたえ〳〵なりしが、それもうしとも思はず、まづしき世をたへしのびぬ。みのことにいたましきは、女の身にて耕くさきる業をつとめ、又、深山に入りて炭燒事をならひ、みづから牛に炭を負せて、嶮岨なる山坂をもちはこび、その賃をもて、三人の介抱し、その餘諸事の費をたすけしとなむ。千辛萬苦、心づかひほど、凡、九ケ年なり。されど、其の地を治めたまふ、但州生野の縣令布施義春君上へ達して、有がたくも、厚

き褒賞を賜る。これ享和三年、亥のとしの事なり。わが知れる渡邊信名くはしくはなさる。

伊豆の國なる、池田氏の妻、その名を蘭といふ。夫短慮にしてや、もすれば、怒り詈る事ありしに、一日妻をうちたゝきければ、蘭、なく〳〵一句を口すさめり。

　青梅や花ならかくは叩れじ

夫もふかく、耻ぢしとなむ。友人三枝晦著つたへらる

いつのころにや。

京なる商人、西國へくだり、三とせばかりかへらざりしに、ある時、京への便りに、文をのぼせて、いろいろのたはれたることをかき、その奥に金百兩、卷物いくつ、その外、いろ〳〵、右の通りあれば、つかはしたく候へども、無御座候と、情もなげに認しに、女此の文をみて、いたうなげきて、かへすことばなくて、

　こゝろざしあるかたよりのいつはりは
　　誰がまことより嬉しかりける

といへりとなむ。是れ、夫の非を擧ずして、すこしも妬むこゝろなし。その貞節ふかきありさま、いと殊勝にあはれなることなり。此の一段は、榊原侯姫路にわらせられしとき、儒官なる佐藤直方、姫君嫁入の餞とて、女の心得べきことを書きて上られし、その中に見えしを、友兄石見老翁かたられき。やつかれ思ふに、上の三女の心ざまは、誠に妻たるものゝ鑑なるべし。

わが住さとに嫗あり。いはといふ。夫は中風の病にて、半身かなはざるに、常に心をつくして、介抱せり。女子二人あれども、みな幼くて、母の勞をたすくるものなし。元より家まづしく、夫を養ふよすがなければ、いは、一人の働きにて、からうして、かすかに、其の日を堪へ玄のびぬ。その頃見る人、いたう憐におもひて、無盡講とて、十人よりあひ、金そこばくづゝいだし、恵みけり。夫の病、日々に重りて、灸藥の驗もなく、七年餘にして、身まかりぬ。いは、かなしむ事限りなし。それより後は、洗濯縫針の業をして、二人の女子を養育し　生長するをまちて、人に仕へさせおの

れも、又、人にやとはれ、いさゝかの賃を得て、夫の遺言とて、十三回忌の供養をつとめけるとき、もと金を贈りたる人々をまねぎて、わびたる麁膳なれども潔よく調じて恩のふかきを謝し、それ〳〵に本の金をかへしぬ。やつがれ思ふに、さしも睦しき夫婦、むなしき苔のしたまで、同じみちにと契りしも、さるものは、日日にうとしと、夫死すれど、わりなきこしかたのことは、打わすれて、只、おのが身の行末飢寒のうれひもやわらむと、夫のかたく、證據して、かりし金をも、吝みてかへさず、又、甚しきは、あらぬ不義不貞をなすものもあるに、いはが操 あはれにも、いと殊勝におぼゆ。此のさましらぬ人多けれど、をしくて見聞けるまゝを、記す。いは、今年五十九とぞ。夫を喪ふ身は、いはが心ざしをまねぶべし。



教梯抄（十八）

續後撰集雜中

一すぢにおもひさだむるこゝろだに
あらばうき世を歎かざらまし　　正三位成實

同　同

後鳥羽院御製

ひともをし人もうらめしあぢきなく
よを思ふゆゑに物おもふ身は

續古今集雜中

わりなしや人こそひとといはずとも
みづから身をや思ひすつべき　　紫式部

玉葉集雜　五

述懐の御歌の中に

院御製

いたづらにやすきわが身ぞ耻かしき
くるしむ民のこゝろおもへば

續千載集雜中

述懷の心を

天台座主慈勝

うきことは世にふるほどの習ひぞと
おもひもしらで何なげくらむ

續後拾遺集雜中

嘉元百首歌奉りける時述懷

從三位爲信

うきとても君につかふるかずなれば
身になぐさめて世をば歎かじ

同

同

前大納言實教

おろかなる人をもすてぬ我がきみも
世をこそたのめ身をば頼まず

續後拾遺集雜下

述懷の心を

權少僧都良性

さても世にあるべき物をなか〳〵に
うきみを憂しとなに思ふらむ

風雅集雜下

述懷の歌の中に

從二位宣子

をり〳〵の身のあらましも變りけり
わがこゝろさへ定めなき世や

新千載集雜中

建武二年內裏千首歌に述懷

二品法親王慈道

わがこゝろ君ぞしるらむ世をいのる
外にはまたもおもひ無しとは

同

同

建武二年人々題をさぐりて千首歌つかう
まつりける序に述懷の歌とてよませ給
ひける

後醍醐院御製

身にかへておもふとだにも知せはや
　たみのこゝろの治めがたさを

新續古今集雜中
　述懐の歌の中に　源　和民
名を惜しむこゝろや猶もすてかねむ
　のがれて山のおくにすむとも

續古今集雜下
　三百首歌講侍りしに述懐を　前大納言　爲家
たらちねの道のしるべのあとなくぞ
　何につけてや世につかへまし

續千載集雜上
　述懐の心を
龜山院御製
津の國のなにはのあしの世のなかを
　のどかにと思ふわがこゝろ哉

新葉集雜下
　正平廿年内裏三百六十首歌の中に寄弓
　述懐　前内大臣　隆
君がためわがとり來つるあづさゆみ
　もとのみやこに返さざらめや

（未完）

飛鳥井家和歌の式法（八）

秘傳和歌切字所意得事（三）

秋の田の穂のうへてらす稲妻の
　光のまにもわれやわするゝ

此の我やといへるや文字は、疑などのやにては侍るべからず。同字置所、同字なれども、ことの外心のかはる文字侍るべし。是は、我やはわするゝといへる手爾波なり。かやうのたぐひ、此の集にかぎらず、いづれの歌にも、おほく侍るなり。只、一編に心得たらんをかしき事のみ

侍るべし。いそのかみふるの中道中〳〵に見ずは戀しとおもはましやは、同事のやうなれども、此のやはといへるは、常にひとのいひならはせる詞なり。かやうの詞を、また、上の歌と同前に心得侍らば、心も詞も、ことの外にかはり侍るべき事なり。

長明

はやしさきまかてはいかゞとはるべき
　　つゝみのたけを打ち詠つゝ

かやうの歌の手爾波、又、常の歌にかはり、風情のいたり侍らで、何と云ひても、相違する事あるまじきやらんと覺え侍る。只、初心の時の用心なり。いたらずして、堪能の歌をうらやましく思ひて、好くよまんとくはたつる故に、折ふしことにいひちがへ侍る成べし。たゞ幾たびも、打ちむきたる手爾波心をもすぐによみ侍らば、自然に道に入る事侍るべしと、古人の云置るにや。

後鳥羽院

おもひやれうきめを見ほの浦風に
　　なく〳〵しほる袖の雫を

此の歌は、袖の雫をおもひやれと、かやうに首尾したる歌なり。五文字などに、ことの外なる心得も侍らんか。能々思慮あるべし。

雲林院親王

吹まよふ野風を寒み秋萩の
　　うつりもゆくか人のこゝろの

是は、うつりもゆくかとうたがひて、すゑに人の心のと、下の句の内にて、首尾を合せたる歌なり。はてにのゝとはてたるは稀なり。自然の事なるべし。もしも、よまんと思ふ共、此の歌を能々守るべし。

戀しくはしたにをおもへ紫の
　　ねすりの衣色に出なゆめ

此の歌、上句下句、二所に下知成敗の詞侍り、二句に、したにをおもへど下知に云ひて、又末に、色に出なと成敗していへり。かやうの手爾波、不可思議の大事なり。初心の人、かやうによみ侍りては、いひおほせられずして、をかしく侍るべし。したにを思へといへる、をもしは字の助成べし。色に出なゆめと侍るは、ゆめゆめ色に出などいへる心も有にや。此の歌も、古今の戀の部にて侍りかやうに、細々しるし付け侍る事、誠に〳〵、神明の照覧も戀しく侍れども、高命にて侍れど、其の恐は御許も有べしとおもひて、かく申侍るなり。（完）

辨似抄（承前）

赤松景福

見て　見で

古今十五　今はとて、君がかれなは我宿の花をば獨見てやしのばむ

こは常の見てなり。

竹取物語　猶此の女見ては世にあるまじきこゝちのしければ

此ては濁りて不然辭なり。同じ見もてに續くる時は、續用段の格、でに續くる時は未然段の格なり。

拾遺十六　春の野にところ求むといふなるは、二人ぬ計り見でたりや君

こは別にて見出の略語なり。月を待出といふ詞をまちでといふが如し、○歌のところは異類名なり。そを寝る所にいひなせるなり。

見えて　見えで

拾遺集く　逢阪の關の清水に影見えて今やひくらむもちつきのこま

住吉物語　簀子の下に魚など遊ぶも見えて

此らは常の見えてなり。

古今十五、色見えでうつろふ物は世の中の人の心の花にぞ有ける

是は色なきをいふにて、例の不然辭也。

萬葉四　物もふと人に見えじとなましひに、常に思へど有そかねつる

もふはおもふの略なり。○こは常の見えとは異なり、常のは、見え見ゆるなど物の自然に見ゆるをいふなれど、此の歌の「人に見えじ」とは、人に見られじといふにて、我、物思をしてありとは、人に見られぬやうにせむといふ意なり。按ふに見られを見えとのみいふとするは、いかにも語足らぬやうなれども、「人にしられず」といふ語を「人しれず」と歌にいへる類ひあれど、此の見えも、略轉の語にやあらむ。又

古今十　いさゝめに時待間にぞ日はへぬる心ばせをも、人に見えつゝ

枕草紙　いかなる底の心を見えてさる名をつきけむ

徒然草　さばかりの人のむげにこそ心弱きけしきを人の國にて、見え給ひけれ。

竹取物語　あながちに志を見えありく　又　おはしましぬと人には見えたまひて

右いづれも、見られの意なり。此の類を、或は、見せと解きなせるものあるは、見られむと欲する意は、見せむといふ意にかよへばなるべし。以上歌文ともに、此の例多しとはいへど、見せはおのつから常の如く見せといふべくして、混用すべきに非ず、次に擧るは見せの例なり。

古事記上　彼の鏡をさしいでゝ、天照大御神に見せまつる時に

住吉物語　中納言に見せきこゆれば

後撰集　あたら夜の月と花とを同じくは心知れらむ人に見せばや

萬代集　霞たつ山のさくらは徒に人にも見せでちりやしぬらむ

右の如くあるを見るべし。
古事記上　かれ、又、其の御祖命泣きつゝまげば見えて　同中　其の人を見えて
是は、又、別にて見得なり。活圖は　見え　見え　見ゆ　見ゆると見ゆれ

むかり

古今戀四　今こむといひしばかりに長月の有明の月をまち出づる哉
源氏帚木　こるゝばかり
此等は、續く詞より續きたるなり。此のばかり又までの類は續くかたよりも切るゝ方よりも承くるなり。
玄々集　舟出していくかになりぬ故鄕は山見ゆばかり今日ぞきにける
源氏帚木　よるべとすばかり
此等はきるゝ詞より承たるなり。若し、續く詞より

いふ時は、見ゆるばかりするばかりといふ格なり
新古今一　獨のみ眺めてちりぬ梅の花知るばかりなる人はとひこで
後撰十四　逢ふばかりなくてのみなる我戀を人目にかくる事のわびしさ
源氏帚木　僅なる聲を聞くばかり
此等の逢ふ知る聞くの語は皆、四段活にて、斷續二つながら同じ格なれど、何れより承くと見るもよろし。此のばかりの例おのれさきに集め見しに、歌文あはせて、五十許ありし中にては、切るゝ方より承たるが、却て多くして、古くは萬葉（十二上）にも、此の例ありき。是一の異常の辭なり。又いかばかりなにばかりなどもいひて、いかほど、なにほどのほど、相似たれど、ありとばかり　それとばかりの如きに至りては、ほどにてはかやうにとをさしはさみていはれぬなり。是も元ばかりは用言（はかる、即ち計量の義）よりいでたるものの故に、其の妙用おのづから

廣きか。又、程と重ねいへるもあり、山家集にあはれとも心に思ふほどばかり云々。又だにと重ねいへるもあり。山家集に都出る今朝ばかりだに云々。此の外普通體言につゞきたるものは、爰にあぐるに及ばず。

又、己が里人に誰ばかりといふ語をいふものあり、按ふに、是は、竹取物語などに見えたる誰ばかりといふことなり。おのれさきに、東京にありし時、陸中國の人と交りけるに、其の人ばかりといふことを皆ばかりといひて、そればりこればり二つばかり三つばりなどいへり。ばかりの切ばりとなれば、全く僻言にもあらざるべし。但し歌文の上に、其の例を見ざることなり。

（未完）

十番歌あはせ（下）

加藤安彦先生判　諏訪忠元

第六番

左　持

秋のきて夕へ涼しく成ぬれと
　いまた扇も捨かたきかな

右　増山正治

今朝よりは秋のけはひもみえなから
　扇はいまた捨られぬ哉

左右朝夕のかはりはあれと
秋きてもならす扇を捨かぬる
　ろのほとはおなしかるらむ

第七番

左　勝　南部利恭

手にならす扇はかりの風たにも
　秋のはしめは先そみにしむ

右　大河内一子

秋のきてたもと涼しき初風に
　馴し扇も忘れける哉

左、難ずべきふし侍らず。右初風といふ事は、秋

の初風とつゞかざれば、詞をなさず。いさゝかの事なれど、

初風といひしはかりに勝といふ
扇は右にさゝれざりけり

第八番

左　諏訪直子

いつのまに秋風立て朝夕に
馴し扇もれき忘れけむ

右勝　酒井鋏子

秋の來て風もみにしむ衣手に
ならす扇はかへりみもせす

左扇をれき忘るゝは、しば〳〵聞馴つれど、右の衣手にならず扇はかへりみもせずなどめづらしう承りぬ。

秋のきて吹かさのみかうちいてし
ことの葉までぞ身にはしみぬる

第九番

左持　建部縫子

夏すぎてけふをはしめの秋なれば
猶も扇のうとまれぬかな

右　蜂賀須隨子

秋といふ名のみは立とけふもまた
馴し扇は忘られなくに

左右ともに、よくよみ出給へり。申むね侍らず。

秋はまた日數もたゝぬけふなれと
うへ扇こそ去たしまるらめ

第十番

左勝　松平浪子

きのふまていのちと賴む扇さへ
忘れ初けり秋の初風

右勝　土岐いく子

かしましき蚊の聲〳〵もうすらきて
ならす扇に秋風そふく

左歌、秋のきて扇を忘るゝは、聞馴て珍らし

からず右は
蚊の聲をとはくはらひてうちならす
扇のかぜや涼しかるらむ
（完）

家兄遺文（五）

白松園主人

左の文は、家兄が、十八の年、陸軍敎導團に入營ましけるとき、夜每消燈喇叭を聞きける後、ひそかにおきゐて、何くれと書きすさびつる文どもなるが、反古にまじりて出でたりければ、かき加へつ。

○鈴木の君を送る辭

明治のはたちあまり、三年の五月、それの日のあした、友とする人、すゞ木の君に別れて、刀禰川をわたる。をとゝしの十二月、此の川を渡りけるときは、下總の國に來て、君に逢ふべきはじめなりき。けふはこの川をわたりて、君に別れて、西の國にまかり下らんとして、渡るなりけり。君は白川のあなた、陸奥の人にて、國に在りけるときは、あしたには末の松山磯うつ波に身をそゝぎ、ゆふべには宮城野の露おしわけてありきけり。三年四年さいつころ、都のてぶりを見むとて來ける。あかずやありけむ。都を出でゝ、刀禰川の岸のあなた、かつしかや眞間のあたりに、あくがれきにけり。これなん、我も同じ心もちて、西の國より、はるばるまうきて、さて、此の川を渡りて、はじめて、君になむ逢ひける。おとゞしの師走のはじめなりけり。この刀禰川の岸のあなたにわたりてより、江岸のうきごとのみ繁く、身にまつはりて、藻汐くむ海士が子の、もしほたれたるやうにて、わびつゝなんすぐしゝ。これひとへに、音もすゞしきすゞ木の君の、かをる言の葉、うまきめぐみのふゆにより〳〵て、さてけふまではきにけるを、再び、この川を渡りて、別れなんとす。あはれ、此の刀禰の川よ、いともあやしき川かも、い

くそむくの、わかぬ野山をへだゝて、海士がたく繩ひきゝて、こゝにつどへて、又更に、浮雲の西と東とにわけ隔つめる心の底、我、いかにくまむや。しかはあれど、かたみにこの川の名をし、深く、心のうちにをさめおきて、物にふれ、わざにつけつゝ、しのぶ草むかしをしのび出さむ、この川はえこそ渡らね、そら行く月の、ふたゝびめくりあふべき、雲井なからずやも。

○鴻臺の舊跡

こゝは、下總の國、東葛飾の郡、鴻臺となんいふ。むかし里見義弘のぬしが、北條のいくさをさゝへける所となん、ふるきふみにも見えたる。旗手の靡き、皷の音など、いみじくものめざましうこそありけらし。今は薪こるおきな、牛ひくわらべのみ住みて、たゞ跡のみぞひとつふたつのこれる。わがすむ宿のうしろに、ささやかなる石碑たてり。里見氏諸將群靈となんしるせる。ふりつもれる枯柴に埋れて、青き苔にれもてもたど〳〵し。いかなる好事の者のかたみぞ、かたへにふりたる、一本の松ありて、里のおきな鐘掛松といひもてつたへたり。畑のもなかに、小高き丘あり。嫗指さして、皷塚とをしへぬ。かれこれ、よしありぬべく覺ゆれど、こまやかなることのもとを、とふによしなし。ただ見ぬよのことを、覺束なくもしのぶのみなり。よしなきわざに、をしき時を過すべきにはあらねど、うつけきさがなるを、いかにせむ。我ながらあさましくて、かくなむ。

しもつふさむかししのぶの里見にと
　はる〴〵きつる我ならなくに

○叔母のうたれたる事

おのが二ッといふ年の事なりけり。世の中いくさおこりて、わかきも、おいたるも、山奥ににげかくれにけり。母はおのれをいだきてにげ給ひ、父は家をもるとて、あたりのつちあなにこもりゐて、あかしくらし給ひけり。叔母なりける人の家は、あはひ遠くはなれて、

山のふもとにありけり。ひころいくさ人をすませたりければ、後なるまつ山の上より、この家をのみぞうちにうちける。さてなん事おこりにけるとて、人々あはてまどひにけり。あかつきばかりの、まだほのぐらきころなりけれど、人々はやがてにげかくれて、かげも見えぬほどぞ、叔母ははひ出でられぬる。をりふし、姉のやどりあはせて、たゞ一人まどひゐ給ひけるを、ぐしてにげむとて、すのこに出でたつと思ふほどに、すなはち、まろびおちにけり。たゝんとするに足なえてうごかず。もゝのわたり、なめらかにおぼえければ、手してさぐるに、ものゝつきたるなりけり。さてはとすかし見れど、ちのつきたるなりけり。おぞましくもくやしく、さらにいはんかたなし。あな叔母はうたれにけり。とくにげよといはれし聲を聞きて、姉はまだをさなかりければ、せんやうもしらで、たちて見、ゐて見、いといたうねをのみぞなかれたりける。とくにげよ、もろともにあへなくなりなど、いかにするぞと、聲ふりたてゝ、はしたなういひこらされければ、やうやうたちはなれて、いづこをはかとおぼつかなくこそ、にげうせられにしか。さて叔母はゐざりよりつゝ、うら門のしきゐを枕にうちふされたるに、ひごろしもべのやうに、めしつかひたりし男、しらぬさまにすぎゆくめれば、そこは何がしならずや。われをぐしてにげずやと、よびとめられしかど、さすがににげもえせで、とかくして、かたにうちかけてぞ、にげたりける。つの音、おどろ〱しく、烟の中よりかしらのわたりを、丸のすぎゆくさまなど、すさまじう、おそろしきことかぎりなかりけりとぞ。さてやう〱家居しげきわたりにたどりつきて、おのゝぎふるへつゝいふやう、今は力つきて、心地しぬべうればえぬれば、わびしかりとも、しばし、こゝのかげに、しのびておはせ。こと人、一人求めて、もろともにまうむかへ侍りなんとて、そこにうちすゑてぞ、にげさりにける。數ならぬげすの、かうやうのをりに、道を思はぬは常の事なり。

今はなき身なり。いかにともなりなんをとて、中々に心おちゐて、そこのすのこのもとにゐざりいりて、ふされたりけるに、いたみつよくおこりたりとぞ。いかにわびしう、なやましかりけんかし。

難波の貞婦

譯賴氏之漢文

昔難波に、をとこをみな二人して、すむものありけり。家貧しかりけれど、なからひいとあやしきまでぞ、ふかゝりける。かくて、年月ふるほどに、男あやしき病にうちふしけり。日頃すぐるまゝに、重くのみなりまさりて、つひに、たつべきさまも見えざりけり。この男、めにむかひて、いひけるは、かくてみづともにあらむも、心もとなし。さるべき人えらびて、ものせよかしといひければ、いとわびて、さらに從ふべくもあらざりけり。さて女、いよいよねもころにかしづきけるほどに、ある日の事なりけり。その屋のかべのひまにとかけといふ蟲の、釘に身をぬかれて、うごめきてありけるをぞ、見いでたりける。二日三日すぎぬれど、なほもとのまゝにて、こなざりけり。いとあやしと見るうちに、今一匹のとかけいで來て、このぬかれたるが方によりけり。ゑをふくみきて、やしなふにぞありける。さては、此のめにもこそとて、いといたうあはれがりて、うちなきつゝ、男にいひけるは、はかなき蟲だに、かくぞありける。人のめとして、いかでおろかに、思ひかふる事のあるべきといひて、いよいよなきふしにけり。男あはれさ、たへがたくやありけん。なまじひに、かくてあらんよりはと思ひこみて、ひそかに、ふぐといふ魚を求めて、くひけるに、血をもおほく吐きにはきて、病とみにいえにけりとぞ。神のわざにこそありけめ。女は虫によりて、みさをゝかため、男は魚によりて、病をいやせり。神はまことにくみすといへる、かゝるためしにや。

（以下次號）

ゆだんものがたり（一）

まに生

昔より、油斷大敵といひて、常にこの油斷を戒めあふことなれど、さて、世の人多分は、皆油斷がちなり。彼の益もなき喧嘩を立ち聞きて、懷中物を掏摸るゝ老爺、店頭の看版などに見惚れて、夕餐の料の油揚を、鳶に攫るゝ小婢等のことは、沙汰の外なれど、油斷すまじと常に心をつけても、尚油斷を見すかされて、思ひもよらぬ、憂きめ辛きめを見ることあり。安永九年のことゝかよ。淺草邊にてとばかりにて、其の所も、其の人の名も定ならねど、年弱の武家、兩三人の從僕を隨ひて通りけり。折から、向より年老いたる盲人、物おもはしげにたどり來しが、すれちがへさま、ヤゝとよびかけて、侍の方へ近づき、

唯今、國元より書狀到來いたし候。甚心がゝりの儀是あり候へど、盲人ゆゑ、心ばかりをなやましをり候。恐多きことながら、讀み聞かせ給はらば

と、甚慇懃に願ひけり。從僕等は、急がせ給ふ御道ぞと、遮り禁めけれど、主人は、盲人の、道理の事なりと、憐におもひて、一封受け取り、讀み下せば

金子無心の事、申越され候へ共、在所も損毛のみ打續き、調達いたしかね候間、金二百疋（五拾錢）だけ差遣し候。

との文面なりき。盲人、とッくと聞き居たりしが、

サテヽヽ忝く候。近來世間一般の不景氣、在所にても調へかね候ふと、無據次第に候。御急の路を、幾重にも許させ給へ。然らば、其の二百疋、御渡し下されかし。

とて、手をさし出しければ、若侍大に驚き、文面には差遣すとあれど、狀中には見えず。別に屆け來りしにあらずやといひきかすれど、盲人、つやく\承知せず。果は、杖とりなほし、身がまへて、聲をあらゝげ

なにッ。盲人と思ひあなどりて、僅二百疋ばかりの

金子を、奪ひとりしよな。侍ともあるものが。ヤイこゝな騙奴。

と聞くにも堪へぬことを、罵りつゞけゝり。何事ぞとて、都の習、見る人は乍ち堵の如くなりぬ。主從は、よしなき不便を加へたるばかりに、殘念至極に思へど、事情知らぬものは、人は見かけになど、囁きあふもあり。遙に後方に立てるなどは、斯樣なる盲人の、老人をくるしむる、くされ侍、搦れ、殺せとわめくもあり。耻しさにさへ堪へ難うて、今は、疾くこの所を立ち去らむと、二百疋の金子をとらせ、萬のことを忍び、立ち去りしとぞ。あはれ心のうち如何なりけむ。老人不具者は、憐みいたはるべきものなりといへど、油斷せば、斯樣に、うきめ辛きめをすることもあるぞかし。



桂里の記

故細川治年の女

佐々豊水しるす

此紀は細川越中守治年朝臣の末女、就姫の、久我通明卿の簾中なりしころ、ものせられしとぞ。熊本藩士、鹽山林常が藏せるを、寫して女鑑にいだしぬ。

そのかみ、京極の宮、桂の里に別莊をつくりたまひ、春秋のながめをなしたまひしが、今になほ、けしきかはらずそなはりぬ。こゝに、祠堂たてたまひ、八條宮の尊影のかたはらに、先祖幽齋君の御影を。安置せられしよし聞て、もとより詣でんの心ざしあり。ことに、今年は世をさりたまひしより、百歳もはや二度めぐり來ぬ。いかにもして、拜せんものと、宮の諸大夫、尾崎縫殿頭綾興朝臣のみちびきをもつて、おもひたち侍り。ころは、五月雨の空いとどさへわづらはしきほどなれど、やうやう晴間まちえて、今日は中の八日とい

ふに、しののめつぐるころより、家をいづる。空はまだくもりぬ。いかがあらんと、ながめすて、ゆくままに、朱雀野をすぐれば、日影、おぼろながらも。さしいづるばかりになりぬ。末廣き田面の稻葉の朝の露の、おもげなるを、吹わくる風情も、をかしくうちながめて

植わたすしづが早苗のひとかたに
なびくもすずしつゆのあさかぜ

桂川の渡につけば、こなたの岸に、舟さしよせて、さながらのりてわたるに、四方のながめも、ところのさまも、きよらかにめづらしく、行をいそぐ道ならねば、ながめまほしくおぼゆれども、舟出をいそぐに、ともにいそがれて、

今しもとおもふながめもかつらかは
いそぐわたりにこゝろのこして

すこし河原をゆけば、またせばき川あり。土橋をわたりてゆく。この橋は、今日のためにとてまうけられたるよし。諸人のゆききの橋は、はるか下にぞみゆる。これより、御館はいくほどもあらねど、この先にしばしゆけば、地藏堂あるよし。文武天皇の御代、染殿の后の建立にて、ふかく心をよせたまひ、祈願むなしからず、なほ代代にいちじるき御おぼえましますとて、綾與朝臣のものがたりをきくに、よき序にこそまゐりてめど、まづその方をさしてゆくに、空は名殘なく晴わたり、日影のいとあつきに、わづかの間ときけど、山路なれば、かろうしていたりつき侍りぬ。さて地藏尊をふしをがみて

世にひろきちかひときけば今こゝに
あふぐこゝろのすゑものどけき

右の方に、ひとつのしるしあり。よりてみれば、文武天皇としるされたり。まことにおもひもかけぬ御事にかたじけなくと申すも、なかなか。おそれかしこみて拜奉る。しばしは、この御堂のかたはらなる家にて、湯などくみやすらひて、桂の御館へいたる。まづ、

手あらひ口すすぎ、衣服あらためて、綾興朝臣にあないをこひ、庭つたひ、祠堂へ詣で、八條宮の尊影を拜し奉る。御かたはらの板の間に、幽齋君の御影をかけたり。

　ちらざりき葉末のつゆの身にもいま
　　むかしをかけてあはぐべしとは

拜み終へて、つくづくとおもふ。かずならぬ末の身にて、今かゝるかしこき御姿にむかひまゐらせ、またはいにしへのあさからざりし御惠のほどぞ、かんずる。かたじけなさのあまり、なかなかまをしいでんも。はばかりすくなからねど、いささか心ばかりにのべ侍り。

　言の葉にかかるちぎりもすゑとほき
　　めぐみのつゆのひかりとぞおもふ

家のたたずまひよりはじめ、あなたこなたに數をつくし、死は、名たたる人の心をよせて、みがきしつらはれたるに、また庭前のさま、池の面、木石にいたるまでたぐひなし。おろかなるほどには、言ならべんもかへりてむげに口をしくやあらん。舟にのりて棹させど、風情もかはりてをかし。

　さす棹のしづくもすずしいけの面に
　　うかべるふねにかよふゆふかせ

この舟のうちにも、おほみきなどたまひけれど、日影かたふくまで、くみかはしつゝ、ひとしほ興をもよほし侍りて

　夕日がげかたふくなみにふねうけて
　　なほもめぐらす今日のさかつき

たそがれになれは、あかずをしけれど、館のうちにかへりいるに、いつしか燈とるほどになりぬ。暮はてぬれは、よるのもの、かうらんのもとまでも。ひとつふたつ螢の飛ける、晝みし螢谷おもひいで、たゝずみてみるまゝに、光のあまたおひぬれど

　飛ほたるかずそふまゝに名にしおふ
　　たにのひかりもさぞとしらるゝ

實に、名もしるくぞおもはゆる。みるまゝに、いとど小夜もふけぬべし。かへるさをいそぐにも

かへるべきかたもおぼえず暮る夜に
またひときはのながめそへけり

今朝越しゝ川のわたりにいたれは、岸にかゝり火ともしたてゝ、水くらからず。舟のゆくへも、をかしくぞある。

かつら川こぎゆくふねのみちみえて
うつるもすゞしかゞり火のかげ

朱雀野をもすぎゆき、里にいれど、行あふ人もなく、たちならぶ軒端も、いとものしづかにて、やうやう夜もふけぬらんとおもはゆる。雨は、にはかにふりきぬ。いとゞ、夜行道のはかどらず。からうして、家にかへりつきぬれば、早も子の時すぐるほどになり侍りき。

○幽齋君とは、細川兵部大輔源藤孝朝臣なり。

○百とせもはや二度めぐゝ來ぬ云々とは、幽齋君は慶長十五年庚戌八月二十日七十七歳にて逝去、その二百年忌は文化六己巳年なり(豐水またしるす)

うれし涙(下)

石川彦太郎

山路を越えて向ふへ行けは、杉生村とて、やゝ賑やかなる所ありけり。此處より、中京府迄通ずる鐵道あり。終り列車に乘り後れてはと、急ぎて、停車場にまで驅け行けは、發車の時刻前、十分ばかりの時なりけり。驛長出でゝ見廻はるうち、ふと、澄子のうちしほれて色青ざめたる、いたはしけなる有様目につき、何呉と尋ぬる様の、いとも懇なるより、澄子も、遂に事のよしを物語けれは、いとあはれがりて、くさ〴〵云ひ慰め、物など與へて、車にうち乘せたり。軈て、滊笛の一聲は、眠れる村里の初更の夢を驚かして、鐵軌をきしる列車の響、やゝ〳〵、音高くなりぬ。終り列車の事なれは、

乘客も、左まで多からず。何れも、處寛かに排べて、窓の外をうちながめ、時の間にかはる山野の夜景のをかしき眺望を愛で居たるが中には、風高く、氣清き白沙青松の湖畔に、滊車の早きを怨む客も少からりしかど、澄子は、たゞ獨、室の片隅に腰うちかけて、兄の事のみ思ひやれは、なか／＼に、滊車の遲きをそ、ひそかにかこちて居たりける。

をりしも、隣室より頻りに、澄子と呼ひつゝ入り來るものあり。誰ならむ、なつかしげなる聲よと、ふり向けは、姿も、いとゞ打ちやつれて、顔の色も、たゞならぬ我兄の清雄なりけり。嬉しさの餘りに、互に抱きあひて、暫時言葉もながりけるが、やがて、兄は、口を開き、妹に向ひ、我この度のあやまちは、最早云ふもせんなくなりぬ。おのれの爲に扶けんとて、上官も、友人も、これ、かれ手を盡しゝかど、甲斐なかりけれど、兎てもたすからぬ命、それにつけても、名殘惜しは、父上と、汝との二人なり。父には、既に、文出したれど、汝の事、言ひ遺したれは、後の事など言ひきかせ置きたくて、此處迄尋ね來たるなり。我無くならは、父を見奉るものとては、いましの外にあるとなし。能く不孝なる兄にかはりて、孝養怠るまじきぞ。見よかの山のこなたの小高き岡に設けたる臺こそ、軈て、おのがうたるゝ場所なれ。最早、かの場所に行くべき相圖の鐘もひゞくなるべしと云ひ終ると共に、凄しき音して、哀しき鐘は告け渡りぬ。いざさらはと握れる、妹の手をふり離ちて、立ち出つるを、今しはしと呼びとめんとすれは、氣笛一聲、澄子がうたゝ寢の夢を驚して、中京府に着きたるを報じぬ。滊車より下りて、仰ぎ見れは、月は尾の上に傾きて、夜寒の風に身をきりぎりすのよはり行く、今はの鳴く音、かなしとも、亦、かなしかりけり。

夜もほの／＼と、明け渡る頃しも、大君のおましまいかめしき宮殿の門前に、たゞずめる、あはれの處女子は云はでもしるき澄子なりけり。冴え渡る月夜の霜の

氷の及ぬきかざしたる銃を手にして、さも恐ろしげに立てるは、この王宮の門衛にて、警固の武士なり。澄子は、門衛の前に進み願はしき事こそ侍れと云へば、猛々しき武士の常とて、聲あらゝげ、乞食に等しき賤の女、此の王宮に何の用かあるべき。去れ。早く去れ。去りて、民家の門に立てと、左も情なげに云ひはなてど、澄子は、如何でか退くべき。頻りに、願ふことの侍ると云ひて止まず。さらば願とは何事ぞと問ふに、王君に拜謁いたしたしと云ふ。門衛、から〳〵と打ち笑ひ、畏くも、王君に拜謁仰付けられたしとな。其の下腐の身が。と又も、うち笑ひてのゝしるに、交更と呼びつゝ、次の門衛は來て立ちぬ。此の門衛は、さきのとは異りて、優にやさしき人なりけん。澄子のうちしほれたる有樣を見てあはれがり、聲もやはらげ、何事ぞと問ふ。澄子は、再び願ふやう、妾は、深草村の片田舍に住める者。是非とも、急ぎ、大君にま見え奉りたうてなんと云ふ聲、早や涕ながらなり。左りとて、左樣の姿にて、王君にまみえ得べしとも思はれず。願ぞは、そも如何なる事かと問へば、妾は、けふの午前に、うち殺さるゝ清雄の妹なり。如何にもして、王君に願ふことこそ侍れと云ふ。門衛、つく〳〵とうちながめ、清雄は、いましの兄なるか。おのれの友は、いましの兄と同じ營内にありて、親しき中なれど、如何にもして、扶けばやと、きのふより、大將のかた〳〵にも願ひたるやうなれど云ひたるまゝにて、後は言葉も無かりしが、さて、暫時まて、兎まれ、角まれ、其の由聞え上げんとて、人を呼びて、云々と云ひふくめて奏せしめぬ。

待つま程なく、澄子は、人に導かれて、宮中に入り、王君の御そば近く案内せられぬ。陛下は、例の事どもし了へて、朝の祈りもすみ給へど、おのが室に入り給ふに、首を垂れておぢおのゝきたるあはれの童女あり、陛下、玉座にならせられ、澄子を、近う召させ給ひて、やさしく、ことの由を問はせ給へど、澄子は、うや〳〵し

く禮をなし、さて申し上ぐるやう、妾は、畏くも、陛下のしらせ給ふ大御國の中なる深草村の住人澄子と呼ぶもの。數ならぬ、身をしも、御そば近ぅ召させ給ひて、親しく大御言葉をかけさせらるゝことの身に餘る光榮嬉しうなむ侍る。掛卷も、あやにかしこき、陛下の山よりも高く、海よりも深き大御惠を被れる妾、寛大なる大御心にあまへて、願ひ奉ることこそ侍れ。其は外の事にもあらず、妾の兄清雄は、二歲前より、君に召されて、鎭西軍に屬せしが、先つ日の戰了へて、歸りし夜、營門を守りしが、怠りて眠りたるより、死刑の宣告を受けて、今日の午前にうしなはるとこときはまりし由。如何にもして、兄の死をたすけたく、昨日の夕暮より、野こえ、山こえ、只今、やうやう御前に參り侍り　御情深き陛下よ、妾と　ひとりの父とをあはれとおぼし給ひて、兄の死を許させ給へと、聲もふるひつゝ聞え上ぐれど、陛下は、未知り給はぬみけしきにて、いぶかしげに、首傾けて居給へりしが、折柄つかさ人、文もて參れり。文箱のうちの數多あるが中より、一つ取り出し、是なるべしと、封うちひらきて御覽じ給ひて、仰せ出さるゝやう。不憫なる女の童よ。いましの心のうちはいとあはれに思はゆれど、此の事ばかりは許しがたし、汝は、いまだ知らざめれど、彼の哨兵と云ふは、いと重き務にして、もし怠ることある時は、數多の忠勇なる兵士を時の間に失はしむるやもはかられず。又、かやうの罪を犯したるものをしも許しやるやうの事ありては、是より後數多の兵士をして、おのかじゝ務めを全うせしめ難かるべし。如何に云ふとも許されじと云ひきかせば、澄子は、最早せんなしとは思ひながら、懷に入れ置きたる、兄が最後の文を取り出して、これ一わたり御覽させ給ひてんやと、涕ながらにさしぐれば、陛下、そを開きて熟々讀み給ひ、暫ありて、傍なる机に向はせ給ひ、何やらむ、書きしるしたるを封し給ひて呼び鈴をうち鳴らし給へど、人出て來りたるに、これ、急ぎ持て參れと仰

せ給ふ。陛下、つく〴〵泣きふせる、澄子の頭を撫て給ひての給はく、殊勝なる童女よ。いましは愛でたき心もてる物かな。兄の死を許すべし。明日は、兄の勳功にめでゝ、暇つかはすべし。汝は、兄と共に歸らむとならば、我宮中にて待ち、故郷へもこのよし云ひ送りね。けふ歸らむとならで、歸りねど、斯くありかたき、大御言葉をうけたる澄子の喜び、譬へんにものなく、嬉し涕にうちむせびて、夢か、現かもわきかたかりけらし。畏き御前をも憚らず、あるは立ち、あるは坐し、手をふり、足をあげ、跳るが如く狂するが如くになむありける。暫くして、我われに歸りけむ。靜に、御前にひざまづきて、うや〳〵しく奏すらく、餘りの嬉しさに、畏き御前をも、うち忘れての振舞許し給ひてよ。思へば〳〵、既に死ぬべかりし兄の命をたすけ給ひしだにあるを。況いて御暇をも給はりて、故郷へかへしつかはさるゝ大御惠、妾には、更にこたへ奉らむ言の葉もなうてなむと云へど、陛下龍顏、ことにうるはしく、再び、子に向ひての給はく、人その友の爲に、おのれの命をも致す。是より大なる愛は無しとかや。我知らす國民は、孰れも、皆、いましの兄の如き心をこそもたまほしかるべけれ。いざさらは退きて、かなたの室にて、心のまゝに休らへよとの給ひて、つかさ人に何くれと心してもてなすべきよしのかたじけなき仰でど下し給はりぬ。

明くれは、長月十七日、空高く晴れ渡りて、風うらゝかなり。深草村の村はづれに、柴門いかめしくつくりなして、交叉せる國旗は、いさましく中天にひるがへりて、山野の紅葉に映したる、えも云はぬながめなりけり。里人、こゝに打ち集ひ、今や遲しと待つ程に、午過ぐる頃なりき。王君より賜はりたる、麗しき衣着かざりたる澄子と、軍服いかめしく、裝ひて、譽ある勳章を胸に輝したる清雄と、二人、共に喜色滿面に染め出されて、柴門に入り來れは、父は、多くの人の中より進み出でゝ、親子三人手に手を取りかはしたるま

ゝ、何の言葉も無かりしかど、はら〳〵と落つる涕は、互の胸に湧き出づる感慨の泉の溢れたるをなむ知らせたりける。

（をはり）



暮秋月　東久世通禧

さき匂ふきくのまがきの影見れど
はつ月よりもおもしろきかな

初霜　佐々木高行

破れたるかゞしの小笠かたぶきし
うへにむすべる今朝のはつ霜

野霜　高崎正風

朝日さす野ぢのさゝ原わけくれど
しも打けふりとくるなくなり

雨中落葉　鍋島直大

こゝろなく庭のもみぢ葉ふき落す
風だにあるをふるしぐれかな

時雨　前田利嗣

軒ちかく夕あさりするむらすゞめ
鳴く聲たえてしぐれふりきぬ

暁天時雨　前田利鬯

紅葉見にいでんとおもひし暁の
こゝろにかゝるむら時雨かな

夜虫　岡部譲

よひの間ははれてもわかぬ虫の音の
耳たつまでに夜はふけにけり

月前時雨　宮地嚴夫

山の端を月の放るゝをりしもあれ
のきに音してゆくしぐれかな

時雨廻山　北郷久政

山の端にやとりさだめぬうき雲は
いづくをめぐる時雨なるらん

原時雨　坂正臣

立ちよりて時雨しのがんかげもなし
たはたとなれる那須のしの原

月下鹿　三輪義方

くれはてし野路の萩むらつきかげに
ふたゝびみえてを鹿なくなり

秋の雨後　下田義天類

雨晴れて鳶ぞなくなる神無月
小春ひよりにあらむとすらむ

田家時雨　赤松景福

刈る稲をはさむはさしも定めなく
しぐれふるなり小山田のいほ

せつ女　佐々豊水

夫につくし親につかへし眞心は
ことむの花にあらはれにけり

林下落葉　鍋島榮子

このころは落葉つもりて里はやし
下ゆくひとのみちたどるまで

山家落葉　蜂須賀随子

朝な朝なくむ山の井の水をあさみ
うもるゝはかりちる木葉かな

濱松　前田朗子

濱風はあらくふけどもたちならふ
いそやま松はいろもかはらす

夜落葉　南郷柳子

月をのみ板にのこして夜あらしの
あたら紅葉をちらしけるかな

籬殘菊　柳原愛子

移ろはて咲きにほひたるきくみれは
まかきに秋やなほのこるらむ

橋時雨　松平健子

待乳山日はさしなからあつまはし
はやくも渡るゆふしくれかな

落葉靜　小池道子

風絶えしあしたのにはにふたつみつ
ちりそめにけるのきのもみぢ葉

月照落葉　北島以登子

もみぢ葉のちる影みえて冴る夜の
月はかれ木にかゝりけるかな

竹窓時雨　小川直子

木からしにもまるゝ竹の音たにも
わひしき窓にしくれふるなり

山時雨　服部磯子

山のはの曇るとみれはかつはれて
いく度かゝるしくれなるらむ

山路菊　安東菊子

み佛にたむけのためかしつのめか
たき木にそへし山きくの花

飯田武郷翁を送る　下田義天類

伊勢の海や、千尋の濱の、底深き、沖つ いくりは、深みるの、さかゆく所、神路山、かさなる峰の、おくか無き、五百つくらぞは、眞榊の、繁れる境、草も樹も、所得てこそ、程々に、繁り榮ゆれ。年のはに、いよよ榮ゆく、眞賢木の、さかしき我が兄、皇國の、學の道に 深みるの、深くわけ入る、おすひの飯田の翁が、こたみ行く、五十鈴川らの、皇國の、學の庭は、我かせ子の、いく可き境、わが翁の 住む可き所。その人は、さはに在れども、學館は 良き人得たり。學びやは ここにあれども、わかせ子は、所を得たり。はしきよし、飯田わかせよ、そこをしも つひのよるべと いきの緒に、掛けて努めて、こゝたくの、學の子等を、おのが子と、はくゝみひたし、たぐひなき、學の道を、わが業と 勤み研き、伊勢の海の、千尋の濱の、底深く 思ひ深て、神路山、重る峯の、彌高き、蹟を遺せ、眼の前の、別は解かじ。歸れともいはじ。

つきせぬなげき（終）

師岡須賀子

それよりは、新聞に通知にて、弔ひ來ます人々も、いよ〻繁く諸國よりの電報打ちしきる程に、御送りすべき日となりぬ。われは喪主として、白き衣來て谷中に御柩の御供せし折の心地、今思ふも堪へがたくなん。その折のことゞもは殆筆にも言葉にも出でずなむ。

身にかへて祈りし甲斐もなかりけり
神にも我は捨られにけむ

をしからぬ我身のこりて何かせむ
たのめし父のまさずなりては

如何にせはよもつ平坂關すゑて
父を再度逢ひ見らるべき

ほどなく、兄上は旅立ちぬ。殆、家にはあらぬ人ながら、此度だにと思へど甲斐なし。それよりは、おとの事どもにつけては、年老いたる母上と、妹と、我とのみ、去年の秋よりのつかれに、歎の中の闇にさへ暮れ居るほどに思ひの外の事のみ多くて、人の心の奥さへも、今こそ推しはかられれ。

父なしに我なりはてぬ今よりは
いかにしてかは世を過すべき

夢とのみ思ひたどれど今も猶
覺むる現のなきぞ悲しき

十日〳〵の御祭すとて、神官達の、祭文よむにつけても

面影は身をはなれねどいまもなほ
在すとよりは思はざりけり

など獨言つ折もあり。松山に、秋田に、長門に、上總に何日の御祭しつ。追悼の祭しつとて、其の形況に、歌に、文に、數多く贈らる〻か、何れも心篤さの嬉しきにつけても、又、悲しくて、あはれ、己の孝養の足らでやと、胸せきあくる計になん。

今更に悔の八千度甲斐なきは

父につかへの疎にして
五十日の御祭となりぬ。忌明なり。今は、人々の許をもおとつれ、病中よりの禮謝もとは思ひ余りながら、身は、只當時のまゝなるに、漸う、勞さへ出で來て、堪へ難けれど、書狀もて申しれきつゝ、只耄けたる様なるを、人には、只、心弱しとそしられんかし。御肖像、數多復寫して頒つにつけても

肖像にむかひまつれば我ながら
我にもあらぬ心地のみして
見るにつけ思ふにつけて戀ひしきは
父が在し昔なりけり

と偲ふ事のみぞ多き。九月となりぬ。忘られぬ歎は、今も、只、その時のまゝながら、去り難き世のつとめに。打紛るゝ程も思へど、二百日に余りぬ。

其のまゝに忘れぬ物をいつのまに
魂まつるべき秋や來ぬらん

その折は、只、全じ道にもと思ひせまりし命さへ、かくかけ止めたる、我ながら怪しき計なるや。さはあれ、親に別れの悲しきは、我のみにもあらじを、千代もと祈るは、人の子の常なるを、稚きほどにて、殆見知らぬ人さへあるものをと思ひかへしても、又、止めかたきは甲斐なき心なりかし。

心には脱く折あらし藤衣
よし年月はへたゝりぬとも
天かけりみそなはしてよ斯く計
忘るゝ間なく戀ひ偲ふ身を

實に心弱さの極み、耻かしき限にてこそ。あはれ。

（をはり）





●東宮殿下の御西遊

殿下、御西遊の御事は、前號に記し奉りき。かねては、十月十五日、沼津御發艦の御豫定なりしが、氣候不順のため、御順延となりて、十九日にいでたゝせ玉へり。畏かれど、つきぐ\に、其の後の御事を記し奉らむ。

御召艦は淺間艦なり。常磐、高砂、明石の三艦、御警衛しまゐらせ、十九日午後二時に、沼津を御發艦。松島、八島、浪速、秋津洲、及び、鎭遠の五艦は、神戶に先着したりき。二十日午前十一時海上も、いと靜にて神戶に着せさせ玉へり。折から、微雨ふりしきりたれど海軍少佐の御軍服にて、外套をも召させ玉はで、人車にて神戶停車場に物し玉ひ、午後零時三分に、舞子に着、又、人車にて召させ玉ひて、有栖川宮御別邸に入らせ玉ひぬ。

御自重　廿一日朝松林御逍遙の折とぞ承はり及びし。御別邸御出門の際、警護の爲門側に駐在する巡査に向はせられて、無造作に汽車は別條なきかと問はせ玉ひぬ。御略服を召されたる事とて、出入しげき昨日けふの習ひに、巡査は、尊とき御方とは窺ひまつるよすがもなきまゝ、此方も、無造作に、別條はありませんと答へ申しけり。然らぬとて、御門前の鐵軌を横ぎり、御散步あらせ玉へりとなん。後にて事のやうを思ひ當りし巡査の、恐惶に堪へぬ思ひせしなるべし。御身輕うものしたまふものから、世にも尊とき、御身の上を顧りみ玉ひて、御自重あらせられたる遠き慮らせ給ふことぞいとかしこき。

廣島行啓　廿三日舞子より、海路廣島に行啓せさせ玉

ふ。此度の御召艦は高砂にて、其の夜は小豆島に泊せられ、廿四日波も靜げき瀬戸の內海に御艦やらせ玉ひ、備後の鞆に、暫時御艦をとゞめ、御遊獵の御催ありき。廿五日宇品に御安着。明石叢雲は、神戸より隨航し奉れり。藝海に入りて、常盤も、亦、其の列に加りき。宇品より。人車にて、廣島の師團司令部內なる御泊所に、午後二時三十分に入らせ玉ひぬ。此の日は近衞步兵少佐　の御正裝に、菊花章、旭日桐花章を佩はせられ、棧橋の奉迎者には、一々擧手注目の御答禮遊ばされ、御沿道堵列の一般拜觀者に對せられても、御車上笑を含ませられて、御機嫌麗しう仰がれ給へり。

廿五日、第五師團の營庭にて、兵士の綱引、銃槍仕合等、御覽の後、同師團西練兵場北手なる分列松の後方にしつらへ奉れる、白木造の御覽所に入らせ玉ひて、平壤擬戰發火演習　を御覽せ玉ふ。特に設けられたる、平壤の擬堡壘、すべて、四座あり。第十一聯隊の外濠を、大同江の流れに想定し、偕行社內を牡丹臺になぞらへ、（淸軍旗を掲ぐることは、故らに見合せらる）壘下には、三十吉魯の線火藥に地中七尺の處に埋めて、大地雷を裝しつ。　殿下の御覽所に入せらるゝや、淸國軍に擬せる第十一聯隊第三大隊（白帽）及び野砲山砲、各一中隊は、江村隊長、之を率ゐて、先づ、其壘に據り、日本軍（黑帽）たる同聯隊第一大隊（右翼）同第二大隊（左翼）は、野砲、山砲工兵、各一中隊に、小行李、衛生隊を加へて服部第一聯隊長の指揮の下に、今や攻擊を開始せんとしつゝあり。抑も、此回の擬戰演習は、當年、平壤の大捷を紀念せんとて、其の役に當りし名譽ある、我第十一聯隊の將士をして、夫の船橋里の苦戰を演せしむるにあり。而して、日本軍に將たる服部大隊長は實に當時の第二十一聯隊中隊長として、奮戰の餘負傷したりき。斯人にして、親しく、此の演習を指揮す。船橋里苦戰の狀躍々生動せずして巳まんや。

殿下には、兩軍が銃砲交換の壯を御目じろぎもあらせられで、戰酣はなるに方りては、御椅子を離れてぞ

御覽せらる、山口師團長に、夫の小原副官、御階の下に控へし由聞召させたまひて、それ呼べとの仰、畏みて小原少佐、身に餘る面目を施しつゝ、師團長を經て、御物語に及ばんとしたるに、殿下は御座近う招かせられて、直に聽取らせ玉ひつゝ、日本軍の戰振に御注目ありて、御聲も朗かに『壯快なり』との御詞を絶たせられず。大地雷の轟發せし折などは、嘻々と御笑ひの聲さへ漏るゝを承はりしとぞ。

午後、東練兵場にいでさせたまひ、定期檢閲觀兵式に臨ませ玉ふ。廿七日には

呉軍港に行啓、假製海底水雷發火、水雷艇水卸等を御觀せられき。廿八日、江田島廿九日には、宮島に行啓せさせ玉ふべき。御豫定と承りぬ。

舊大本營なる御假殿には、初め、大元帥陛下の御居間を供し奉つる筈なりしに殿下には御父君の行在所たりし御間に駐るは、畏れ多しとして御辭退あらせ給ひし趣にて乃ち、皇后陛下の御在所たりし所を充て參らせし次第なりと洩れ承りぬ。何事に就ても御孝心の程、誰かは感泣せざるべき。また、御西遊の後の御居常の御摸樣承るに、殿下は大抵每朝、六時頃御起床ありて、冷水もて、御肌を拭はせられたる後器械體操を遊ばされ、朝餐には牛乳二合と、麵包を食され、夫より暫時御散歩あり、午前九時頃より、正午迄は、各侍講より和漢洋の日課を御侍講申上げ、午餐は洋食を食され、午後は、必ず、屋外御運動あり、晩餐には、和食にして御就寢前に御入浴あり、午後十時に御寢に就かせ給ふとぞ、

侍醫は每朝御脈と御體溫、夕方には御體溫のみを拜診し、又、大抵二日程以前より、大膳職の差出すべき獻立を檢案し、尙は當日の御料理も拜味し奉りて、玉體に御障りなからんことを勤むるよし、御航海中は、御召艦内に在らせられても、御膳部は、一々大膳職より、奉るべきも、陸上とは異なりて、多くは洋食を召さるゝとなり。其の他御狩獵に出ます際、御飲料の用水

も、一々侍醫より差上ぐるなど、稍、御窮屈なるやう想像し奉れども、御習慣とならせられたるにや、少しも御變らせなく、守り遊ばさるゝとの御事なり。先年の御患部は、些の御故障もなく、玉體、いと御健全におはして、専ら御運動を好ませ給へり、再び、舞子へ、還啓後は、日々、一定の御散歩は申すに及ばず、御狩獵、若くは、大山寺などへの行啓、遠くは、姫路第十師團、大阪第四師團へも御成りあらせられんなど傳へ奉りぬ。

●九條公爵邸の茶話會　九條公は、節子姫の、華族女學校附屬幼稚園に通はれたる當時より、現今に至るまで、教訓を受けられたる、內外の各教員教師一同を去二十九日午後四時より、赤阪福吉町の邸に招待し、茶話會を催されしといふ。

●節婦　熊本縣菊地郡戸崎村、大字、赤星に高山太多女といふあり。明治三年、廿二歲にて、高山新喜といふ人に嫁ぎしより、能く舅姑には孝養の道を盡し、夫には、貞淑に仕へたり。程なく、虎太といふを産み、明治六年九月、次男、仁吉の生れむとする頃、夫病に罹りて、死去りぬ。太多女は悲しき中にも、能く舅姑を慰め勞り、亡夫の後の世の營、遺子の兩人をいつくしみ育て、おろそかなることゝてもあらざりき。明治十年に、姑夕ケ、翌十一年に、舅如煙死去りしが、其の折の、太多女が心づくしは、筆紙に盡さるべきにあらざりきとぞ。是よりは、唯亡き人々の追福をいのり、二人の遺兒を、あッぱれ成長せしめて、家を顯さしめむと、日夜心を碎きけり。斯る節婦の眞情、いかで達せざる事のあるべき。明治三十年に長男虎太は、理科大學を卒業し、今肥前國、尋常中學校に在りて、子弟の薫陶に餘念なく、次男仁吉は、廿六年に士官候補生となり、是も、今は卒業して、對馬國在役中なりといふ。太多女は、弱きより、故に人の目にとまる程の事を避け、つとめて、平凡に世の人と交りしかど之の類なき心ばへは、自然よろづの行にあらはれ、人

々をして、欽望の情に堪へざらしむといふ。此の頃、佐々豊水氏等相圖りて、太多女の平生を、備に官に上申せりといふ。

●勤儉　大分縣西國東郡田原村に、溝部世喜子（八十）と云へる人あり。天資勤儉義心に富む。農を以て業とせり。若き時、不幸にして所天を亡ひ、貧しき一家の經營を、一身に引受け、黽勉能く、其の業を勵みたれば、常に村内の龜鑑を以て鄕黨の敬重を受けき。故を以て、舊藩主松平家より賞與を受くる者二回に及べり。年老いて養子（今は亡し）芳太郎に家を讓り、別に一個の粗末なる隱宅を構へ、獨り之に住ひ、恬淡風物を愛すれども　而も尚稼業を廢せず。其の所得は、悉く慈善事業に投じ、以て無上の樂みとなし居りしが、本年八月に至り、始めて日本赤十字社の主旨、及び、其の成立を傳聞し、直ちに分區委員の許に至り、金一圓を添へ、入社の申込を爲し、其の手數を謝し、且つ曰く、妾は老年にして餘命旦夕に迫らんとす。萬一、醵金の義務を了らずして、死亡するが如きことありては、遺憾少からざるのみならず、上に對して畏れ多きことなれば、今日より、食餌其の他に節約を加へ、以て其幾分づゝを蓄積し、明年中には、是非とも殘額を一時に出金して安心せんと。爾來一層稼業に努むること、壯者も尚及ばざるの氣概ありといふ。

●篤行　福岡縣東郷村農吉田安之丞、性質温良質素、常に、兩陛下の御肖像を奉安し、播種より秋收まで、一切不淨を用ひざる米を以て、毎朝別爨に炊き、之を供饌すること三十年、一日の如しといふ。ありがたき心がけなり。

●奇特の漁夫　香川縣中笠居村の漁夫、兼元藤兵衛久保某より、少許の資金を借りて、漁業をなし、數千金を利したるを以て、某の賜となし、一千圓を贈りて、其の恩義に酬いんとす。某受くべき理由なしとて、之を固辭したるより、該金を同村小學校基本金に寄附せりといふ。常に荒男の例にひかるゝ人の中にて、この

奇特の行あり。紳士と稱せらるゝ人々、よく愧つることなきを得るや。いかに。

●小年の龜鑑　大和國五ヶ町川岸吉太郎(十三)は、同地小學校第三學年生にして、父の牛乳搾取業を助け、一里餘を隔たりし、只一人の需用者に、毎朝配達をなし、歸りて學校に出で、曾て缺席したることなし、父、其の勞を慰するため、一回七錢を與ふるを定めとせり。吉太郎、此の七錢を盡く銀行に預け、其の額既に二十五圓に達し、學資の外は一厘も空費することとなしとぞ。益もなきことに、金錢を浪費する子達は、かへりみざるべからず。

●また　下野國豊郷村、小學校高等科四年生、高橋濟治(十七)尋常科三年生佐藤權藏(九さい)の兩人資性温良、常に克く師父に事へ、又、克く友僚に交り、殊に好學勤儉の行爲嘉すべきものありとて、栃木縣より、日本文典一部づゝを賞與されたり。たれも誰も、かくあらまほし。

●六里の通學　茨城縣湊町の安藤富次郎、(十七)水戸中學校に入學し、日々往復六里の道を通學し、本年四月より、曾て缺席したることなし、又、家に居ても、夜は、必ず、十時まで讀書に勉むと、お手車にて、往復しながら、猶むづがらせたまふ公達は、よろしくかんがみざるべからず。

●童子の双美　山形市小學生徒、鈴木定吉同朝田萬次共に、年十一歲、父の家業を助け、毎日、朝夕二回、豆腐函を肩にして市中を行商す、而かも、學藝衆に超え、常に首席を占む。父の用をいひつくるも、母のいさゝかの事をたのむにも、學校の用のいとまなけれどとて、聞きいれぬもありとか。あゝ。然る人にかぎりて、常に末席にむかりさまよふぞかし。

●大人も耻しき行動　備前兒島郡小串村大字阿津字松蔭の道路中、過般の降雨にて、處々墜落したる處あり。然れば、夜中人の誤りて墜落するもの少からず。晝間とても、小兒など往々蹈滑りて負傷するものあれ

ど、同村役場にては、風害後の始末に多忙を極め居る折柄とて、未だ修繕に着手する能はず、其儘打捨てありたるを、同村立大門尋常小學校の生徒、藤原敬三(十二)といふが見て、危險の至りとし、過般來同志の生徒山根明一(十)小判數惠(十)山根源吉(十)山崎義三(十)谷合磯治(十)等五人を誘ひ、退校後餘暇を以て、手に〲、近傍の山野より土砂を運び來り全く修繕を終りたる由、此大人にも有り難き殊勝の心掛け、學校に聞えしかど、校長大森卓氏は、自家薫陶の生徒が斯る善行ありしを大に喜び、激賞措かず、此の程右六名に對して各々賞狀を授與したりといふ。世には、父母兄弟のをしへをも聞きいれず、他人の垣根を壞し、新しき板塀に樂書などのみしありくを。あはれ、このふるまひよ。

●無錢の旅行　島根縣靑原村小學生徒百五十餘名、教員八名に、引率され、三日間の無錢旅行を試む。到る處の村民壯なりとし、爭うて茶菓を贈りしといふ。其の意氣、實に愛すべし。然れど無錢とはあまりに極端なり。寧ろ旅行し能ふ中にて、最も僅少なる費用を以てせど、此上なくたのもしき旅行なりけむかし。

●うらやましき心　七日の暴風のことは、前號に記したりき。其の後、彼の憐むべき人々に、金品をおくりて、慰籍するものも、少からざりしが、其が中に、宇都宮二條町田島方大久保利世子といへる小女が、左の手紙に、義損金三十錢を添へて、同地の新聞に寄せといふ。

前略、御ゆるし被下度、さて此度箒川に轉落せし汽車遭難者の不幸は、災難とは申しながら、誠に御氣の毒に存候、わたくしは、今尋常小學三年生に候處、兩親より小遣にともらひ候金子、誠に少々にて、御社へ御手數願上候のも、お愧かしきほどなれど、遭難者の義捐金のはしへ入れて、御贈り被下度、偏に御願申上候。

うらやましきこゝろなるかな。

●諫死　山梨縣古關村伊藤市松の妻エイ(二十五)夫の放

蕩よりして、家產の傾むかんとするを憂ひ、數次、之を諫むれども聞かざるより、一書を殘して縊死せり。夫の放蕩固より惡むべし。妻の情、亦、大に憐むべしといへども、猶よく婦德を守り、徐ろに、夫の反省を期せば、必しも、其の志を遂げがたしといふにもあらぬをと、口惜し。

●子孫百餘名　福岡縣上野村、今畑久右衛門、今玆九十二歲、其の妻ハツ八十八歲、共に矍鑠として壯者の如く、五男三女を始め孫曾孫存生のもの、一百三十餘名あり。大方の人皆かくの如くならば如何にたのしからむを。

●支那の女書家　廣東人にして、俠雲女史と名乘る者、其の夫王琴仙といへる者と共に、此の程來朝し、目下神戶に在る由なるが、俠雲性飮と書とを好み、絕て、脂粉を用ゐず、諸人の需めに應じて、毫を揮ひ居れるが、書は、甚だ見事にして、傍ら畫の所望にも應ずと。

●女學講習會　牛込市ヶ谷本村町に、設立せられたり。講師は、辰巳小次郎、小川銀次郎、落合直文、師岡須賀子等の諸氏にして、其の目的及び課程左の如し。

◎女子の品性淑德を薰陶し、兼て、女子に必要なる、普通學及實業を教授す。◎左の三科を置き

◎普通科は修身、國語、漢文、家政、裁縫、編物、唱歌、數學、地理、歷史此外に、科外を設き、大家の講義を聽講せしむ。選科は、右の學科目中、四科以內を選修するものを云ふ。別科は、作法、揷花、點茶の三科目とす。◎本會の生徒は左の條々を堅く守る可し。一會則を守り學藝を勵む可し一溫良貞淑の德を涵養せんことを期す可し。一勤儉質素を旨とし浮華奢侈に流る可らず。一言語動作を愼み決して猜忌の念を懷く可らず。一淸潔を尚び秩序を守り禮讓を厚く可し。

又、夜學講習會といふをおき、英獨語、漢文、數學等を敎ふる由　國語傳習所にて設置せし、女子高等師範學校專修科の豫備科も、日曜を除く外は、同會にて授業する由なり。

●近郊の紅葉　先南郊より記せば△品川海晏寺は古來の名所なるが、近年は楓樹の數を減じたる爲め、昔の美觀には及ぶべくもあらねど、觀るに足らざるものに

はあらず。本月第二日曜より第三日曜までの間なるべし。▲目黒夕日ヶ岡は、目黒停車場より不動に至る途中なる行人坂の岡の名にして、是も昔より紅葉の名所なるが、紅葉せるものは、楓のみならで、櫻、錦木等も交り、銀杏の如きは、全く黄葉と化し、大いに美觀を呈したり。不動境内の紅葉も、賞すべきものあれど、是等の見頃も本月中旬なり▲音羽護國寺境内にも、百株に餘る楓樹あり。最早全く紅葉せるもあれど、十の八九は、未だ青くして、見頃は十餘日の後に在り。▲瀧の川も、若木は既に紅葉したれど、全体の紅色と變ずるは、正に本月中旬なり。▲飛鳥山の楓樹も、亦見頃は、瀧の川と同樣なるべし。▲大宮氷川公園の紅葉も、本月中旬を以て見頃となす。此地も、楓樹のみならで、他木の紅葉せるもの　又は黄葉となれるもありて、大いに賞すべきものあり▲。是より東に轉ずれば、眞間の紅葉とて、名高きものあり。總武鐵道市川停車場より十丁許りの處にして、眞間山弘法寺の境內に在るものなるが、昔より名高き二葉の紅葉は、去る廿年中祖師堂仁王門等焼失の折柄、三株とも燒失し、今あるものは、若木にて、其數は、總体にて百株位もあるべく、是も見頃は本月中旬なり。

●御國の耻辱　畏き御かげによりて、萬の事物、月に年に進み來り、今は、四海のうち、御國のひかりのかゝやかぬ地とてもなけれど、彼の賤しき業を營む婦女の何地といはず散在しをりて、又、日に月に御國の高く潔き名を汚し貶しつゝあり。まことに惡むべく憤ろしきことになむ。然れど、彼等は、彼等よりも、更に、大に惡むべき奸奴のために、遂に墮落せしめられたるもなれど、遺憾の情は、腸を斷つの思あれど、さすがに憐むべきものあり。このごろ時事新報の滿州雜談中、日本醜業婦と題して、此の邊の消息を詳にせり。左に轉載せるもの、即ち、是なり。いとまある折は、是等の談を傳へて、惡漢の術中に陷らぬやう、注意せしめ給へかし。

日本醜業婦　移民問題に次て、近來當國新聞紙に、往々散見するは、日本醜業婦に對する攻擊にして、曰く、

支那人厭ふべしと雖も、醜業婦の來らぬ丈は、却て、日本人よりも優れり。彼等、醜業婦の到る處、一般に、土地の風儀を腐敗墮落せしむるの害毒は、實に、寒心に堪へず。

と、是は、尤の次第にして、之が爲に、他の正當なる男子移民の渡來に迄、反對の氣焰を高めしむるは、甚だ嘆すべきことにして、吳々も、醜業婦の破廉恥鐵面皮なる憎むべしと雖も、少しく内部の事情を聞けは、彼等の背後に、更に、一層憎むべき無賴男子の潜在するとを知る。今、彼等、醜業婦が、斯る境遇に墮落せる、普通の事情を聞くに、彼等は、大抵神戸、門司、長崎、及び、天草近邊の田舍女子にして、全く、世間の事情に暗きを見込み、物慣れたる老婆、又は、男子は、巧に、彼等に馴れ近きて、神戸、又は、門司に行けば、安樂にして、美衣美食に飽きながら、多分の給料を得らるべきなど、口から出任かせに、棚から牡丹餅の話を仕掛くれば、元來、無智淺慮なる少女の悲しさ、左る處あらはこ、甘く、其の口車に乘せられて、周旋を賴み、何は兎に角、父兄に相談せんと言へば、男、又は、老婆は、否な、左る暇なし。最早や船の出帆に迫りたれば、左樣の事しては乘り後くれて、好機を失ふべし。父兄へは、何れ、先方へ到着の上、手紙にて、委しく報知すれば、宜しなど、急かし立て、、咄嗟の間に海岸に連れ來り。晝間なれば、近傍の曖昧なる宿屋に潜まし、暗夜に乘じて、本船に乘り込ましめ、又は、荷物の體裁になして、箱の内に潜ましめなどして、本船に入るれば、本船には、豫て水夫などを仲間に引入れある より、それが計にて奧深かき小隅なとに潜伏せしめ、斯くて、巧みに、醫官の目を掠め、愈々出帆すれば、最早大丈夫にて、扨目的の香港へ來り、小女を上陸せしむれば。其處には、又、夫れ〳〵の仲間ありて、手から手へと、小女を受取り、愈々、醜業を營ましむるの一段となり。玆に始めて、小女は欺かれたるを知り、後悔すれども、最早及はず。身は、遠く、海外にありて、四方、何れを見るも、言語さへ通ぜざる 外國人のみの土地なれば、今更ら、泣きても悲みても及ばず、止むを得ず、納得して、他醜業婦の群に入るなり・斯くて、是より、親方との間に結ぶ約束は、最初、日本に誘拐せる世話人の貫錢船賃、及び、衣服支度等、一切を合算して、假に百圓を要しだるものとせは、之を、親方の帳簿に十倍して、千圓と記入し。此の千圓の借財を辨償せる後に於て、初めて、當人自由の身となることとなるが、其の償却法たる本人が、醜業に依て得たる所得の半額は、食料、衣服料及び、雜費として、親方の手に收め、殘り半額を、前記千圓の借財に入れて、漸次償却するの方法なり。斯の如く、勘定もなく、道理もなく、壓制一遍にて、勝手次第の取極をせられ、之に加ふるに、病氣、又は、不景氣等にて收入の少きこともありて、醜業婦の過半は、多くの借財を負ひ、殆ど生涯自由の身となるの望なく、其の間には親方の都合次第にて、身は、甲より乙へと轉々賣買せられ、新嘉坡より、印度方面に流れ渡るもあり、彼是と、東西に彷徨して、年月を經る内には、當人も、何時しか、周圍の事情に慣れて、片言ながら、英語も話せば、支那語も語り、其の他、馬來語にあれ、カナタ語にあれ、一通の談話に差支なき樣になり、一切本國の事は打忘れ、今は平然として、左迄醜業を苦にせざるあり、又は、一生苦界を脫するの望なきより、自暴自棄するもあり、酒も飲めは、賭博も打ち、遂には、一廉の莫連者となりて、何うとも、斯うともし兼ぬる樣なり果るなり 斯の如く、始め無邪氣なる小女を欺きて、伴び來たり、非道苛酷の取扱をなして、其の膏血を搾ると、一般の所業をなすが故に、親方の收入は莫大のものにして、凡そ、世間に、是れ程割の善き商賣は他にあらざれども、さりとて、自身も、節儉貯蓄して、非常の富を作るにはあらず、結局、矢張賭博飲酒、其の外、あらゆる不品行をなして、惡錢を、再び、元の水の泡に歸せしむるのみ。言はゞ、是等の醜業婦と親方と相依り、相助けて、醜業を營み、醜行を働きて、國辱を海外に曝らすは勿論、其の身も、放蕩無賴の一生を異境に終るなり。尤も中には、巨金を儲けて、本國に歸る女もあれども、是は、比較上、先づ稀れなる方なりとぞ。

教の庭



十一月五日兼題　行路時雨

天　　三河國寶飯郡下地町　永井さい子

海人か家の軒端からんとおもふまに
　しくれすきゆくいそのまさご路

地　　甲府市山田町　名取よし子

もみちせし森のしたみち分けゆけむ
　木の葉ましりにしくれふるなり

人　　四ツ谷傳馬町壹ノ五十四目黒方　都水春子

折をりは木の葉ましりにをがさ打つ
　しぐれのあめのおとぞわびしき

秀逸（數十首）

人めさへかれにし冬のやまみちは
　むらしくれのみゆきかへりつゝ　伊勢　河村君子

道とはん人たにあはぬをのゝへに
　こゝろぼそくもふるしぐれかな　相摸　富田壽子

たらちねの親に逢はんと急ぐ道に
　なとかしくれの降りそむるらん　福島　齋藤はる子

乙女子がかへさにかざす紅葉に
　色やそへんとしぐれ降るらん　芝區　北原季子

行くれてまだこえはてぬ深山路に
　はるゝしぐれをまつのしたかげ　金澤　森みき子

夕日さすゆくての森におとたてゝ
　おちむとゝもにふるしぐれかな　備後　立田原直子

ひとりのみわくる山ちの淋しきに
　このはさそひてふるしぐれかな　伊豫　長谷川松江子

むら時雨降りみ降らすみ定めなみ
　いくたび人の袖ぬらすらん　本郷　河口文子

もみぢばになほも夕日の影みえて
　しくれにくるゝのべのかよひち　下谷　椎野ぬき子

もゝちさとはしる車のうへなから
　こゝろいそがすゆふしぐれかな　三河　石川久子

（以下原稿到着順）

重におふうじのあゆみにさきたちて
　しぐれふるなりささのなかみち　佐々有鄰子

村しぐれふりこそそゝげもみぢがり
　かへる小みちのゆふぐれのみち　佐々小學子

旅ひとのかよふやま路のゆふしぐれ
　はるゝまもなくあはれなりけり　服部倫子

瀧の川きしゆくひとのそでの上に
　もみぢましりてふるしくれかな　山田裕子

ふり來ぬとしはしやすらふ山かけに
われをのこしてゆくしくれかな　淺井靜子

やまふきの花ならなくてかさかれば
やかてそはろあきのむらすめ　曾田なか子

やまをゆけば時雨はれてもつゆしけく
おちてぞかさもとられさりける　中村富枝子

道すがら紅葉をともとながむれば
いろこきまでしぐれしてけり　志楽多久子

晴れくもりしぐれし數は知られども
ぬれてぞかよふもみぢやまかな　佐加井ため子

たどりゆく我あと追ひてむらしぐれ
ふかののみちはにしきしつらん　佐加井さし子

袖ぬれてかはく間もなしつれならぬ
うき世のたびにしくれのみして　辻本たき子

やどるへき木陰もみえずゆきくれて
こゝろほそくもしくれふるなり　羽室象子

夕まくれなれぬやまちのわびしきに
ゆくてもわかずふるしくれかな　高梨松枝

宿からんは里ははるかに見えなから
あしもとくらくふるしぐれかな　名取正代子

たとりつゝゆくてにまよふ雲あしの
うたてしくるゝ木曾のやまみち　坂田喜美子

辿りゆく小野のやまみち日はくれて
なほふりそゝぐむらしぐれかな　内海順子

たちよらんかたもなければかさゝまし
しくれにぬらすたもとならねと　河田いし子

ぬれまじといそげはいそくむら時雨
すき來しかたはいふひさしつゝ　羽田三緒子

ぬれましといそきて道をゆくひとの
あとおひつゝもふるしくれかな　津村さみ子

さらでだにひとりわびしき岡ごえの
ゆくてのそらにしぐれふるなり　田中すゞ子

うしろより雨時のあしぞみえにける
いざたちよらんもりのしたみち　黒田明子

紅葉ちるやまのしたみちゆくひとの
そでほしあへずまたもしくるゝ　那須富子

ゆく路はまだほどとほしまつかげに
しばししぐれをさけていこはん　下田總子

はれくもりさだめなければ旅ひとも
ぬれじといそぐむらしぐれかな　村崎包子

たちよらんはにふの小屋もなき路に
またひとしきりしぐれふるなり　友永章子

笠もかなゆくさきとほきかよひ路に
あられまじりにしぐれきにけり　福原華子

ぬれじとて木の下かげにたちよれば
しくれまじりにもみぢ散るなり　村松月坪

家づとにをりてかざしゝもみぢばは
しくるゝそらにいろまさりけり　依田瀧久子

かゝしたつゆくての刈田ひとたえて
さびしくそゝくむらしくれかな　立田原國子

昨日より今日ぞまされとふる時雨
もみぢみむとてなほいそぐかな　佐加井さき子

みちすがらはれてはくもるむら雨に
まだほしあへぬそでぬらすなり　神村たか子

みやま路をさしてたひちの紅葉かさ
てこ日もわかてしくれてそゆく　木村きく子

さなきだに淋しき野路を行き暮れて
まよふたもとに時雨ふるなり　白岩艷子

大路ゆく人もまれなり小夜ふけて
　こゝろぼそくもあきさめのふる　下田はる子

いてゝこし我ふるさとはしぐるらん
　ふるたびごとに袖しぼるかな　吉田眞子

ましらなく木のまに風のおとたえて
　けふもしくるゝ木曾のやまみち　瀬谷浪子

野邊とほくおもはぬ方へわけゆけば
　ふりもさだめずしぐれするなり　金子蒼生子

立ならんかげだにみねずゆくさきは
　そらかきくらしふるしぐれかな　伏脇米子

かざしせしかへでもあめに紅葉して
　やまぢをいそぐやせのおはらめ　清河照子

いそぎ行くみちにもかゝるむら時雨
　そらさだめなきかみなづきかな　河方喜代子

もゝのふもよろひの袖やしぼるらん
　那須のしのはらむらしくれして　兒平千賀子

しくれ降るやま路にかゝるうき雲の
　晴れまもあらでぬるゝそでかな　山田靜子

一むらのくもたちまよひむくれつゝ
　行く手わひしきさやのなかやま　山田婦美子

はるゝかと思へばやかてかきくれて
　しくれふるなり木曾のやまみち　田代豐子

なり〱は日かけさせとも行く路に
　はるゝまもなくふるしくれかな　田代綾子

さしのぼる高ねは日かげてりながら
　ゆきかふみちにしぐれふるなり　石井豐子

ゆく山ぢ　みぢかつちるおとそへて
　さびしきみねのはつしぐれかな　山田きよ子

ひさはさくかへりし野ぢの村しくれ
　おのれのみこそぬれてゆきけれ　東野さく子

分けのぼる山路は日かけさしながら
　ふもとのさとにしくれふるなり　佐藤恒子

しら菊のいろ香をとめて行くみちに
　にはかにも降るはつしくれかな　萩原章子

ゆく〱も露のたもとのたひなれと
　いかにせよとかしくれふるらん　戸塚鉄子

冬の日のみじかきひにもいくたひか
　みちにあひけるむらしくれかな　中桐杏子

山めくるしくれのあめにそでぬれて
　ゆくてのもみぢしのはるゝかな　伊賀なを子

行く野路もぶりみふらすみうき雲の
　たちまふかせにしくれふるなり　吾妻ちか子

ゆく方も晴るゝもさほきみちながら
　わひしくもふるむら時雨かな　片山あや子

我やとむまちかく見ねてむらしぐれ
　そてにかゝりて行くもわびしや　諸井久眞子

袖かさもかひなくぬれてわびしきは
　やとりもとほき野路のむらさめ　舘脇すま子

足引のやまよりたつと見しくもは
　わか行くさきのしぐれなりけり　藤村幾子

まちまさん親あるものをゆふしくれ
　おもはぬのきにかさやとりせり　戸倉信子

文のやのかへるのみちのむらしくれ
　おもはぬのきにかさやとりせり　竹村貞子

晴れしまにさく急かんさいてくれは
　またもしくるゝふゆのそらかな　大谷美子

晴れくもりふるやしくれに袖ぬれぬ
　たたのかゝしにかさやからまし

ぬれじとて松の木かげにたちよれば
やがてすぎゆくむらしぐれかな　永田うめ子

さして行くさきは時雨にかきくれぬ
いざたちよらむ野路のかさまつ　山下やよ子

いくたびかおのが袖かさかさしけん
ゆけはゆきあふみちのしくれに　日高かず子

おもはすも時雨にあひてみちもせに
もみぢかさすもうれしかりけり　北島松子

いへづとになりてかざしゝ紅葉を
なほそめんとや時雨ふりきぬ　北島功子

いり日さすのすゑをいそぐたび人の
そてぬらしゆくむらしくれかな　上田綠子

いそぎゆくあとおひ風のしくれかな
あまやどりするまつもなき野に　永山豊子

くれぬまといそげど道もはかどらず
そらさへくれてしぐれくるなり　内野千代子

行きくれてたちよるかげもあら野原
またもしくれにそてぬらしつゝ　鵜澤喜代子

はるゝかと見るまに又もしぐれきて
かわくひまなき旅ころもかな　山根久子

はれにけり友をとはんといでたては
ゆくてにまたもふる時雨かな　武谷長榮子

はれやらぬ思ひにくれてたどりゆく
やまのあなたは時雨ふるなり　八木沼里子

おもふどち語りつくしてかへさには
木の葉まちりにしくれふるなり　坂田彌代子

もみぢかりわけて入りにし山ぢの
木のまゝにしくれふるなり　佐野りう子

くさまくら露けきたびにいとゞしも
あはれをそめるむら時雨かな　木村菊子

をりしもあれ過し時雨に山さとの
みちのもみぢはいろまさりけり　石川南江子

むらしくれはれま待たむと道のへの
もみぢのかげにいこひつるかな　石川樂子

ぬるゝともさらにいとはし村時雨
もみぢそめなすなさけおもへは　石川雛子

さしてゆく山のふもとに日はひきく
はれみはれすみ時雨ふるなり　富田郁子

たどりきてしばしとやどる下かげも
もみしましりにしくれふるなり　鈴木秀子

むら雲のみねしころよりいそけとも
しくれのあめに追はれぬるかな　青木治子

笠とりのやまかげなれどゆきゆきて
しぐれにぬるゝわがたもとかな　澤田十萬里子

ゆけどゆけどやむはいつとか袖時雨
今日もぬらしつひるよしもなし　澤田春子

くれやすき冬の日いそぐたびひとに
こゝろなくふるむらしぐれかな　小森田輝子

しぐるれど宿る木かげは落葉して
ぬれにしまゝのたび路なりけり　德水萬壽子

ふみで行く落葉におともなかりけり
しぐれ降る日のもりのしたみち　目黒佐喜子

ねもころの母のことはにそむかずは
みちのしぐれにぬれさらましを　橫山柳子

もみぢ見のみちにかゝれる村しぐれ
木かげによりてはれままたまし　橫山すが子

あきの葉をそめし時雨とおもへども
ぬるるをいとふたひころもかな　青木たま子

隔なくま萩の野へなたさりなれは
おささびしくもしくれふるなり　立田原富子

たま〳〵道ゆくわれなれたしさや
そらかきくらしふるしくれかな　降田槇子

なき人をまつるやしろはちかけれど
しくれにそでをぬらしつるかな　佐藤君子

みなひさはおなじ思のしぐれにや
わがごさ袖をぬらしてぞ行く　徳永そう子

行くれし深やまのみちのさびしきに
そてぬらせさやしくれふるらん　澗本保子

こしかたのまだしちかきを時雨にぞ
ぬれたるそでをいかゞほしてん　石川よし子

おはれつゝゆくや野中のゆふしぐれ
やさりのまつもよそにのみして　石川多那子

我がそでをうるほすものは時雨かや
このゆく〳〵さきのたびをしそ思ふ　石川多喜子

なかからぬ冬のひなれはたびゝさに
みちいそけさやしくれぬるらむ　宮武文子

山ささにおのがわら家にしくれして
ひめもすなきをもいなるらん　今井まん子

今朝ふりし路のしくれのめくりきて
又もやこゝにそでぬらすらん　横手たつ子

聞きあまろ鶺のこみちをこねゆけば
今朝のしくれはこゝも過ぎけり　横手こう子

暮ぬまさこゝろせかれて行くみちに
ひさかけたにてしくれふるなり　梅野玉技子

大原女がつま木にそへしひさむらの
しぐれぞ今日のおも荷なりける　佐々富枝子

はれまにさいそぎて路にわけいれば
もみぢまじりにしぐれふるなり　佐藤さん子

紳無つきしぐれふる野のほそみちに
そてをぬらしてゆくひさやたれ　中原虎子

くやしくも人のなさけをよそにして
かへさのみちにしぐれふるなり　川口德子

路のべはくさはしぼみてものうきに
しぐれふるなりさりあへぬまで　渡邊猪子

そでぬれし人にあひけり晴れたりさ
見ねしやま路もうちしくれけむ　村上みさを子

さだめなくふるや時雨にあまたたび
そでぬらしけりもりのしたみち　田村多豆子

みかさ山けふこねくればさをしかの
こゑしめるまでしぐれふるなり　三木喬子

ぬれじさて来ののまつをさめゆけは
しくれははれでゆぶ日さすなり　伊東いさ子

さほ川のつゝみをゆくはたれならむ
せのささひしくしくれふるよに　伊藤千代子

さして行くすゑのゝ虹はさほからて
みちのしくれにそてぬらしつゝ　加藤數子

行くみちのしくれにぬれしそて笠に
やかてゆふ日のさしてきにけり　服部蔦子

けふもまた山路たさりていくたびか
しくれのあめにめくりあひけむ　河合縫子

かたしのみたてる田道のゆふくれに
いさゞさひしくしくれふりきぬ　賀茂笹子

十一月五日兼題　案山子

天　信濃國東筑摩郡[illegible]阪杵　高砂き代子

世に案山子むかり、いみじう哀れに、はかなき物はあらじかし。風も、雨も、つゆいとはず、弓矢などひを手にして、わき目もふらず立てる、いといかめしき姿は、げに、雄々しき武士のたゞずめるが如く、千町田の瑞々しき、稲のたり穂も、我物がほに打ち守るぞ、いとけだかき、鳥雀も恐れて、端近うは、あさらざるなり。さるを一度、野分にあひて、弓折れ、笠飛びたらんには、其のいかめしき姿の、いつか、ゝはりて、鳥も恐れざるのみかは、笠にとまり、矢に飛びなどして、あざけり顔にまひ遊ぶを、やがて賤の男が、れくて刈りはてたる後には、畔のほとりに打たほれて、かへりみる人もなし。世にかばかり哀れなるものはあらむや。かゝることを思ふにも、げにあじきなきは、世の人のこゝろなん。

地　神奈川縣鎌倉郡長谷長者ヶ谷　佐藤きみ子

たま〳〵、豐けき大御代に逢ひながら、世にはかなきものはかず多し。そが中に、いとゞ哀れなるはそほづになん。世の風に逢ふときは、稲の初穂の荒浪にたゞよはされ、畑の中にたゞ一人、朝には雨降りそゝぎ、身にまとふ衣はぬれ果て、夕べには野分のはげしう、かしらの笠の紐切れて、夢のまにとび去り、頭をさげて立てる風情、哀といふもあまりあり。かゝるうき事、悲しきことをも、物ともせず、田畑をみまもるは、そもをのが主の爲を思うてなん。世にそほづといふものなくば、民のかまどのけぶりや如何ならむ。あはれ、魂も無き、そほづだに、皇國を豐かにし、我大君のみめぐみの片はしを報じ奉らばやと思ふらし。人とうまれてはけまでやはあるべき。

人　伊勢宇治中之切町　河村君子

案山子こそ、いみじういさをあるものなれ。千町の山田、うすく濃く、八束足穂の色づきて、黄金の波ふく秋風に見ゆる頃にしなれば、ひねもす、よもすがら、霜の朝、雨の夕もいとはず、左手に、弓をもち、右手に矢をたばさみ、むかもゝにふみなづみ、いつのをたけびふみたけびて、小鳥、さてはけもの憂をふせぐ、そのいさをしや、何にかはたぐへん。いかに、田子のをやみなき五月雨に、水沫もひぢもかきたれて、早苗植うとも、てりつゞく日影に心こがして、木陰の田井より、釣瓶の水ひきいるゝとも、案山子のいさをなかりせば、田歌のどかに、などうたはるべきや。かまどの烟ゆたかに、などよろこばるべきや。げに神代のむかしいさをありし、久延毗古の遺教をまもりて、かしこきあたりの御幸にも、笠をとらぬは案山子なりけりと、後

の世もうたはれけんめでたさ云ひ知らずかし。

（以下原稿到着順）

名取正代子

世には、健き五体をそなへながら、啻々、人の姿したるといふのみにして、往々、其の務を怠るものあれど、形こそ、遙に見れば、人とも見ゆれ、魂もなく、情もなく、まして耳目のそなへもあらぬもの、朝に、夕に、よく、其の務を怠らざるものは、かの案山子になんありける。此のもの晝となく夜となく雨のあした、風の夕べ、常に、簑を着、笠をかぶり、弓矢を手にして、田畑の間に立ち、農夫が辛苦によりて、實りたる、種々の植物を打守りて、鳥獸などのあさりつゝいばまんとして來るあればうたんずものと、打かまへたる姿は、農夫の爲には、其の功勞幾何なるを知らず。否、農夫のみにあらず、君が爲、國の爲、即ち、社會幾億の人の生命をつなぐべき穀物をして、完全に生熟せしめんと、身を雨風にさらして、いさゝか厭はざる其の雄々しさは、武士のやたけ心にもくらべつべし。こゝろなき案山子すら猶かくの如し。萬のをさとあふがるるもの、いかでつとめざるべけんや。

河原芳子

あやしくもよそひなしたる姿は、おそろしうやつれ、骨もあらはにやせはてたるが。なほ弓を張り、矢をつがへて、穂なみ敷よる田の面に立ち、あるは、黄金色なす粟田にたゞずみてあさりくる鳥獸の害を拂ひつゝ、仁と義とを心となし、世の名利に迷はず、いくその昔よりして、子に傳へ孫につたへて、其の心を守らしむる案山子こそ、世の外の聖とやいはまし。

彼は、いかなる人の末、如何なるこころの人なりしやはしられど、其のいかめしき姿、潔よき心を仰き見ては、いづれよしある人のはてならむやなど、しぬばるゝも、いとおかし。

あはれ、この氣高き案山子の心よりしては、今の世の人の、表を飾り、見る目なのみ装ひて、ひたすらに世を欺きさたなき賜をもて、かげひなたの行のみ多く、たのみがたなき世の人のために、かく正直に心を砕く身の程こそ、いかに口惜しくや思ふらめ。

[illegible]。風にやせ雨にそぼちて世の爲に
たてる案山子の心さもしも

田中すゞ子

千町田の稲のたりほの、打ち招く頃、そがかたへに簑笠を被て、弓のやうなるをもち、男ましげなる様して立てるものあり。これは案山子とて、小鳥の害を防せがん爲に人の造れるなり。小鳥等はじめは誠の人と思ひ、おそれて近よらず、されど雨ふるも、風ふくも動かず、常に同じ所に同じ様して、たてるなれば、つひには、其の誠ならざるをさとりて、少しもおそれずそが笠の上にとまりなどしつゝ、稲をあさる、此處に至りて、案山子は、少しもその用をなさゞるなり。されば、人にして、人の行ひをなさず、物にして、その物の用に足らざるを案山子といふ。あはれ人と產れたらんには、かゝしならぬ人とならまほしきと思ふまゝなかくなん。

瀬谷浪子

みのりそひたる山田の畔に、風はふけど、雨はふれど、やれし簑笠を身にまとひて、矢よりもふときき絃はりたる弓をとり、ねらひの方向をもあらためず佇む様、いとおかし。見なれぬ都人の見たらんには、まことの賤の男ならむと思ひて、言問ふも、まれにはあるべし。まいて、人ならぬ小鳥には、こよなう恐ろしう見ゆるも、理なりかし。

刈りはてし小田のかたすみに取りのこされ、朝の霜、夕の時雨に、衣はやれ、弓絃はくちて、張りつめし矢竹心も萎れはて、木の葉誘ふ夕風にもまれては、ふみしめし足もしどろになり、半ば倒れかゝりたるは、またなくあはれなり。あはれ、秋のなかばの頃には、飛鳥も落す勢もて、稲田の守となりつるものを、やつれはてたる今日となりては、顧る人もなく、小鳥にさへ侮られて、頭より糞尿せらるゝはかなさよ。かくて衣くち、肉落ちて、骨はやがて賤が家の夕げたく料となりて、一片の烟と化し去るなるべし。

雲井の奥に榮華を極めし身も、陋所の小屋に落ぶれては、昨日己れにこびつる人にも、今日は嘲けり笑はるゝ世のならひ、獨り案山子のみかは。

金子鈴生子

田に畠に、諸鳥の作物をそこれんとするを防ぐため、いろ〳〵のさまに作りなして、田畠の中へたておく案山子といふ者あり。何れの世そ、如何なる人の思ひ付きたるわざにか、兎に角に、其の効用をなすこそいみじけれ。抑も人は萬物の靈長として、世にたてる者なれば、形を似せたる者すら、尚且つ諸鳥をおそれしむ。まして生を、此の世にうけ出でたる吾人に於てをや。徒らに寸歩も、世を益する事もなく、ろく〳〵として、貴重の光陰を殺さば、案山子にさへ劣れりと云ふべし。乞ふ、人々、共に倶に、黽勉して、寸毫たりとも、社會のためにはからん事を、切に希望するものなり。

伏脇米子

鈴荒猛雄が、矢を番へて、今もや放たんずる勢ひ、實に恐ろしやと、私語かはして、逃げ惑ひ、漸近くも鳴かざりし雀、賤の男が、年を収めても、な怪瞬もせで、おりつる樣なるに、漸々馴れて、飛び寄り跳れ寄りて、窺ふあり。さて、甚く時雨にそぼち、木枯に吹き倒さるゝ、やがて、弓に戯れ、兜に觸し、目もあてられぬ姿とぞなる。あばれ、素直なりてふ里人すら、利にくみし、利謀きてかへりみぬ樣、かゝり。案山子なればこそ。もし有情のものならんには、そもいかにぞや。と嘆き絶りて、またゞ思ひ續くるやう、むかし、陽城とやらんは、韓愈にそしられしさかや。今はまのあたり、鈴荒猛雄のなれの果を見たり。世の獨立の力なき男、はた女、顧みでやは。嘆きつゞくれど、思へば、女氣もなき、雛のすさびや。今は只、卯下る方なく、空恐ろしう、袖おしあてられて。

河方喜代子

雨ふり、風はげしき折も、田畑の中に、みのかさもて、身をかため、人のすがたと成りいつかな。たわむけはひもなく、村人のおし立てしまゝ、なるこなどひきつゝ、作物に鳥けたもの—かゝらんを、ひたすらふせきつゝあるは、いさ〳〵目出度ものにてなん。さあれこそ、田畑を作る人々の、手たすけとして、ふるきより係らるゝかゝしてふものなれと、其おこなひの、いと目でたさは、六尺の人も、此かゝしに、おさ〳〵をさる者あるとおもへは、一入、此かゝしなつかしうてなん。

佐々有鄰子

山田のそほど、といふものなりと、神代よりいひ傳來りしごとく、足はあるかねども、朝より夕かけて、稻穂にむるゝ、むら雀を、弓矢たばさみ、簑笠とりよろひて、田といはず、畑といはず、秋のみのりを豊ならしめんと、蒼生のために、心をつくし、風の日も、雨の夜も、しばしのいとまもなく、いそしみつとめ、地球のたゆみなく、回がごとく、天津日のうごくことなく、四方八隅を見はるかして、つゆもおこたらぬは、此處の田畔に立すくみし、破れ案山子の躰になもありける。あはれ、此の案山子の勳功は、千秋の長五百秋に、田人等が、神とも神と、稱揚して新甞祭の忌場にも、種種の供物をなして、報賽の誠をつくすなり。あななづかしき、姿なるかも、露にやつれたれども、風情ゆゆかしくみゐて、百姓の富をまさしむるものは、案山子のちからあづかりて、大きなりといふべし。

西川順子

雨ふれば、小田のますらをも、暇ある、淋しきあした、はげしき風の吹きまくなべに、草かる乙女も、かへりし夕、身にまとふかさも、衣も破れはてゝあはれはかなき姿とはなりぬれど、おのが天職を、盡さん爲には、風雨も厭はで立てるなり。たにぎりもてる小弓を放たば、あはれの小鳥の傷つきやせん。よしや、放たずとも、心そ怠りなくまもらましかば、田づらのをしれ、損ふ事もなからまし。秋はてぬれば、さふ人なしとて、みぢかき命をあはれむ人も、あめれども、おのがつとめをつくしをへつとおもへば、つゆうらみともおもはねず、眼はしくたてる里の稔りの、ひろきみそらに、みちみてる折にこそは、わがいさをしのあらはるゝなれ。かくて身ははかなくなりはつるとも。心は、極みなきよろこびにおもはるなを、かなしむ人こそをかしけれ。

齋藤はる子

春の幼芽の生ゆる頃、秋の菓實の熟する折、破れかゝりたる笠を頭にかつき、やつれたる着物を身に纏ひ、手はに弓箭、或は形ばかりの鎌なさを持ちてこのもかのもの田畑の間に、いさいかめしく立てるのは、即ち案山子なり。さて此のものは、何の用をなすかさ云ふに、雀や烏、さては犬や、狐なごの、害を防くものなり。其の形の上より初めの程は、鳥獸恐れて、近よらざれご、風のために倒され、雨のために濕はされて、骨を露はすさきは更なり。終始同じ樣子にて、一所に立つから、はては、之れに狎れ、すこしも恐るゝことなくなり、自由に作物に害をなすに至るものなり。あはれ案山子よ、一時は恐れられ、しばしにして狎れらるゝか、人も亦これさ同じ、如何に身にはあや錦を着、口にはけ高きことを言ひ放つさも、心の中に、誠の學識さ道德さなからんには、そのしるしなきなり。獨り案山子のみかは。

大谷奨子

かみな月の始めつかた、村には太鼓の音聞ゆ、里人の笑ひさよめくは秋のみのりれ悦びてなるべし。其の頃笠をかさゝを被り、左手に弓を持ち、めでに矢を携へ、ひねもす、けはひいかめしううねに立つは、此かゞしなり。其の始めや、群れくる雀などのうかゞひねて、なゝのき、敢てあたり近き家にだも近よらざるなり。さるを後、まことならざるふしさとりて、頭にたはむれるもをかし。あはれ、やまさの女達、たゝにけはひの文明のみまねきて、實なき花ならましかば、はた、このかがしにことならざらん。つゝしまでやは。

永田うめ子

身にはつゞれをまさひ、頭にはやれ笠をいたゞきて、雨降りしきる朝も風吹き荒ぶ夕も、はたのもなかに、われこそはさねたり顏して立てるものは、案山子になんある。百鳥は、これを見て、誠の人さ思ふにや恐れて近づきだにせず。されご、一月を經、二月を過ぎぬれば、その動かざるに、目やつくらん。ものいはざるに、氣やつくらん。穗をつみ、實を食ひ、はては案山子の頭にさへさまりて、歌ひ囀づるに至るなり。あはれ案山子よ、汝はなど、かくいひがひなきものならん。人もまた、自ら德を修むることなく、學を勉めずして、人の目をあざむかんさするものは、此の案山子に似たりさやいふべからむ。修めでやは、勉めでやは。

山下やよ子

おのが心をみがこんさはせで、玉のこがれに、その身をかざり、あるは、わがつさめだにねなさで、いさゝき事にも、ほこり顏する人の、いさ多かるぞうたてき。千はやふる神代の昔、足はあるかれども、天の下ことごとく知り給ふてふくゑびこの命、やがて山田のそふごさて、なほ今の世にもおほたから等が、さりつくる田なつ物、畑つものの爲に、鳥獸を防ぎてたてる、案山子よ、汝は、かく美しく卑き、態度をもちながら、つゆほこるけしきもなきのみか、雨のあした、風の夕やれたる笠さ簑さに身をかため、手に弓矢をもちつゝ立ちつくして、惰らず、やがて、其のわざ終へて後は、心なき賤の男らが手に、かいやらるれども、いさゝか恨むさまもなし。あはれ、かくまでに、心高くいさぎよきものはあらじ、噫この案山子にはぢざる人、まこさ世にあるべしや。

木村菊子

天智天皇のの給へりし、我衣手は露にぬれつゝの如く、秋空のいとも淋しう物あはれなるに、田中に、一人立てらんは、いはでもしるき案山子なりけり。そも此の案山子は、身に甲冑を着かざり、手に弓矢もて、われは顏にも立てる、いさ勇ましけなり。うべ、雀などの恐れわななき、近きあたりにナ一行らず、いかに食まゝほしき、稲粟のあらむも、たねて取ることさなし。しかのみならず、膽病なる人も、時々おごろかさるゝさかや。さるに、しか恐らるゝ案山子も、一度烈しき雨風に遇ひなば、いかめしかりし甲冑も、破れ損ひ、身さへ保つこさ能はず、果ては雀なごも頭にさまり、手足に戯むるゝに至らむ。あはれ案山子のみならず、世には、これに類する人も多かんなり。そは、いたり深かくぬ人の、己が學藝を、人にほこり、人を下しみて、己れには時得がほなるも、一朝世

に浪風の遇はんには、彼の案山子の如く、世人にあざけり笑らふをうけむかしな。

市村さく子

あはれ、かしらに破笠をいたゞき、身に、古簑をまさひ、手に、矢弖を携へ、天空を家屋さなし、酷烈なる寒暑暴風をいさはず、田畑を守るは、所謂、案山子になんありける。それ、田隅に案山子あれば、鳥之を見て、そが近きほさりの、禾稲を啄せず。獣之にのぞみて、作物を害せず。よく田畑を保護す。あゝ彼が如くにして、猶生活上、欠ぐべからざる、食物をまもるに、況んや、萬物の長たる人や。武を練り、學を貴び、以て國家を守らざるべけんや。

内野千代子

案山子は、何の役にも立ぬやうに見ゆれども、なか〳〵、人に出來ぬ働きをなすものなり。其の役鳥おさしにて、さま〳〵の姿になせども、大むね、人の姿になし、やぶれ蕉笠を付けさせ、弓を射る樣になし、米麥のまき始めより、かり入れまて、田畑の中に立ぜ置くなり。されば小鳥おそれて、づゐばむ事なし。若しかゞしなく、田畑へ種をまき、おくときは、數多の鳥、みな口ばしにてほり食ふ。又みのりし實も、ついばみ食ふ故に、農家にては、一日たりとも畑へ、かゝしをおかざるを得ず。されば、其の働大なり。人にも、又、外面おろかの如くみゆる人あれども。おもひの外かしこき者なれば、なか〳〵あなどられぬものぞかし。

八木沼里子

やれがさをいたゞき、つゞれをまさひ、朽ちにし竹刀を横へつる、案山子よ。雨の朝、風の夕、廣き田面にながしうたゝずまひて、足穗にさわぐ村雀を、驚かしつるは、魂なき、なれの身さしては、そのいさをいささはにぞある。こは、實に、田子が、春秋の心つくしを、むやくにせまじさ、吹く秋風の肌寒げに、おのがつさめをつくしけるは、やがて、世の中のたのしき基さなればなり。さるに、四肢軀幹、及び、たふさき魂さへ、またくそなはれる人さ生れて、いたづらに、飽食暖衣を旨さして、この世の爲めに人、一のなすこころなからんには、田の面にたてる案山子にもおさるとこそいはまほしけれ。

都水春子

頭には小笠を戴き、身には簑を纒ひ、手に小さき弓を持ちて、田中に立てるは案山子なり。稔りの穗波たつ頃より、たわゝに實のる秋の末まで、あるは照る日にさらされ、雨露に打たれ、亦ある時は、烈しき風に打まさるれど、千町の小田を守りて、群れ來る雀等を追ひ退け、あるじをして、心安く秋の實りを樂ましむる功ぞ、いみじかりける。されば人も、形ちは、遙かに勝るとも、爲す處もなく、空しく、身を終らむには、此の案山子にも及ばぬ者とこそいふべけれ。

宮武文子

秋の田のかりほの庵のさまをあらみ我衣手は露につれつゝ、とのたまへりしごとく、秋の田の世に重むぜらるは、なべて人の知る所なり、扨、秋の田に、一入、寂しらに立つものあり。こはいはでもしろき案山子なり。抑、案山子といふものの姿を見るに、朝の露けき時にも、夕の煙立ちまふ時にも、只、一人のみ、秋の山田に、寂しく佇めるを、誰しも哀れと思ふらむ。さればにや、古の人の歌にも、山田守る曾富騰の身こそ悲しけれ秋暮れぬれど問ふ人もなし、とかいはれしは、げに理なりかし。殊に、斯く、雨に沐ひ、風に梳りつゝ立つ朝は、何の爲なるかと、人問はゞ、やがて、案山子は、其の秋の田のみのらむとする頃にいふも、野中に佇みて、實を食る鳥雀の類を追ひ拂ひつゝ、田人に、其のにたなつものを得させんとて、己が務を盡せるなりといらふらむ、されば、彼の寂しげなるは、一目哀れむべきも、其の我等の爲め、かよなう勞けるを思へば、頌禮ふべきものなりかし。さはいへど、其のいかめしく、弓矢を手にし、あからめもせず、そゝろき立てるを、遠より望まば、いと恐ろべく見ゆればにや。そが立ちたる朝わたりは、瑞々しき稻あるも、美はしき粟あるも、鳥など、皆恐れて近寄りだにせぬを、若し野分たちて、其の姿の傾き、弓矢とる手も、萎ね〳〵しう、某の物語にいへる、男の都の人見たらん武士のやうなり。果てむ折には、途

に鳥ども、これを恐れざるのみかは、皆侮りて、其の弓にとまり、矢をついばみ、或は裾を引き、足を嚙みつゝ、笠などには、正なきものをひりかけなどして、嘲り顔にもふるまふめり。人も、其の身を保ち、其の行を修むる時には、他人にもたゝへられむよと、若し、惡しきふりに目慣れて、邪なる道にふみまどひ、我直く正しき閾ぶりをわすれたらむには、皆、この案山子のごとく、世にも笑はるべし。つゝしまでやはあるべき。

長谷川まつゑ子

眞金とくてふ暑き日にも、いそしみし、賤の男の心づくしの秋となれば、稻穗に結ぶ露の玉ゆら吹きかへす風に、打なびく田の面に、簑笠もて身をかため、弓矢とりて立てるは、案山子なりけり。其の姿いかめしく、且おそろしければ、餌ひろはんと、打ちつどふ鳥も、我がちに逃れ去りて、あたりへも近よらずなん。されど、野分おとろへくしう吹きすさびて、あはれ、頼みし簑笠も破れ、弓さへ、矢さへあらずなれば、たばかられつと、群雀などの、彌つどひ來て、其のあたりさびかけり、はては、恨かへさんとにや、嘴もて、眼と思ふかたをも打ちくじくめり。古人もいひけんごとく、驕る者久しからずとかや。まして、己が心にだになきを、人目のみ打つくろひたる、此の案山子のたぐひなるべし。

村上みさを子

守るかは、まもらさるかはしられねども、かゝしは稻のと、人のうたひけるは、まことなりけり。おのが身には、秋風のわゝけたる衣をまとへと、弓ひきしぼり、征矢うちつがひて、よらばいとらむと、まちかまへたる、其のをゝしさは、いかなる鳥けたものか、あたりをながすへき。げに、秋の田の守り神とたゝへつべし。わが身のゆくすゑは、かへりみるにいとまあらず、世の人、とかくに、英雄の末路をとくは、そぼづの心にはかなはさるべし。

寄海祝　長澤いゑ子

限りなき大うなはらのやしほちも
　うらやすらげくわたるみよかな

暮林鳥宿　福原菫子

くれ近く林の中になくとりは
　ねぐら忘れし友や呼ぶらん

名所瀧　山田新子

見あくれはそいろに寒し久方の
　雲よりおつる布引の瀧
おく村大人の御園の萩まさかりになりぬ
さてまねける其の日雨そほふりけるに　矢野ふま子
ふるあめに露の玉ちる秋萩も
　君がかたへになうちなびく覧

庭中菊　志田芳子

百千草うつろひはてし庭中に
　白菊ばかり咲き匂ひけり

小學校女子部落成式祝文　德永廣子

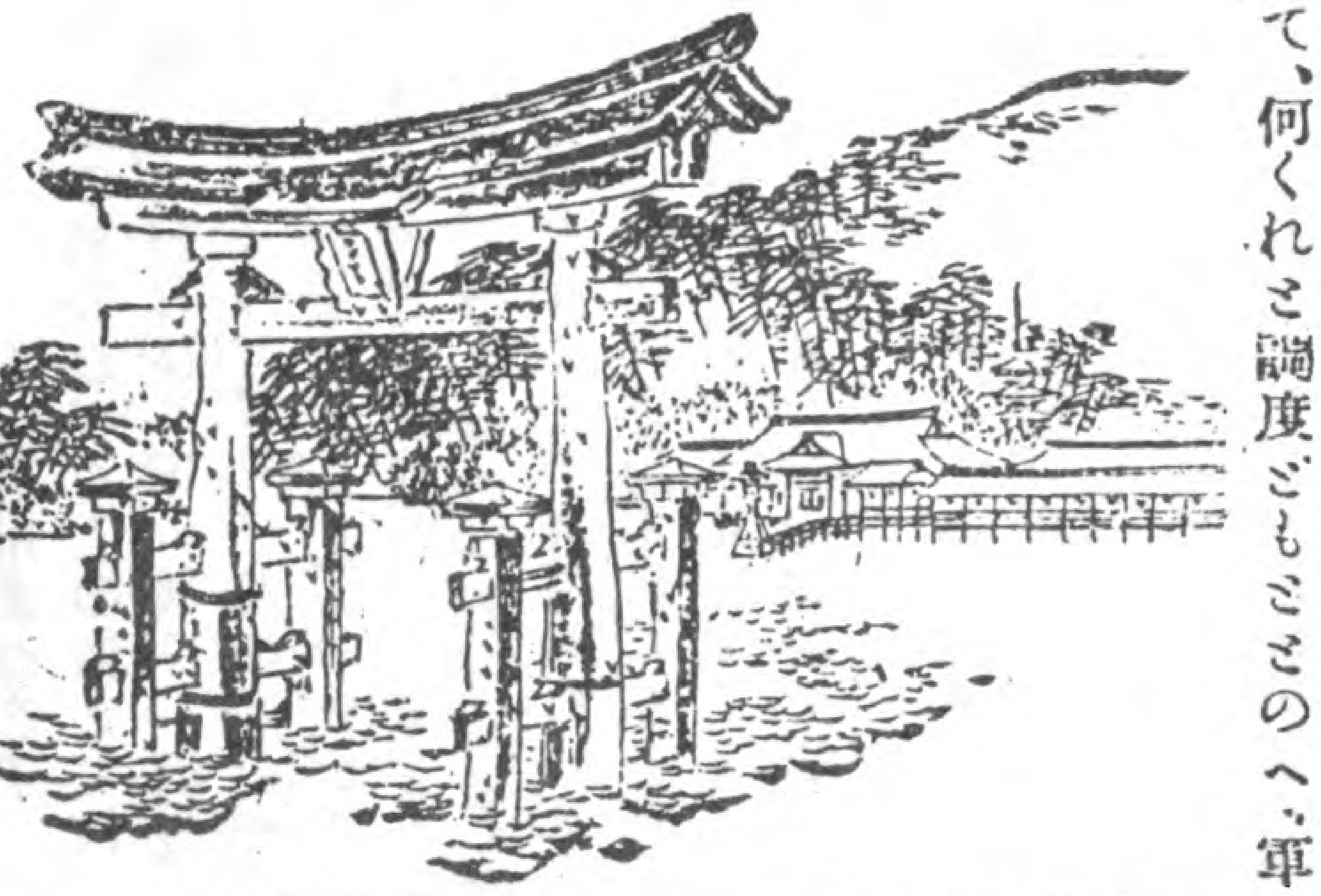
ひらけ行く世の幸は、うち、日さす都をはじめ、足引の山里、もしほやく浦人までも、學の道にすゝみゆくこと　いとめでたけれ。此度箭筈獄の麓、ながれさやけき菊地川のほとりなる隈府町に、高等小學の女子のをしへ草、學の場のありけるに、日にけにしげりゆくなでしこの、學ぶべき家居のたらはざりければ、新に、きよらかなる學校をしつらはれぬ。まだ咲もそろはぬ女郎花のかずかず、大御代のめぐみの露にうるほはぬものなかるべし。あはれ敎師のふかき勳功は學の友どちとゝもに、うやうやしく行末ながくさかねかゝやかむことをねぎまつりてかくなん。

さきならぶ數へのにはのをみなへし
　いろかあらそへ八百よろづあき

嚴島詣の記

木川里子

丁酉の年、安藝國吳港に住たまへる佐伯の君の許にまゐりぬ。君、いささか、公のいとま得たまひしとて、妾をはじめ、人々を引つれ、嚴島詣にご出でたち給ふ。朝とく起き出て、何くれと調度どもとゝのへ、軍港部の前なる波止塲にいたれば、かねて用意せられし小蒸汽船、煙をあげて待居たり。皆々これにうちのり、やがて、港をいでぬ。空いと清くはれわたり、浪しづかに風かろく、海面は、鏡しきわたらんさまなり。遠近の島嶼、みわたすけしきいはんかたなく、九時ごろ島につきぬ。大なるいはほ、あまた海の方にさし出て、屏風引きめくらしたらんやうにて、けしきある松の青々と生たるに、白き波の、いとしづかによせくるなど、とりどりあかずおもしろし。社の方に歩をはこべば、島も猿も、つながれたるが人馴れたるさまいとをかし、案内者の導に從ひて、先づ御神の大御前に詣づ、それより、ここかしこ。見歩くに、海の内外の名たたる人々のものせし書畫はさらなり、古今にすぐれしたくみどもの造なしたる像など、かぞへあへず。其の他にも、



寶物いと多かれど、こまかにものするいとまなくてやみき。宮殿は、平氏の盛なりけるころの建ものとて、ものふりて、いとかうがうし。今日しも、舊暦の神無月の中の七日のこととて、潮滿ちきたりて、大鳥居あけの玉垣、鏡池も、たた一面の海原となり、八社の御殿の、浪にうかべるさまは繪にかきたるよりも、はるかにまさりて、龍宮とやらんのさまもかくやとおもはる。日本の三景といふらん、實にことはりなりかし。やがて、社地を出て、みけん山を馬手に見あげ、市の方にいづれば、しばしがほどに紅葉溪にいりぬ。實に、名にたがはず、見わたすかぎり錦をさらし、こゝかしこに、松のむらむらと交りしさま、なかなかをかしく、初冬の空とて、やうやううつろひそめたるが、吹風にはらはらと二葉三葉ちりて、清き小川に流るゝけしきは、立田川の秋ならねど、わたらば錦をも口すさみつべく、盛のころにもいやまして、ひとしほあはれふかく。小男鹿のうちむれて、人に馴れぬるさま、またいとめづらし。ききしにまさるながめに、れいのこしをれもとみにはいです、口をし。やがて、某の旅館に入りて、ひるのものなどたうべて、しづかにかへるさにつき、小蒸汽船にのりこみ、あかぬ心をけふりともにのこしおきて、島をはなれぬ。そも此の島には、ふるき世の跡、いと多けれど、わきても、平氏の盛なりしころ、毛利元就卿の陶某を討亡し、芳名を天下に擧げられし事など、そぞろに思ひいでられ、波間に隱るゝまで、彼方をかへりみつつ、黃昏ごろに、吳にかへりつきぬ。幼きころ、教の庭にて、地理誌と云ふを學びしより、久しく名のみは知りつれども、今日まのあたりとは、實におもひのほかのことにて、うれしさたとへんかたなし。後日のおもひ出ぐさにもと、いささかもののはしつかたにかきつく。

伯爵副島種臣題字

堀内文麿編

再版

家庭の鑑

菊版美本
全一冊

定價金拾八錢
郵稅金四錢
郵券代用一割増

本書は章を親子、兄弟、夫婦、繼母、嫂、養子、師弟、主從、朋友、寡婦の十章に分ち明治の現代に於ける忠孝節義友愛貞操等の事實を詳叙せるものにして句々血を吐き言々人の肺腑を貫き讀むものをして感奮興起感極つて殆泣かしめむとするものあり書中收むる所のもの或は勅定の緑綬褒賞を賜り或は地方の美事として旌表せられたるものなれば皆是人の子弟婦妻の模範に供すべき事實なり之に加ふるに婉麗哀痛の筆を以て事實を精密に寫したれば其情味の津々たる實に小說を讀むが如く身恰其地にありて其境に臨める感あり今や刻成りて出版す世の教育家父兄及子弟婦妻の坐右には一日も此可憐の書冊無かる可らず家庭及學校にも亦必此種の冊子を備へざる可らず、

細川十洲翁序
三輪田眞佐子著

第八版

女子の本分

金銀摺 彩色表紙 大和綴 優美

定價金二十五錢 郵税金六錢 郵券代用一割增

曩に三輪田刀自我邦女子道徳の頽敗に赴く日に甚しきを慨し本邦固有の道徳に基きて此書を著し以て我邦の婦女子に其本分のある處を示さん事を期せらる本社の一たび之を世に公にするや忽にして再版三版を賣盡し六版七版猶需用を充たすに足らず賣盡せり女子教育の爲聊貢獻する處ありしを喜ぶ今や改正條約實施外人雜居の曉に際し益女德を涵養し貞淑賢良の婦女を養成し雄大忠誠なる國民の慈母たらしめん事を望むや切なり、今回同女史の訂正を請ひ茲に新に八版成るを告ぐ冀くは世の婦女達の一讀を望で已まざるなり

目錄

西村茂樹翁序　三輪田眞佐子著

女子處世論

五版

●定價金貳拾錢
●郵稅金四錢
●郵券代用一割增

三輪田女史の婦人教育に於ける其の薫陶化導の良績夙に女子教育社會に推重敬服せらるゝは敢て贅言を要せざる也先に女史我が國婦女子に本分の在る所を示さんとして女子之本分の著ある本社之を世に公にするや七版忽ちに賣盡し八版の成るを告げたり世間の高評知るべきなり女史又本書を著述し女子處世の心得を說く温厚着實を旨とし其の理義を丁寧反覆す世の婦女子たる者坐右一日も缺く可らざる良書たり今や四版賣盡し五版成るに至る冀くは世の婦女達及父兄幷に女子教育に重大なる責務ある教育家諸士の一讀を望むや切なり、今左に其の目次の大略を掲げぬ猶詳細は本書に就きて見られよ

目次

社告

○代價は通貨又郵便爲替小爲替銀行爲替及通運にて本社へ御直の事
○郵便爲替は東京新富町郵便取扱所へ御振込可被下事（郵券を以て代金に換用せらるゝ時は一割增の事○別に領收證を出さず金員領收の上は直に女鑑を發送すべし若強ひて領收證を要せらるゝ者は別に書留郵送料送附の事○未納税の來書は一切受取不申候事

女鑑

毎月五日廿日發行

定價		廣告料
一冊	拾錢	五號活字廿三字詰一行金二十錢
六冊前金（三ヶ月分）	五十五錢	
十二冊前金（半年分）	壹圓	
全國無遞送料		

明治三十二年十一月四日印刷
明治三十二年十一月五日發行

東京市京橋區築地二丁目二十一番地
編輯兼發行人 川崎直衛

東京市京橋區南八丁堀二丁目十一番地
印刷人 並木良雄

東京市京橋區築地二丁目二十一番地
（電話番號新橋八八） 國光社

山羊印 **實用時計日本一手販賣廣告**



瑞西國ロックル、ファブル、ブランド製
日本國横濱市舊居留地百七拾五
ファブル、ブランド專賣

●價八圓半　銀魚子側片硝子器械ニッケーアンクル龍頭卷

●價拾壹圓　同卷上髯無双側

●價拾　圓　銀魚子側片硝子器械ニッケーアンクル卷上髯龍頭卷

●價拾壹圓半　同無双側

●價拾壹圓半　銀魚子側器械ニッケレーアンクル卷上髯惣石入

●價拾參圓　同無双側

此山羊印實用時計ハ三十年來横濱「ファブル、ブランド」商會の專賣にして確實精巧なる實驗に於て下の信用する所となり頻に其需求ありさ雖も瑞西國造所の都合に由り十分ょ我國の需に應ずるを能はざしが方今に至り漸く多數を製造するの準備も整ひ新約實施に由り日本に於て商標登録の特許を得たり右「ファブル、ブランド」商會ハ高名なる老舗なり内開放の今日自ら其販賣を爲して遺支なきょ我天賞堂信用最も全國に厚きを知り特ょ一手販賣を委托せらたり是れ本堂が營業上に於て榮さする所なれば今よ益々勉强して此委托を全くせんさす

此時計ハ山羊の形さ「ファブル、ブランド」の文字を印したり其重要なる特色ハ

⊙其側の製作厚重にして魚子の挽方規則正しく優美な

⊙針面の分度最も精確にして分秒も誤ると無し

⊙器械の構造最も精工にして地金の鍛練に注意したげ摩擦の患あると無し

⊙器械の石軸ハ皆良材を用ひたり硝子或ハ練物等とふると決して無し

⊙是が爲に保存は實に久に耐ゆるなり

本堂寵眷の貴紳士貴婦人此山羊印實用時計を實驗あて其効用を知り玉へ

東京市京橋區尾張町二丁目十六、十七、十八、十九、二十
電話番號新橋三百三十三(長距離加入)

時計及寶玉類
貴金屬美術品　商　**天賞堂**

天賞堂出張所々在地

●東京市神田　●横濱市　●名古屋市　●大坂
●廣島市　●熊本市　●長崎市　●福岡臨時　●小樽臨